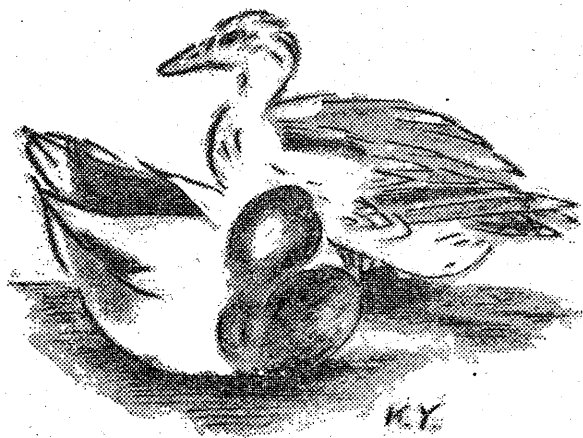


北辰



158



北 辰

一五八號

目次

架空「絵」の偷盜者の自訴……………	今村義昭……………	一
空想家と死……………	西田正夫……………	三
詩……………	德村彰 青木裕隆 畑尾尚雄 西辻明……………	二〇
習慣について……………	松下圭一……………	二六
科学論の研究……………	芝田進午……………	三七
レトワアル・ポレエル……………		三三
短歌……………	大沢先生 永見克茂……………	三三
俳句……………	伊藤完吾……………	三九
編輯後記……………		四〇
表紙・カット……………	山瀬邦良画……………	

第四高等学校卒業生著書目録

第四高等学校文藝部編

架空「繪」の偷盜者の自訴

今 村 義 昭

私は、私は偷人^{なすど}です。私があれば偷んだんだ。確かです。はつきり申し上げます。絵です。絵が私を、いや、私が絵をとつた。それも、只の絵ぢやないんです。悪い。全くひどい。誰が見たつて許されない事は分りきつてゐる。罪人だ。悪人、危険人物です。さあ、このあはれな白痴に縄をうつて、打つなり、蹴るなりして下さい。それがいい、戒めなら牢獄へたゝき入れて、手ひどい労役を課すなり、なんなりと、苦しめて、苦しめ抜いても構ひません。承知の上です。覚悟して來たんです。身から出た錆だ。さうなつた方がいゝんだ。私こそ、あの絵の偷人なのです。小心な、いつもおどくして、人の前へ出ても祿々口もきけない様な、内氣な、いや、違ふ、嘘だ。大胆な、類の無い程大胆な、馬鹿な呪はれた偷人。モデリアニ。これが私の仲間の名。この人は淋しかつたんだ。一人で切なくつて、苦しくつてどうにもならないで、自分の身体^{からだ}を滅茶苦茶にして絵を書いたんだ。分りますよ。あんなやりきれない絵を書く人は不幸な人にきまつてます。僕は共鳴しちまつた。「横臥裸婦。」もうたまらなくなつてしまつたんです。あの女の哀切な感傷と陶酔が、酷薄の人生を宿命として諦めにとざしてちつと見詰めるあの眸が。救はれぬ亡びの人なんだ。仲間だ。一諸に居るのがあたり前だ。離

れちやいけない。とさう思つたらもう夢中になつて駄目。ひどい思ひ上り、逆上です。この執念深い、病的な、執着性といふ奴め。でも、私はどうしたらいいんだ。臍^{はら}腑^ふを掻きむしられる位に苦しいんです。この頭をがんとその机の角へたゝきつける。こんな狂ほしい氣持ち貴方には分らないだらうなあ。私を、ねえ貴方は私を氣狂ひだと思つて居らつしやるのですね。もう全然駄目になつた。瘋癲病院へたゝき入れて監禁しなければいけないような、一人前の狂人だと思つて居るのですね。厭だ、私には耐へられない。違ふ。そんなことがあるもんか。私ほませうな人間なんです。僕は氣狂ひぢやないんだ。氣なんか違つてません、正氣です。私は正氣でものを言つて居るのです。間違へないで下さい。私はほんとの事を言つて居るのです。この通り氣は確か。さう、私はこゝへ自訴に來たのです。こゝは警察署、貴方は警官、私は絵の偷盜者。罪の訴へに來たんだ。これでもまだお疑ひになるのですか。お願ひです。狂人あつかひにしないで下さい。僕は狂つてなんか居やしない。世の中の治安を乱す者は、世の中が処分しなければいけないんだ。僕は邪魔者だ。だから、処分してもらひに來た。よく承知して居るのです。牢獄へ入れられるかも知れないも分つてます。それだから、ね貴方

は、本氣になつて、私の訴へよく聞いて呉れないかなあ。

三日前、あの絵を盗つたのはこの私です。モデリアニの「横臥裸婦」さうです。あの絵の儼人は確かにこの男です。絵ですか。絵は私の家に置いてあります。あゝ、あの絵、女のあの碧色の瞳が私を凝視して居る。狂ほしい位の官能の悶へが身をしびらせる。あの女が僕の心を奪つたんだ。あゝ、畜生、うらめな女め！氣を落着けて？氣を落着けるとおつしやるのですね。落着いて居られるとお思ひなんですか？馬鹿。そんなこと言つたつてどうなるんだ。さうです、氣を落着けなければならぬんです。私は今日逆上過ぎてますね。感情の整理が出来ないのです。それ丈です。私は正氣なんです。心を静めてお話し致しませう。僕はつとめて感情をおさへます。でも、もし又興奮しちまつて、とりとめも無い事をしやべつちまふ様なことがあつたら注意して下さい。私はこの事件のすべてを隠さずお話ししたいと思つて來たのです。でなかつたら誰が狂人扱ひされに、こんな処へ來るもんですか。私は、私の氣持を、ぶちまける積りです。だけど私は、誰からも私の心理を詮索されたくないのです。これは本当の氣持。贅沢な願ひだけと生意氣みただけどほぢくられるのは厭だ。人から詮索される位なら、知り得ることは、自分で言ひます。また他人のどんな詮索も、私とこの絵に關する事柄には何の意味もない事を私は知つて居るんです。あゝ、口は、口つたいことを申上げました。勘弁して下さい。それはたまらなく厭なんだ。貴方が只このあはれな男の自白を黙つて聞いて下されば、それが私には一番いゝんです。

私が最初にこの絵を見ましたのは、五日前のことでした。五日前

言つて、おまるを六つも付けて、他愛ない話ですけど聞いて下さい。黒板の横の、生徒が皆眼の付く処にはり出し、この絵が一番うまく書けました。少女と薔薇がとても美しく書けて居ますね、と涙流しながら皆んなに言つてきかせ、私も悲しく、そうしてはづかしい様な、うれい様な、その氣持が心に残り、一生懸命絵を勉強して、今に本当に、それこそ立派な絵書きになるんだ、と固く決心して、小学校から中学を卒業するまで、図画では、いつも点数がよく、絵だけはクラスで一番うまいと、自分でもさう思ひ、人も認めて呉れ、ます／＼自惚れ、さう、丁度中学を卒業する年に、その地方の美術展に出品したのが運よく入選し、入選者の中で最年少者とか何とかで、將來を囑望される少年画家だ何て、地方の新聞にもちよつと出て、ようし、東京へ行かう。さうして勉強するんだ。と思ひ立つた矢も楯もたまらず、こんな時にはいつも、「今にきつと、立派な絵書きになりますわ。」つて言つた若い女教師の言葉が思ひ出され、元氣付けられ、本当に氣違ひみたいに東京へ出て來て、さうして駄目。あつちの人にも、こつちの人にも見離され、いゝ絵書きになんかなれるもんですか、あの女の先生は馬鹿です。とんだ見当違ひだ。いや、さうじゃない。僕が馬鹿なんです、おつちよこちよい過ぎました。さうして、結局この頃は只もう野良犬に呉れてもおしくない様な絵を書く事丈に生きて居る。いや生きて居るといふより、死なない様にして居ると言ひ直した方がもつとびつたりする様な男になつてしまつたのです。妻君や、子供にも飯を喰はせることの出来ない様な男ぢやありませんか。私の妻つて言ふのは、これはたまらなく優しい女なんです。あんないゝ女に飯を食べさせるこ

の午後だつたのです。その日、私は、いや、私といふ人間が、どんな男か、それから先に申し上げませう。私は御覽の通りみすばらしい青年画家です。貧乏画家。名前なんか誰も知りません。でも画家だ何て言ふと、一人前の人間に聞えるけどそんな画家ぢやないんです。それに貧乏だなんて言つて貴方の同情を牽かう等と、私は毛頭こつから先も思つて居ないのです。自業自得なんです。それが当り前なんです。言つて見れば、何もすることの出来ない、能無しのぐうだらなんです。小学校のまだ小さい時分に、兄から少女と薔薇の話をして聞いたといふ人だつたかしら、さうリルケ、その人の小説の一節だとかで、臨終の少女の眼がいつまでも悲しくひらいて居て、いくらとちようとしても死んだ貝殻のやうに音もなくあき、何も見えなくなつた人間の眼が無邪氣にいて居るのが堪へられなくて、咲き残つた薔薇のつぼみを剪つて來て、それを眼蓋のうへにそつと重しのやうに載せると、女の眼はもうあかなかつた。一夜夜つゆにぬれて、すずしい朝風のなかに冷え乾いて行くやうに女の体は冷たかつた。そのとき、ふと女の顔に何かうごいたやうな氣がして、はつと凝視すると、部屋のなかには静寂で女の左の眼の薔薇がすかに搖れた。右の眼のうへの薔薇のつぼみがだん／＼おほきくなり、女の顔はもう死の親しいやすらかさに帰つてゐたが、二つの眞紅の薔薇だけが別の人生をみて居る無邪氣な眼のやうにそつと開いた。死んでしまつた女の見た夢といふのが、二輪の薔薇のうちにやどるかの様だつた。その時の不思議な薔薇の印象が忘れられないで、これを絵に書いた時、その時の受持ちの女の先生がとても褒めて呉れて、「今にきつと立派な絵書きになりますわ。」つてさう

とも出来ない、からつきしだらし無い男を、私はいつもにくんでつばをはきつけてやつてもいゝ位にくんで居たんです。お前なんか人間ぢやないつていつも自分に言つて、さうぢやない。俺は人間だ。立派な人間なんだ。今にいゝ仕事をして世の中をあつと言はせてやるからつて奮起して誓ひを立て、さてカンパスに向つて書かうとしたつて、だれと何にも書けなかつたんです。無理に書かうとして筆を持てば……あゝ、止めませう。愚痴言つたつて何になるつて言ふんです。私は愚痴言ひに來たんぢやない。さうだ。最初にこの絵を見たのは五日前の午後。その日も矢張り私は妻や子供の顔を見るのが辛く、ふらりと家をとび出して歩き廻つて居ました。終戦後の日といふものは私は、いつも不安でならなかつたのです。危惧におびやかされ、逃げようとしていくら足掻いてみても、砂の上を走るやうに足下が崩れ、深い井戸の底から湧き起つて來るやうな悲しさに、何をする元氣も無くなり、ぽかんとして只おびえてました。戦争中は勤勞奉仕隊とか何とかで、名古屋のある工場で働いて居たのですが、今考へるとあの頃の事は、身体の眞中に大きな穴があいて、冷い不吉な風がすう／＼もれて來る様な感じ、空虚さ。どこかへ何か大事な物を置き忘れて來た様な、うつかりして落ちて來てしまつた様な、じめじめした厭な氣持、靜かに眼を閉ぢると、頭の中がぼつと霞んでその底の奥の方に小さく、ぽんやりと電燈のやうなものがともつて、灰色に霞んで居るのは、すす、土ほこり、煤煙、息詰る、くすんだ空氣と、むせ上るやうなほこりのにほひ。遠く地底から湧き上る様なダイナモの重苦しいうめき。私は鑄造工場に働いて居たのです。クレーンが腦漿をかき乱して頭上を行き、眞

赤に灼熱した熔鉄が、ぶつ／＼音を立て、火花して飛んだ。電氣炉のふい響きは、へと／＼に疲れ切つて魂の抜けた物体になつてしまつた肉体をぶるんとふるはせ、乾燥炉から噴出する煤煙がもう／＼とこの薄暗い建物の中にたちこめ、皮膚の毛穴に黒いしみを付けて、その一つ一つから血液の中へしみ徹りました。さうして人々はその中でもういのちを失つた人の様に、無表情に鉄の棒を持つて鑄型に土をつき込んで居ました。知性追放、優しい感情も駄目。必勝の精神礼讃。そこには無智と、野蠻と、血に狂つた思想と獸の様な本能だけが存在を許されて居ました。氣を付け、右へならへ、左向け左、前へ進め、一・二・三、とてちてた。とてちてた。悲しい願望だけが身悶へしてました。退くに退かれず、逃げるに逃げられず、額に日の丸付けてモンペの帶も固く結んで、娘、若い身の恋に恋する年頃のひらひらした着物も着たからうに、み綺麗に装ひ、芝居も映画も見たからうに、指環もブローチも止めませう。お白粉、口紅ぬぐひ取つて、長い髪とも切りませう。ちつとこらへて、兵隊さん、私達も頑張りますと、氣なげな決意を固め、きつと結んだ口もとに悲壯な覚悟を表はして、針一針にまごころを籠め、あゝ大空に、大空に、見よ落下傘空を行く。國民精神総動員。俺とお前は同期の櫻。一緒に死なうと言ふのですよ。犬死してはいけないんですつて、くなく／＼とくずれさうになる身体をぐつと支へて、いくら切歯して見ても、淋しさ、そうしてノスタルジャ。これじやいけなさと勇氣を振り起し立ち上らうと頑張ると、何だか舞跡の灰の中から流れて来る讚美歌みたいなものが、心の中にすつと沁み込んで来てやり切れない氣持ちになつてしまふのです。家も焼かれ、家族も沢山焼き殺され

て、玉音放送。さうして終戦。朝が来たのですつて、自由が訪れたのですつて、へん、そんなこと言はれたら、へどもどしちやいますよ。労働組合も、文化団体もあつちこつちに沢山出来て、民主主義者も、自由主義者も共產主義者も、うぢや／＼出て来て、皆立派な人達ばかり。いゝ話しを沢山して呉れ、これが皆日本に居た人達だつたのかと面喰つて戸まどひしてしまひ、一体誰が戦争したんだ。氣取りなさんな、戦争中の指導者とやらは一体どこへ消えちやつたんだ。沢山居た筈ぢやないか。大きな顔して、自由主義者だ。文化人だ、お膳が茶をわかしますよ。ラヂオのスイッチ切りかへるみたいによくそんなにあざやかに変つちやへますね。しつぽが見えますよ。御免なさいつてあやまればいゝのに。

いゝ／＼人の事等言へません。自分もめぢやくちや。五里霧中、何のことやら訳がわからないで、それでも何か見付けようとして一心になり、アバンギャルド、アブレダール。他の人はどんどん先へ進んでしまひ、取残されちやいけなさと、やつきになつて追ひかけ、息が切れ、後は只おろ／＼していゝ絵も書けなくなりました。これではいけない、しつかりしなくてはと氣をとり直して仕事を始めて見るのでしたが、私の使つた絵具には何の色彩も見出せない。ペンキ屋。ごて／＼ぬる丈。もと／＼才能が無かつたんだ。あきらめるに諦めきれず不安と焦燥、貴方はお笑ひになるでせう。笑つて笑つて、こんな馬鹿はうんと罵倒していゝんです。畜生、水漬が出た來やがづた。涙が出ようつて言ふんだな。意氣地無し。それから、それから私は仕事の出来る力を見出さうと努めました。誰にだつて希望はある。希望があるから悲しくもなるのです。私にだつて

けし粒程の希望はありました。私はそれを大事に心に抱いて、誰にも奪られないようにしようと思ひました。それは私の美に対するあこがれ、何て言つたらびつたりするかしら、憧憬、まごころ。さう言ふ様なものでつたのです。私の頼り処は絵より他にないのです。その絵に自信を失つてしまつたことを知つた時、私はたまらない淋しさにおそはれました。つきはなされるのが恐ろしく、私は一時むちやくちやに絵を書きまくりました。勿論、駄作。書いては破り、書いては破りしながら、たよりなく捨鉢になつてカストリを飲みに行きました。きたない開市の椅子に腰掛けてカストリを飲んでると、みすぼらしくみじめで厭なんだけど、贅沢言つちやいけない。これが一番自分にびつたり来る氣分ぢやあねえかと思つたら、ますますたまらなく、僕はこれにいゝんだ。苦しめ抜いてやつたらいゝと毎晩のように開市の屋台にかよつた。あの臭いにほいが、ぐんと頭へ来る。その酔ひ心地が絶望的なんだ。それが又、余計僕にふさはしいように思へて、いや、それより何より、カストリが一番安かつた。御免なさい。下品に生れたんです。そうして五合も六合も飲んで、カストリのおばさんに、「そんなに飲んでいいのかい。いくら自分の体だつて、少しは大切におしよ。」と言はれ、余計にむちや飲みして、そうしてたゞにしてみらつて、本当に僕は仕様がななんです。お酒なんて傷をいたませるのが積の山さ。ほら、又愚痴三昧に浸つていゝ氣で居るな。この痴。

さう、私はあの日、五日前のあの日、いつもの様に悲壯な面持ちでカンパスに向つたのです。絵が書けないならお前なんか死んぢまつた方がいゝんだ。さう思ふと唇がわなわなふるへ、血が身体から

ひいたように背すじがすつと冷くなるのを感じました。私はどつと心を静め、書かうとしましたが、矢張り駄目。この祿でなし。べちやんべちやん自分の頬に平手を喰はせると、絵筆を投げつけてぼろ／＼涙をこぼしちまつたんです。その時、私の肩をそつとたゝいたのが妻でした。私はこの女の顔を見るともういけないんです。苦しんだ。我儘な、傲慢な、意地の悪い言葉しか口から出て來ないのです。心の中や反対にたまらなくいぢらしくつて、烈しい鳴咽が喉につき上げ、矢庭に抱きしめ、共に泣きたい氣持ちで一杯。苦勞させてすみません、と喉まで言葉が出て居るんです。今まで一度だつてこのだらしない夫に愚痴を言つたことが無く、辛いなんて、こゝから先も言ひはしない。妻も、子供も捨てたまゝでこの破廉恥の夫が酒を飲み歩いて、へべれけに酔ばらつて、晩も遅く帰つて來たつて、いつまでも起きて待つて居るんだ。厭な顔一つ見せず、「随分お疲れの御様子ですわ。すぐおやすみにならなければ、あ、御飯はおすみにになりましたの。」僕はもういけないんです。酒飲んで付けたちよつびりのから元氣も一瞬で消えちまひ、悔恨と涙がかはつて湧いて来る。これが僕には耐へ切れななんです。胸に重苦しい重圧を感じる。愚痴の一つも言つて呉れたら、妻や子供に面と向つて話することも出来ないような夫を、こつびどく痛罵して呉れたら僕はどんなに救はれた氣持ちになるかわからないんです。だけど、あの女は苦しいのをじつと我慢して、ときには無理に微笑さへ浮かべて私の氣持ちをひき立てようとするのです。思はづかけより、胸に抱きしめ、優しい言葉をかけてやらうと心ぢやさう思つて居るのに、口は反対のことを、止めようとしても止まらない位に叫んぢ

まつて居るのです。五日前のその日もさうなんです。肩を軽くたいて、ふりかえつた私を慰め励ます様な表情で見詰めると……あの女は、根っから優しい心持ちの女なんだ。崇高な、光るばかりに美しい氣持ちの女。こんな男には過ぎて。勿体ない。でも、その時だつて、ね、私の口からはいつもの醜い言葉がせきをきつて飛び出して居たのです。卑屈な男だと思ふでせう。こんなに氣高い女の氣持さへ解からない男。絵の奴隷。「構つて呉れるな。お前なんか言はれなくつてもよく分つてゐる。」でんでなつて居ません。から威張りなんです。虚勢張つてゐるんです。「お氣持ちが荒れて居らつしやるのですね。お苦しみがたいへんなんですわ。もう少し貴方、もう少しの御辛抱。今にきつといふお仕事がお出来になりますわ。」よして下さい。僕はもうすつかり駄目なんです。貴方達を苦しめに生れて来たやうなものぢやありませんか、自信も、希望ももうとつくの昔にどこかへ消えてしまつたのです。私はそれ以上とても妻の傍に居られないで、逃げる様に家を飛び出してしまつたのです。歩き廻つて着いたのが公園でした。さう。上野公園です。自分は一体どうなるんだらう。妻や子供はどうしたらいいんだ。さう思つたら、頭の中がぐる／＼してぐわんと何かにたゞきつけて粉々にしてしまひたいやうな、あても立つて居られない氣持でした。上野駅のすぐ横のだから、坂を科学館といふのですが、あの建物の方へ登つて行きました。敗札を待つて居る旅客達が、だらしなくごろ／＼して居ました。新聞紙ひいて坐り込んで、ひどいのは腰こんでおにぎり食べて居たり、くしやくしやくの髪をした女の人が両肌ひろげて、不潔なぢやがいてもみたいな子供に乳をふくませながら、何かす

ねて居る六つ位のその上の子供を口ぎたなく罵して居ました。あゝ醜い。駄目だ。皆んなもう終りだ。敗北です。がら／＼とこのまゝ崩れてしまつて跡方もなくなつてしまつたらそれこそ本当に、どんなにいか知れませんが。こんな恰好までして生きて居るのは一体どうしたつて言ふんでせう。たまたまなくなつて走るように坂を上り切りました。ふつと吐息をつく、足が急にだるくなつて歩くのがものうくなりました。道から脇へそれると石の柵がしてあつて、廣々とした眺望が開けて居ました。そこから見おろすとずつと下の方に無數の架空線がひかれて、その下に沢山の駅のレールが走つて居ました。山手線の電車ががら／＼と眞下を通り過ぎました。車庫の中から機関車が出たり這入つたりするのが小さく見え、ずらりと並んだ、ブラットホームに無數の人が蟻のやうにう／＼して居て、その向ふに大小の建物が乱雑に置いた積木の如く重なり合ひ、ひしめき合ひ、ぢつと見て居ると生物のやうにびく／＼蠢動して居るやうに思はれました。あの一つ一つの建物の中に疲れ切つた人達が、それでも何か希望は無いかと、けちなぞみを血まなこになつて探し求め、時にはいがみ合つて、昂ぶつた神経をびりびりさせて居るのだ。おど／＼して卑屈な微笑を浮かべて居ても、心の中ではお互に恨み、にくしみ合ひ、はては騒音と汚穢と、微雨の中のでれ／＼したみぢんこ生活にあき／＼して、ぐつたりしながら、追ひたてられるやうに朝起きて、あれてこれして晩になつて、さうして生きて居るのです。あゝ厭だ。厭。小高い処に立つて都会の外貌を眺めながら、たつた一人こんな事を考へて居る、自分がたまたまなく淋しく思はれ、やたらに涙が落ちて来ました。東京つて恐ろしい処です。

め、ちやめ、ちやにいため付けられ、傷だらけになつて、それで苦しい顔して居たら、ふふんて皆んなが笑ふ処です。我慢して、無理にもにこ／＼して居たら、あいつは馬鹿だ。鈍感だつて言ふ処です。田舎者は特にみじめ、むく鳥だなんて厭な言葉だ。鼻すゝり上げながら涙がたまつて眼の前がぼつと霞んで何も見えなくなつた時、このまゝどかんと飛び下りて死んぢやおうかなと、さう思ひました。その時すぐ横の方から、若い男女の話声が聞えて来たのでした。「ヴラマンクは生れながらの野人ですね。彼には巴里の洗練なんてものはありませんよ。大地の上は何の拘束も受けずに生れて来た自然兒つて言ふ感じですね。画く題材は我々凡人から見たら、そこそ何の変哲も無いありふれたパリの郊外にしか過ぎないんですが、そんな自然を前にして、彼の激情は爆発するんです。猛り立つた、フォーヴの様に激しく、自然も亦あへいで居るようです。」「フォーヴつて何?」「野獸ですよ。」「野獸つて、あのけもの、噛み付く。」「えゝ、さう、その仲間を野獸派つて言ふんです。一九〇五年、確かさうだつたと思ひます。絵画の檯舞台、巴里のサロン・ド・トヌの或る一室に陳列された絵を見た人達は思はつたと言つたのです。それまで、絵は只美しいものとばかり信じて居た人達には、そこにある絵が美といふにはあまりに見苦しく、狂暴にさへ思はれたのです。他の室に比較して、これ等の意外な創作があまりに強烈だつたからです。ある批評家が、この一室を指してフォーヴ・野獸の檻と呼んだのが、そのおこりだと言はれます。マチスや、ドラン・ヴラマンクなんかがこの派の人です。」

「私は、あの少女を書いて居たでせう。何ていふ人だつたかしら、

ほら、ピンクと白と、淡いコバルト色で、夢の様な、そして憂愁を帯びて、繊細な少女の絵、さうローランサン。」この様な二人の会話を聞きながら、私はそつと傍を離れました。邪魔をしてはいけな。平和な人達の心を少しでも傷つけてはいけな。どけ、あつちへ行け、私のこの顔を見た爲に、二人に不愉快な氣持を起させてはならぬ。さう思つて私は歩き始めました。よその家へ入つて追ひ出された野良犬みたいで、急に哀哭がこみ上げ、胸一杯になり、灰色の球のやうにふくれあがりました。ふらふら歩きながら、私はさつきの会話を、何の意識も無しに思ひ浮べ、はつとある事に氣が付いたのです。西欧のすぐれた画家達の名画展がこゝで開かれて居るのだ。さつきの人達は、その帰りの人達だ。ヴラマンクとか、ローランサンとか、さうに違ひない。かう思ふと私は尚のこと、しよんぽりしてしまひました。惨酷なめぐり合せ、高等学校うけて落第したのに、白線帽子見せつけられたやう、泣き面に峰。ほれたが因果。――そはわがこゝろのおきてにして、

またわがこゝろのよろこびのいづみなれば、――とほ／＼すゝみました。足は重く、日ざしは悲しくたゞよつて居ました。

――くしくしてあやしけれど、

またいたくしてなやましかれども、

わがこゝろにうつるもの、

いまはこのほかになければ、――

何とかいふ詩人のこんな言葉が浮んで来ました。行く処へ行くより仕方の無い氣持でした。とほ／＼悔恨を拾ひあるく囚人よ。馬鹿

よ、阿呆よ、ぬう、ほう。二三步歩いては立ち止まり、矢張り止めようかとひき返しかり、又思ひ直して一寸歩き、あゝミューズは嫉妬深い。勝手に振舞へぬ。それから僕は、矢張り駄目だったのです。生きて居たのがいけなかつた。心中未遂。笑つちやいけな。本当です。まじめな話です。仕方が無かつた。かうなるのがおちだつた。他の人には、狂氣の沙汰に見えても、私にとつては生涯の一大事でした。狂人と言はれたつて仕方がない。弁解した処ではじまらぬ。こんな男が一人居ます。馬鹿でだらしない男でした。魂も運命も、ぼろ靴のようにすりきれて、その男の人生は過失でした。だけど只一つ、男が大切に持つて居たものがありました。それは憂鬱の情熱でした。続けてお話し致しませう。博物館へ行きまして。そこで画展が開かれて居るのです。悲しい心で絵を見ました。ぼつとして何もわからず、その場にうちふして嘔吐したい様な狂しい心持。重い鉛塊のしかゝつて来て、私の小さな生命を押しつぶさうでした。絶望を宣告された疾患者の足は重く、病院の廊下を通るやうに、観覧者の多い館内に私は消え入るような悲しさを感じました。人の流れにふあゝ流され、壁一面に並べられた絵の前を、とりとめもなく通り過ぎ、それ丈で身体はひどく疲れて居ました。二階の三つ目の部屋に這入つた時、私は一人の女に氣がつきました。急に私の心はひし／＼と締めまり、丁度、グアイオリンの絃のやうに、こゝろの輪廓の線がびんと響くまで張り詰め、堅固な線になるのを感じました。あつと思はづ言つてしまつて、これだ。と思ひ、矢張りその傍へ駆け寄り、瞬間強烈な電氣の様な感動にうたれたのでした。それが絵の、寝台に横たはつた裸体の女だつたので

す。私はひきつけられたものゝ如く、ぼつと女を見詰めました。赤褐色のバック。寝台の上にのび／＼とのばした肢体、何げなしに下腹部を覆つた左手。立て膝した左足。燃えるやうな赤で色どられた肉體。その面長の赤のブランに象嵌したやうなアマンド形の碧色の眼が、私を眞向ひに見て居たのです。「横臥裸婦。」モデリアニの「横臥裸婦。」それがその絵だつたのです。白狀します。私はその突端、一種異様な狂ほしさに耐へられんばかりになりました。その女の持つ色感が、慾情が、官能と、陶酔が、憂鬱が、ある體質的な共感となつて、ぼつとして居られない位に私の胸を一杯にしてしまつたのです。身につまされる想ひ、いや、そんな生ぬるいものぢやない。もつと切実な、何ていふか、女の宿命が呪はしい生涯の痼疾が、ぐんと身に響き、仲間だ。この人も不幸な人。書かれた絵と、それを見る観覧者、そんな関係なんか、一切消え去り、直接的な感動が通じ合つた。人生の酷薄を知りつゝ唯一日の安息も知らない女。私を見詰める、その眸には反抗も無ければ呪詛もない。もみくちやにされた自己の生活を、たゞ宿命として、諦めにとざし、淋しく、美しく、誰も恨む訳ぢやない、何も言はず、そして靜かに滅んで行つて、まもなく忘れられてしまふ。その女の運命が私にはたまらなく苦しかつた。内に隠した女の悶え、深いたましひの當爲。僕は悲しくなつたんだ。恋なんて言ふと、おかしくつて、てれ奥いけど、その執拗な魅力に全くひきつけられてしまつたんだ。僕は夢中になつてガラス張りのウインドウに顔を押しつけ、絵をのぞき込んだ。顔、肩、胸、腕、コンパスで引いたやうな、なだらかな弧を描いて、抽象化された肉體の輪廓。そのデエホルメされた肉體からは、他の絵とは

違つた異常な生氣に満ちた実感が奔散して居た。なぜやりに横たへられた身体のみづ／＼した、生の肉感。炎のやうな情慾。女の不思議な魅力に、どこまでも牽きつけられて、赤い円をえがいて際立つた胸の乳房が生きて呼吸して居るやうにさへ思はれた。奔放に投げ出された肢体は、あふれる官能を波立たせながら、それで居て香高い氣品、高雅さ、みだしなみも端麗な貴婦人が、私室、誰の眼もはじからず、湯上りの素肌をベットにまかせて、結んだ髪も解きほぐし、黒髪の千すぢの髪のみだれ髪、思ひ乱れ、思ひみだれて白き胸の両の乳房に流れかり、白肌にほやかに映す掛鏡に恥らひ三分に大胆さ七分、のび／＼と手足のばしてうづ／＼の姿に、しばし見惚れる。そんな様な高貴な甘美さが一杯にただよつて居るのです。粗野、凡庸、卑俗、醜惡に見詰められ、追ひ立てられ、逃げ場を失つた優雅さ、繊細さが観念の眼を閉じてなすにまかせて身を投げ出し、かすかに打ち慄へるやうな哀傷の姿態でした。細長い首に卵形の顔、南國の情熱を思はせる赤味が／＼つた顔に、象嵌されたアマンド形の眼は山間に清澄な水をたゝへた湖の如く、碧色に靜まり、凝視する眸には人生のすべてにあきらめ盡したある放心の姿を宿して居るのです。故意に抽象化されたその畸形の様式はこの女性を有り得ない形姿に書き出しながら、その色彩にたゞへられた情感の湧出と、深く沈在された情熱の燃え上りは血の通ふ実感をともなつて、ある宿命的な魅力を放つて居ました。こんな絵を書いた人は淋しい人に違ひありません。呪はれた生涯を定められた人なんです。こんなやうに切れない、こんな切実な、自分の神経をすりへらして、やがては自身を滅ぼしてゆく道とは分つて居ながら、放棄することの出

來ないやうな苦しい絵を書く人は、淋しさ、そして苦しさに捨鉢になつて居るに違ひありません。モデリアニといふ人にはユダヤの血が流れて居ると言ふぢやありませんか、繊細極まりない感受性の下に内燃する激しい情熱は、民族の宿命的な危惧と、焦燥に焦立たしくふるへて居たんだ。「横臥裸婦」が、はつきりそれを示して居るのです。ユダヤ民族の上に暗く重圧を加へる沈痛な陰影が、えがいた女の姿にまでひし／＼とつて来て居るんです。イタリヤ、リヴォルノに生れた多感の青年画家が、大きな希望に燃えて数限りない異國の作家が行つたやうに、藝術の樂園、憧れの巴里を訪れて、ね、そこに何があつたのです。廣大な都会と人の波とそれに孤独、貧乏、救ひ難い苦惱。幻滅。酒を飲んださうぢやありませんか、鹽藥によつて昂ぶる神経に一時の忘却を與へたんです。しかも、この薄命の天才は胸を病んで居たんです。鹽藥を使つて懷悩から逃れようとしても抜きさしならぬ迷ひの道はどうしようもなく、血へどをはきながら尙書かなければならない絵とは、画家にとつて一体何でせう。モンパルナスの街頭で倒れて居た酔どれが、通行人によつて発見され、施療院へ送られたが、その後、五日にしてこきれたといふ酔どれがモデリアニだつたといふではありませんか。藝術は、詰る処、モデリアニとつて孤独なる伴侶だつたのです。一人ぢやまだ／＼孤独さが足りない、もつと孤独を感じさせる爲に藝術があつたのだ。旅は道づれ、死ぬなら一緒。「横臥裸婦」の中には、モデリアニの墓穴が暗黒の穴をあけて居るのが見えるぢやありませんか。くた／＼になつて勞作して、その勞作が自分の生命を刻一刻すりへらして行くのだと自分でもよく承知して居ながら、死物狂ひに穴を自分の死体を入れ

る穴を掘つて居たのです。さう思つたらますます切なく、私は身悶へする様に「横臥裸婦」の前で、ぼろ／＼涙をこぼしちまひました。観覧者が訝（いぶ）かしく顔して、私の様子を見て行くのにも構はず恥も外分も忘れ、取りみだした恰好で長い間自失した人間のやうにそこに立つて居ました。閉館のベルが鳴り、掛り員に注意されてはつとして、それでも尙離れ難く、このまゝづつとこゝに居ていつの間にかこの身が消えてしまつたらどんなにくだらうと思ひながら、でも仕方なしに逐ひ出される様を外へ出て、まだ夢の脚。とぼ／＼と悲しみひいて歩いて居る内も、絵の女がむせうに恋しく、こがれる様な氣持ちになり、憧憬、あこがれ、もつと本當の切実な想ひが湧いて来て、僕はすつかりこの絵にとらはれてしまつたのです。あの青藍色の眼が、しひたげられても失はぬ温い愛情をこめてぞつと凝視する眼がちらついて離れようとしないうです。私は絵を私の傍へ置きたい欲望を感じました。傍へ置いて他人の邪魔をうけずに一人でぞつと眺めて、こみ上げて来る感情を画面の女にぶちまける様に、自分の体温と絵の女の体温とが同じになつて、互ひに悲しみを通じ合ふ事が出来る位にしつかり抱きしめ、貴女は私の恋人ですと言ひたく、謂はゞ相聞の關係を持ちたくなつたのです。偷つてしまほうか。ふとさう思つて、いやいけない、それは許されない。何て言つたつてそれやひどい。あの絵は私のものぢやない。公共のもです。公共のもの、公共つて一体何だい。愛情も何にも感じないでへら／＼しながら絵を見る奴等に本當のものが分るものか。伊達や酔狂で書いたものぢやないんだぜ、死物狂ひで自分の体を粉々にして書いたものなんだぞ。十束一つからげ、づらりと並べてそりや便

利に違ひないが、映画みたいに見るものぢや無いんだ。蓄電池展示展、野菜品評会、フアワシヨシ・ショウと訳が違ふんだ。何も分からなくせに、モネは矢張り「日光の画家」ですね。彼の睡蓮の連作は……ルノアールの甘美な色彩、メロデーとリズムを持つた華麗豊穠な女性の肉體は……、やれ、セザンヌ・ゴッゲ・ロートレック。ピカソ・マチス・ユトリロ。あれやこれやをざつと見て比較し、研究し、納得してそれが教養、色んなものをよく覚えるでせう。絵画も勉強致して居ります。それが文化人。よせ、おかしいと思ひませんか。いゝ絵を見て何の愛着もお感じにならないのですか、恋しくつて、恋しくつてたまらなくなつて、手にとつて撫でゝ見る、ぼろぼろ涙こぼしちまつてやりきれない氣持になり、抱いて見る。そんな感情が起らないんですか。鈍感、何ていふ不感症さ、蕃腦症ぢやありませんか。あゝいけない。危い。盗む等といふことが認められてたまるのですか。悪いのは當然です。どんなにぬぐひ捨てようとしてもいまはしい想念が頭にこびり付いて離れず、疥癬（しやせき）みたいにしつこく、さうだ頭をくら／＼させなければいけない。ぐでん／＼に酔つぱらつて、さうしたら忘れることが出来るだらう。夢中になつてポケットをさぐり、手あたり次第にしわだらけの紙をひき出し、金・十円五十銭。駄目。僕は無意識に電車に飛び乗つた。借りきく飲屋へ行かなければならぬと思つたからだ。電車から降り、自分の家の前を素通りして近所の飲屋へ入ると立てづ／＼にやけ糞になつてぐ／＼飲んだ。ふら／＼になるんだ。意識を無くなさなければ、腹の底からにえる様にわき上つて来た酔ひが、やがて頭へ来て、じんとしびれ、コップを持つ手ががた／＼ふるへた。絵の女の

身体が、哀切の表情が、まはる／＼。頭が。女と頭がぐるぐるを宙空轉しました。難破。さうして成功。

氣が付いた時、私はうすよごれたビロードのカバーのついた蒲團の中に横たはつて居て、横の方に坐つて編物をして居る妻の姿が鮮明になり、ぼんやりした記憶が次第に形をと／＼のへて来るにつれ、飲屋でぶつたほれて家へ連れ込まれたのだなと思ひました。頭が重く、刺すやうな痛みが頭に響いて居ましたが、妙に心が靜まり、苦痛も不安も解きほぐれ、それまでも身が樂になつたように思はれました。「昨日の晩は迷惑を掛けてすみません。」と妻に言ふ言葉も、すなほに出て、それから私は無意識に立ち上らうとしました。脳の髓を針でくりと刺されたやうで氣が遠くなり、ふらつく足を支へながら二三歩、歩いてから、妻に「外へ出て来ます。用事がありますから。」妻は驚いて私の顔を見詰め、身体の事を心配して、ひき留めようと致しましたが、そのまゝ何も言はずに切ると／＼に家を出て、「横臥裸婦。」私は絵を見たいと思つたのです。私は再びその絵の前に立つて居ました。新たな妖しい激情が胸につき上げ、みなぎり、唇がかすかにふるへるのを感じました。何か現実的な、直接的な親和の力が動き、声を出して叫びたい。「恋人よ」とさう言つて、その手を取り、胸に押しあて「ねえ、私のこのぼろ／＼に傷ついた魂をさすつておくれ。」と叫びたい。その周囲に満ちて居る麝香の様な体臭の中に身をうずめ、円い乳房の下に耳をあてゝ、胸打つ鼓動の響を感じたい。私は突端、二三歩近寄りつと手をさしのべました、かあんとにぶい音がして私の手はガラスにぶつかり、はつとして注意すると眼が、ガラスに映つた観覧者の眼が薄笑

ひを浮かべて、奥の方から私を見詰めて居るのです。何がおかしいのです。人の感動がそんなに奇妙に見えますか、君達には分からないだらう。この情感が。邪魔です。どいて下さい。お願いします二人丈にして下さい。僕は相聞の間柄なんです。のどを突いて出かゝる言葉をぐつと飲み込み、私は悲しくうしろをふりかへりました。その時学生らしい一人の男が私に言つたのです。「貴方一人が絵を見に来るのではありませんよ。大勢の観覧者が居るのですから。貴方が、さつきからづ／＼と前の方へ出て、ガラスにへばり付いて居るものですか、絵が見えなくなつて居るのです。注意して下さい。大勢の人が迷惑致しますから。もう少しさがつて御覧になつたらどうでせう。」私は崩れるやうに後ずさりしました。駄目だ。偷らなければ。もうどうにもならない。ガラスのケースの中から出さなければ。ね、どうしてこんな牢獄のような処へ絵を閉ぢこめて置かなければならないのです。答は無論簡単。だけど絵に対する強烈な愛は、情感は一体どう処分したらいいのですか。絵がもし眞の愛情と、慾求によつてはじめて生々とした生命を輝かせるものだとしたら、さうだ、こゝからこの絵をひき出さなければいけない。ガラスのケースの中で絵が靜かに病んで居るやうには思はれません、病院の廊下を通つた時、ふとのぞく部屋の中に青白い病人が臥せて居て、淋しさ。また水族館。ガラス戸越しに確かに魚の美しい生態を見ることは出来ても、その限られた空間とは何でせう。緩慢な死の強制です。魚は大海や溪流の自由を慾して居るに違ひない。絵だつてさうだ。自然と人間の愛撫を待つて居るんです。瞬間、私は烈しい情慾の悶へと絵の慾求に狂はんばかりになりました。かう

考へるのは私の邪念かしら、こんな執拗な執着性を痴情つて言ふのでせうか。もしこれが痴情だとしたら、痴情万歳。そして玉碎です。モナリザを偷み出し、胸に抱いて泣いたといふイタリヤの青年画家のあふれる欲喜と陶醉が、新薬師寺の香薬師をひそかに自宅に安置して、朝夕ほれほれと眺めて居る男の法悦と恍惚が私には沁々と分るように思はれました。美に關係を持つことは罪悪なのですか。永遠に美から逃避しなければいけないのか、厭だ。そんなことは出来ぬ。どんなに苦しんでもどんな罪をになおうともミューズの傍からは離れられぬ。「横臥裸婦」の碧色の眼が、うづくような蠱惑を放つて私を凝視して居ました。その晩です。その晩私は夢中でその絵を偷み出してしまつたのです。最夜中の部屋の電燈の下にかゝへて来た「臥裸婦」を横たへると私は運命の追ひ込んだ欲喜のうちに、熱病者の如く血ばしつた眼をぢつと「裸婦」にそゝいだのです。断崖に向つて打ち寄せる汐のような高まる恋情の前に女は靜かに身をまかせて居ました。ヴィオロンのゆたかな調の中に、消え入るような「忘却」がおとずれ、燃えさかる蠟燭の火のような神秘的光に包まれた恍惚が生々としたたましひの働きを呼び起して呉れたのです。靜かに手をのべ「裸婦」の乳房を、手を、腰を、さうしてなだらかな曲線をえがいたもゝを撫でまはし、頬をかるくすり合はせ、唇に接吻するとなまぬるい涙が頬を下り、女の乳房の上にボトリとかすかな音を立てゝ落ちました。靜寂のほの暗い室内に、突端、さむさが電流のように秘みこんで、無数の小さな虫みtainなものがみしみし心に入り込み、耐へ難い淋しさが襲つて来て、私は女の身体の上に身を伏せました。私のからだの傍に居て固く抱きしめ、この

苦惱の運命から私をまもつて下さい。その白い両の手を私の胸におしあてゝ。駄々つ児のようにしがみ付いて、私はぼろ／＼泣いちゃつたのです。さうして、それから私は、あゝ、だがもう止めませう。とり乱した事をお話し致しました。私はもう本当に精神異常者、痴情に狂つたのかも知れない。正氣なんていくらわめて言つて見ても、他の人が認めほしない。もう何言つても無駄。氣遣ひのたわ言。だからもう止めませう。あゝ、でも私がこのように自訴して出れば私は永久に絵を失ふ。慙しくて／＼たまらなく、これを失つたら私はもう只の屍。これこそ私の恋人、いのちの糧、思ひこがれるような氣持で偷み出し、忘却と陶醉と恍惚とを感じて、一生他人には渡しません。これは私のものと、あんなに強烈に想つて居たのに、どうして僕は自訴して出たのだ。偷つた苦しみ、良心の苛責、いや、それとは違ふ。愛の冷却。移り氣。あき。とんでもない。僕は今でも狂ふように慕つて自訴した自分をたゞきつきたい位に憎悪さへして居るのです。それなのに何故私は自訴しちまつたんだ。貴方はそれを聞きたいのでせう。この阿呆の顔が、おしつぶされたようにゆがんで、この唇が紫色にふるふるのを貴方はそれが見たいのでせう。言ひませう。それは私のいのちの痼疾、自分で自分を苦しめる、毒針ふくんだ「皮肉」は、いはゞ一種の自虐ですよ。ははは／＼。

を は り

空 想 家 と 死

西 田 正 夫

富田君は、ます／＼憑かれたものゝやうである。路地の両面から、ぶつかるやうにはみ出た軒々の間を、つぎ／＼と縫つては、足許に目もくれず無中で歩いて行く。石コロで踵をギクリとさせた位では、とても氣をとりなほしそうにもない。そうして顔には一面、全くこそばゆいやうな自然な微笑を浮べて。こんな時に誰かゝ声でもかけたなら、それこそ、話の腰でも折られたやうに、ムツとして腹を立てるにちがひない。實際、彼の頭の中では、次から次へと絶間ない空想がかけめぐつてゐるのだ。

富田君は目を閉ぢてみた。網膜に赤やら黒やら、何かちりめん波のやうなものがぼんやりとして動いてゐる。丁度その後方に、たづねあぐねてゐるものがあるやうに思はれた。喉まで来てゐるとはこのことだ。

彼はいらいらしながら再び目をあけた。

先程から富田君は、「やがて死ぬ……」といふ句のつゞきをしきりに思ひ出そうとしてゐるのである。それは全く不意に、それこそ映画で眞暗な画面の中に突然ボツカリとあらはれて来るものゝやうに、頭の中にうかんだのであつたが、今度は仲々次の句が出て來ない。丁度糸の端は手元にあつて、先の方はもやの中にかくれてしま

つてゐるやうなものだつた。時々、それがもやの間からぼんやりとかすんで見えるやうにも思はれ、ます／＼前立たしさが増して來た。

「やがて死ぬ。」今度は口の中でこつそりとつぶやいてみた。自分の声で、折角調子よく廻轉してゐる頭の中が又ブチこわされ、クシヤクシヤによれてしまはない程にこつそりと。そうして、ゴクンと唾をのみこむと、そろ／＼と手元の糸をたぐりよせはじめた。まるで蜘蛛の糸を引張るやうな慎重さである。

「やがて死ぬ……」だん／＼ともやの中からきゝなれた口調が顔を出してゐる氣配だつた。

「やがて死ぬ、けしきも見えずせみの声」そうだ、これだ。

きつかけが見つかると、一氣にする／＼とほぐれて來た。たしか、芭蕉の句ではなかつたかしら……

まるで、いぢくりまはして氣に病んでゐたトゲでも取れたやうに、彼はうれしくなつて三度口の中となへてみた。

「やがて死ぬ、けしきも見えずせみの声」……

それにしても、どうしてこんな句を思ひついたのであらう。そうして、あの「やがて死ぬ」といふ一節が、どうしてこんなに私を夢中

にさせてしまつたのだらう。横顔をかすめた風でもが、ヒヨイと私にこんな言葉を投げつけて行つたのかも知れない……

富田君には、凡ゆるものが、人間も街も星もすべてが自分の後に連のいて消えて行くやうに思はれた。そうして暗々と自分一人だけが、ふれるでもなくはなれるでもなく、まるで地面の上をずるやうにして進んで行くやうであつた。

堤に出た。川下の方の鉄橋を、ゴーツと渡る電車の音がして、ポールが二三度開の中に青く光つた。富田君は、ほんのりとしたあたゝかい空気が体の中に立ちこめて、それと共に、魂もうき出してどこかへ消え去つてしまふやうな心地がした。彼は、邪氣のない、本当にたのしい氣分で一杯になつた時には、ポーツとこのまゝ死んでしまひたい幻想によくおそはれることがあつた。

彼は又、物思ひに取りつかれたやうである。

酒のよひにでもこんなに浮々とはしないし、目まぐるしい程の空想にも追ひかけられはしない。

所が、いつもはまだかゝと氣にする程曲り角の多いこゝまでの長い距離も、全く無我夢中とほつて來てしまつたのだ。道を間違はなかつたのが實際不思議なくらゐだつた。

富田君は、それ程有頂点になつてしまつてゐる自分のことを考へるとほゝえまづには居られなかつた。

彼は今、横江さんといふ娘さんと、ほんの十五分程一しよにお茶をのみ、そうして別れて來たばかりなのである。といつても、何か色つばい語り草でもあつたといふ訳でなし、話の途切れないやう、

かけてみた。

「どちらまで。」

「Sまでです。」

「そう、ぢや私も一しよです。」

「Sまではまだ二時間程かゝりますね。」

どこまでうまく幸運の波にのつて行くのか。容易に見つかつた糸口から、二人の話はだんだんとほぐれて行つた。そうして、彼女の所は富田君の家と二丁とは離れてゐないことまで分つた。

「不思議な御縁ですねえ。私は、こんな目と鼻の先に貴女が居られるなんてついぞ存じませんでした。」

「最近越して來たものですから。又一度おあそびにいらして下さいませ。」

こうして別れてから一と月程経つた今日、又ポツクリと映画館の中で出くわした。しかしただそれだけの間柄で、とてもとり立てゝ云ふこともないのだつた。

大体富田君には、これと云つてほれてくれる女等居はしなかつた。大の男が、女の子にヘラヘラするなんて見つともないとばかり尊大にかまへてゐるので、役所では、女給仕までが彼をすつかり馬鹿な偏屈者扱いにして、眉をひそめて膝口をたゝいたり、なぶりものにしてゐた。又家に帰れば、「居候同然」と自認してゐるやうに、たゞでさへ肩身の狭い養子の身分だつた。浮いた話等、それこそ鬼の目に涙も同然で生れそうにもなく、しよぼしよぼと肩をすすめては、貧相に並木の影をえらぶやうにして歩いてゐたのだ。

一生懸命に氣を使つてしやべつて來ただけのことである。相手の声の調子にもたえず氣を配つて、乗り氣でないのかどうか、又この次は何といつたら良いだらうかと目を白黒させてゐたのだ。財布の裏側の糸がほぐれて十銭や五銭の札がはみ出てゐるんだが、どうして彼女に見られないですむだらうか。彼女も金を拂ふなどゝ云つたら、氣まづい思ひをさせずにどういふ風にしてとめやうかしら。この考へると、勘定一つのことにもまさに冷汗ものだつた。

ところで、その横江さんといふ娘のことにしても、富田君が会ふのは今日でやつと二度目だつたのだ。

一度は汽車の中、まだ残暑のきびしい頃だつた。

出張先の会合で呑んで、一杯機嫌のまゝでフラフラと暮方の汽車にのりこんだ。席をたづねるのも氣まりが悪く、うす暗くて顔を余り見られないのを幸に入口から二三歩の所の通路につつ立つてゐると、横から、「どうぞ。」といつて席をすゝめてくれた人があつた。白いワンピースが細つそりとしたなで肩によく合つた、丸顔の、若々しい目をした娘さんである。年は二十才ばかりであらうか。

——一体、今日はどうしたことだ。汽車で若い女の人と同席するなんて絶対にないことだのに。おまけに、よりもよつて今日はこちらは酒臭い。

富田君はすつかりドギマギして席につきながら、娘さんとは反対側に顔をむけて息がかゝらないやうにとつとめた。そうして、次の駅につくと早速アイスクリームを買ひこんで來て、一生懸命酔ひをさまそうと骨折つた。大きな塊を、のどが氷りつきそうになりながら目をバチ／＼させてのみこんでしまふと、やつと落ちついて話し

といつても、本人は内心すつかりあきらめてしまつたり、女のこと等とんと意にもかけない等といふ訳ではなかつた。たつた一人、思ひをかけて打明けたことがあつた。ある酒場の女であつた。「富田さん、しばらくいらつしやらなかつたのねえ。」からかひ半分の御愛想の鼻声にすつかり氣をよくしてしげしげとかよひはじめ、しまひには、同僚のひやかしを眞にうけて女が自分にほれこんでゐる等と合点してのことだつた。

しかし、ニヤ／＼女に笑はれながら、白痴も同然に店を追ひ出された時の事を思ふと、富田君は今でも恥かしさと口惜しさにたへ切れなかつた。こうなると彼もウンと腹をすゑ、意地を出した。もつぱら女を輕蔑することにこれつとめるといふ具合に、日頃愛読のシヨペンハウエルをかつぎ出したり等して腹いせの仕返しをもくろんだ。

「あいつ等は、顔と体だけが賣り物なんだよ。それで男をたぶらかすまるで狐みたいなものだ。」

きれいな女等を見ると、目をつむつて一生懸命頭の中でくりかへした。「何だい、あんな奴。」こうも考へてみた。

しかし、やつぱりこつそりと目をあけてながめたい氣持を押へることは出来なかつた。ついと見とれて「あんな人なら……」等と思ひ出すと、「馬鹿、馬鹿、柄でもない。」とばかり、かぶりを振つてこんな考へを打ち消そうとしたものだつた。

父は四つの時に、母は十一の時に亡くなつてしまひ、富田君は、

親類の者達の指金で養子にやられた。そうしていつになつても、毎日ブスブスとくすばれた不平不満の中にばかりすごしてゐた。

養父母達は自分を一つの投資にしてゐるんだ。だから何かするとすぐ、「お前は誰のお陰でそんなになつたと思つてゐるのだ。」とくる。病氣になつてうん／＼苦しんでゐる時だつて、こちらのことは何一つ考へもせず、死なれては元も子も失くしてしまふなんてことばかり心配してゐるんだ。

亡くなつたおふくらだつたら、等と思つては、フトンの中に顔を埋めてシク／＼泣きながら、一そう死んでしまひたいとは何度考へたことだらう。「路地に夕焼の手まり唄が心を誘ふ頃、ひとりガラス戸を吐息でくもらせ……」こんなことを書いたこともあつたわけ。歌にあるやうに、本当におふくらが映りはしないかと月を眺めたこともあつたわけ。

富田君は厭世主義者を以て任じてゐた。

養家はこの土地では可成りの呉服物の老舗であつたが、養父母の意志に反してつゝと商賣には身を入れず、学校を出るなり、家に引きこむのをきらつて役所につとめ、そのかたはら、レオバルディ、ショウペンハウエル、北村透谷等と専ら古今東西の厭世家の書をよみ漁り、自ら厭世思想を鼓吹した。一時は、ベシミズムとかベシミストとかいふ言葉があるだけでもむさぼるやうにしてとりついたものだつた。そうして、感想録を作つたり、時には下手クソな小説に筆をとつてみるのが楽しみであつた。

電車の音もなくなつた。夜の街の息づまるやうな静まりの中に、

のさばり出すだけだ。予期もされずフイと消え去る——世間は啞然とする——自分等の無智をはじる——。

そうだ、これが一番の復讐だ。そうして私は一番の勝利者なんだ……。

富田君は再び快活な歩調で歩き出した。えい／＼／＼、こういつて空中に手を振り上げてみたい氣持だつた。

家に着くと、茶の間では養父の五平さんと隣の隠居が長火鉢をばさんで酒をくんでゐた。そうして、戸を開く音に二人共ぐるりと顔をむけ、ガラス戸越しにケゲンな目付で富田君を見つめた。

何を云つてやがるんだ、俺は死ぬんだぞ。そうしたらお前さん方はどうするんだ。「俺たちはやはりあいつが分らなかつた。何とか考へやうもあつたのに。」そんな時になつて云つてみたつてはじまらない。「道樂者」とか「恩知らず」だとか、叱言の百万べん並べ立てゝも、俺の氣持は爪のあかほども考へてみやうとしないのだ。後から吠え面かゝないでほしい——

富田君はすごいケンマクで二人を見据えると、横んであつた反物の山を蹴倒しさうになりながらドン／＼と踏み段をならして二階へ上つた。そうして、上衣もネクタイもみんな勢よく押入れの中になげこむと、さつとフトンの中にもぐりこんだ。

カーテンもないガラス窓からは、先程の夜空が部屋の中を覗きこんでゐた。

自殺についての空想——

チロ／＼、チロ／＼といふかすかなせゝらぎの音がするばかり。富田君は、靴音がこのしづけさを破るのを恐れるかのやうに足を止めた。精一杯、体中であた／＼かい満足を呼吸すると、力の抜けた、夢のやうな感覚の中にすっかり身を投げ出してしまひたい誘惑にかられた。

そうだ、「やがて死ぬ、けしきも見えずせみの声。」やはりあの句も満更ぢやあなかつた。

死の幻想——私はこのまゝ死んじまほうか。

私が自殺する。書置きも何もかゝずに。そうして翌朝各新聞が報道する。皆おどろく、私を憎んでゐた奴までがおどろくだろう。

——やつぱりかわいそうな事をしたなあ。氣の弱い奴だつたのに

幼なじみの女の子達はどうかだろう。

——どこかあの人は、若い中に死にそうな淋しい所があつたわ

こう云つて溜息をついて考へこんでしまふかも知れない。

今日のあの横江といった娘さんはどうだらう。あの丸い鳩のやうな純な目をしばたゝいて、今夜のことを思ひ返してくれるかも知れない。

あの酒場の女は……

あゝ、フツと死ぬ氣になつてそのまゝ死んでしまへる人間は確に最大の樂天家だ。そうしてこの樂天家だけが人生の勝利者かも知れない。深刻がつてみたつてはじまらない。悲しんでみたつて世間は

最後はこうつぶやくのだ。Adieu と。

そうしてカルモチンを二十錠のむ。いや、もしものことがあつては困るからもう五錠たしておかう。二十五錠のカルモチン——何だかソクラテスの最後を思ひ出させる。毒杯をうけて呑みほす、四肢が冷えて次第に硬直して行くのを感じながら泰然として床に就いて死をまつてゐる。弟子達は傍で泣いてゐる……まるで芝居だ。私はもつと淡々としてた。

——腫瘍が来る、この電燈の光も、ピカピカ輝いてゐる星も、だん／＼かすんでくる。全身の力が抜け出て行くやうな放心——全く眠りながら死んで行くのだ。

なやみ多かりし青年のこゝにねむる

——享年二十三才——

そうだ、これなら小説が書けるぢやないか。「やがて死ぬ……」あの一句をめぐつてかいても良い。

彼は手をうつてよるこんだ。「これはすばらしい。」

この前、酒場の女のことを書いたらKのやつは小説ぢやないなどゝ抜かしやがつた。Nにしてもだ。よし、今度はあいつ等も魂消るだらう。それから雑誌に投稿して……

いや／＼、そんなことよりまづつゝましくあること、自分自身にもつと眞実であることだ。すべてあんな奴等は眼中から抹殺してしまふことだ。あいつらは大体この私が分らないのだ。

私が小説をかくと云つても、何も小説かきにならうといふのぢやない。小説なんか書くより外に一体私のするどんなことがあるの

か。何もない。だから私には、小説を書くことだけが残されたことぢやないか。見栄やタレントの問題なんかでもない。……

ゴチンと固苦しい筆ではうまくない。あの山の稜線のやうにすつきりと且高低があり、人の心にしみくとしたものを興へるやうな——何だかむづかしい條件だ。遺書の形では——しまりなくダラ／＼とかいてしまひそう。それに大事なものは死者をめぐる人々をかくことだ。色々の傾向の人間を出して来て夫々に好き勝手なことをしやべらせる。——うん、それなら戯曲にした方が良いかも知れない。そうして舞台の上で活潑に多くの人を動かして、私の死んだことについて色々取沙汰させる。

時 私が自殺し、その死体が発見された夜
所 私の家の一室。奥には棺を置いた佛間がある

——あ、男に会つたのは二三日前のことだつた。公園をブラ／＼

歩いてゐるのを見かけたんだが、ポト／＼といふ足取り、後姿なんか何だかこの世のものではないやうな感じがしたよ——

こんな具合に色々風評を並べて話すやつ。ゴシップを得意がる男。役所のNなんていふおしやべり野郎を引き伸ばしたやうな型だ。こういふのは、なるべく舞台の前の方で始から終までベチャベチャしやべらせて動きを大きくさせる。

——何だか、吾々の痛い所を先に引つさらつて行つたやうな気がする——

——吾々が存在の意味を考へたら、誰だつて生きて行くことに疑ひを持つのは当然だ。それでも死なうとしないのは、たゞ自分で手

を下すのがこわいだけなんだ——

すつかり死者をまつり上げ、少しは羨望すら感じてゐる奴。悲痛感はその芝居氣タツプりな表情程でもない。

——生きてゐるものは死者に対して論ずることは出来る。よくも悪くもね。でもそれに対して死んだ者は何も云はないし、又何も云ひえないのだ。屍に纏うつなんて全く生きてゐるものゝ得手勝手だよ——

こんな風に言説を差控へやうとするものもある。そうして、ヤイ／＼とうるさい野次馬根性に、舞台の片隅からチクリと針を指す。……「それにしても、まだ／＼私は得意になりすぎてゐるやうだ。死んだ者に対しては、畏敬や愛惜よりも、多くは非難や崩倒の矢が及びせられるのが實際ではないか。近視眼的見方は禁物。

私は狙の上の魚である。そうして、冷徹な厨夫の心をもつてそれに向はなければならぬ。そのために私の身体がズタ／＼に切られやうともかまはないのだ……。

——死ぬとは生よりの逃避だ。苦しみにあたえて行くことが出来ない弱者さ——

こんな常套的な言葉は今更何の感動をも起さない。

——やはり色氣があつたよ。死ねば人がみとめてくれるかと思つてね。でも、死んだらそれまでさ——

まだ／＼甘い。先程私は自分の死を何といったのか。

——あいつは死ぬことが世間への復讐だと考へてゐたのさ。しかし、あいつはそれの実、世間を嫉妬して死んだのさ。自分の思ふに任せぬから——

第に心は落ち着きを恢復して来たやうである。

だが、あれほどのあわただしい著想は、如何に日本語が容易で、やはらかなベンとすべりよい紙があつた所でかきとめるにはむづかしい。

まづ頭の中でまとめること。

富田君は、汗ばむ程三本の指にしつかりとペンをにぎりしめると再び目をつぶつた。唇にかすかな微笑をたゞよわせながら。まさに快心の笑みである。

一九四八、十二、十

伊藤完吾

いや／＼もうおしまひだ。
頭よ、廻轉をやめろだ。
女一人のことですつかりのぼせ上つて、とてつもない空想に迫はれまくつた挙句、又しよんぼりと沈みこんでしまふなんて見られたさまぢやない。

それよりもまづ、小説でも戯曲でも書くことだ。
まさにボードレールの *Heautontimouménos* (我と我が身をさばくもの) ぢやないか。

我は剣にして刀
打つ拳にして打たるゝ頬
四肢にして且拷問車
死刑囚にして且死刑執行吏

どれ程の時間がたつたか分らなかつた。しかしまづ颯風一過。次

雪道ほそぼそ暮れて来る二人つれ立つてゆく
峠を越えて北國の風の身にしむ旅にをり
流れは犀川のもう秋雨の降る荷車
道へ道のなくなつた雪道へ一人の来て
傘持つて出た日は晴れて来て蝶々
雪でない月が出てゐてはさやうなら
輪かざり弟の手にも持たせてぬくとい陽がある
月夜、ねたまゝでゐて煙草手さぐる
雀、軒に来てゐて眼がさめたのだつた
遠山雪のちらほら電柱又一つ越した
冬の朝日は射し込んでゐて寒い本堂の柱で

「きんもくせい」

畑尾 ひさを

追ひすがつても どうして……

とほい しら雲に

蒼白の面ざしは かげろひ

少年の足下には

ペン／＼草が揺れ

揺れうごく あの日には

朱銀のメダル

悪童に奪はれ果てゝ

いたつきは

ころろ はかなく

立ちつくす

父母のない子に

しら雲と ペン／＼草が
悪童のごと

「宿命」と告げて……

はかなくひろい

おぼゝの庭に きんもくせい

きんもくせいの にほひ漂ふ

きんもくせいの にほひ浮べて

ひとしきり

なみだは

朱銀のしづく……。

「青白き旅愁」

徳 村 彰

旅愁とはまた何であるか

そこはかとなくうつろうものゝ

秋の夜に窓辺をさまよふ

恋しき人よ

魂の深みに入り来るものはなにであるか

うす白く羽虫等のとびかひ

青色の玻璃はおびえにふるへる

あゝ 旅愁とは何であるか

果かない追憶の時空の中に

今日もまた

女はそのころを悲しむ

「業の靄」

青 木 裕 隆

今宵 蒼き

静寂をこめ

靄ながれて

こぼろぎは目覚めぬ

その鳴き音は

かたへの蘆の葉にふるへ

小さき悲しびをよび――

あはれにも

目をとぢし人の

あきらめは重く

嘆きはかれて

まやかしの「壺」におちゆく。

静かなる

業の靄ながれ

償罪のいや果てに……

「姿勢」

西 辻 明

私の前に輝く純白のページ

そこに私は何を書かう
碧い海の底から 靜かに
私は私の鍾をひきあげるが
その滴りは透明な光だけだ
私はそこに何を書かう

とある日の風にまかせたわかれ

涙にぬれた一本の指のほがらかさ

花々を愛撫して過ぎる光と翳の交錯

——さうだ 私は

遠い空の果から流れる

ひとすぢの線の低抗をしるさう

十和田湖

永見 克茂

朴の葉の瀑布に触れたるたまゆらのほかなき
美をば見しと言ふのみ
名にし負ふ八甲田山指させばバスの吟りに重
くどよみつ
まなかひに現れ来もよはろ／＼と十和田の湖
は藍に煙れる(羽衣峠)
高原のオゾンを吸ひて太り行く露の大きさよ
傘にさしたり
隠り江の木ぬれを打ちて小雨降る雪秘かに小
舟もやひぬ
カルデラの湖は深しもしんと藍の淀みに
恐ろしさ見つ
山こめて鳴く時鳥みちのくの葦深き湖の此の
静もりよ
透き通る水の清さを惜しみつゝ青水晶と口に
ふくみぬ
樹の露を溶かして流す奥入瀬の水は清きこそ
冷く掬へ
陸奥の山深みかも樹の海の眞底にありて空を
かなしむ

虚 体

太宰治が駄々をこねて人間失格したり新
しく救はれようと前衛文学の人々がいらだ
つてみても大きく力強い文学一般が生まれ
ずに複雑な戦後の空気が無為な

とき……面白い!「虚体」
といふ概念が跳び出した。植谷
雄高の「死霊」の中である。

抒情詩と叙事詩の関係(特に
ゲシュタルト心理学的な影響に
牽引されゲーテからニーチェま
で取り上げられたそれである
が)、数学に於ける正負の関係
やX軸Y軸の関係、つまり生へ
の意志とその反対否定的な死へ
の消沈との関係。そのような人
間の両極的な意志方向の中間、
肯定的にしてそれが同時に否定
的な空虚、ベシミズムだとかニ

ヒリズムだとか從來ありきたりの概念では
包摂出来ない概念に表象される世界。つま
り虚体!肯定も出来ない、否定も出来ない、
正の方向を意志することも出来ない負の方

向を思考することも出来ない人間のたじろ
ぎ、ゆらめき、それをサインとしてみつめ
る人間像。最早人間からの逸脱に人間像を
探索する懊悩。こういふめづらしい思想が
死霊十巻に生れる。いよ／＼奇異な「人間
のあたまで」が出来上がる。ドサクサまぎれに
漂ふわれ／＼の知性にはなにかマゾヒズム
的な刺激や快感がひびいて仕方がない。そ
れはドストエフスキー的な世界と実存主義
的世界の交錯が現代に最も近いのである
からだらうが、それでも矢張りそんな大胆
な人間から人間にあらざる人間への逸脱が
虚体といふ人間本来の姿には無理な思想で
今日の生一般を永続的に支へ得るかどう
か?

虚体なら虚体でなるほどいい。しかし一
つのそういう思想を取り入れることがそも
／＼それだけで一つの方向への志向であり
意志方向になりはしないか?そしてまた一
方向の肯定がその否定的方向を予想するこ
とになつて虚体をもち出して人間の内面
的情念の抒情詩的方向と叙事詩的方向は相
互の否定的契機に連結されて存在するのだ
し戦争に依つて人間自らが解き放つた巨大
なマシーヤは、たじろぎ、ゆらめく生の姿相

そのものにどのやうな実定性を與へても拭
拂することは出来ない。

一見ひどく我々の思考作用に影響する新
しいグロテスクな観想形態も結局空轉文学
としてしか現れないし、それに束の間の
快感を食ふのが戦後せい／＼の文学観照の
態度なのだ。

まだ／＼作家は空轉に疲れねばならない。
いやが上にもグロテスクな概念を振りまわ
して民衆のマゾヒズムをあやさねばならな
い。暫くは(いやこれからずつとかも知れ
ない)そういう文学が文学であるのだらう。
現代の人間には純粹な叙事詩或は抒情詩に
素直にとりつかれることは不可能なのだか
ら……

まだ「死霊」が完結せぬ矢先きこんなこ
とを書いてお叱られるのにきまつてゐるし、
だいいち私自身外の人達と同じやうに此處
にほんの一寸走り書きするのだからチヨッ
ピリの責任もとより度くはない。

(畑尾ひさを)

僕達の位置について

過去に一つの文藝復興も宗教改革も持た
なかつた日本が明治以来ヨーロッパ文化に

Létoile Polaire

接しこれを吸収しようとした時、それは必然的に頭の中だけで理解された歪められた形となつて受入れられざるを得なかつた。哲学も文学も奇妙な倒錯を無意識に背負つて居り、その社会的生活との関連は考へられようともしなかつた。これは悲しむべき事實である。ヨーロッパの風土にのみ成長し得たヨーロッパ文化はその近代市民社会成立の過程をぬきにしては理解出来ない。社会機構の急激な変革と共にそれは一個の人間の内部では人間（オナム）と市民（シトワヤン）の分裂として始まり、この分裂こそが爾後のヨーロッパ文化を成長させる酵母であつた。キリスト教的傳統のそこで果した役割も大きい。今日僕達が僕達の持つて居る歴史と傳統（若し傳統と呼び得るならば）を考へる時その間に横には居られない余りにも大きな差異に驚かすには居られない。僕達は全く異質的な土壌に全く異質的なものを植えつけねばならないのだ。僕達自身の生を主体的に追求しようとする時にも、このことは深く反省されねばならない。日本の精神史にオナムとシトワヤンの分裂があつたか、僕達にキリスト教に較ぶべき決定的な傳統があつたか。僕たちが不安と

僕は、中村眞一郎の「可能性」を信じない。又、「私小説が誠実だ」といふのは非常に同情的な見方であり、そこまで行つてをればよい。」といふ中野好夫の言には、氣負つた批評家の空言葉を聞くだけである。

新しい日本文学の行き方に於て、先づ私小説のゼネラル・ラインを打破する事がしきりに叫ばれる。僕は決してこれに異議を唱へやがとは思はない。たゞ浮石立ちながら、私小説の名の下にすべてを葬り去らんとする無業を恐れるのである。

嘉村磯多について福田恒存は云つてゐる。「彼は私小説を完成し、同時にその完成によつて己が生涯と共にこれを葬つた」と。

僕には、中野好夫は嘉村のに
じみ出てくるやうなあの「業苦」の二字を
も理解してゐないやうに思はれる。又、嘉
村の文学は凡ゆる可能性を抹殺しながらも
必然性の制約の中にどれ程の充実した生命

涙のりール

私小説について

習慣について

松下圭一

大西洋の北緯十度に点する孤島にヨロップ生れの水夫ロビンソン、クルソーが漂着した。薪水の勞の裡に彼は島を設計し、日時計を工夫し、魚油燈を作り出してゐた。又、朝夕深い敬虔の情に、神人の感謝、奉仕を献げた。それは飢餓を癒す爲、死への恐怖の爲ではなく、生くるものの權利として渺茫果なき海洋の小島の生活を営むのだつた。けれども人間本來の共同生活への欲求が屢々閃き、神の威光と慈愛との内証に預りし間は巷間に求め得ぬ程の幸福に感謝し得たが、今にも帆船が水平線上に現れけぬかと焦燥する心に想念を彼方の國へ馳せ、それ故に神の恩寵に安心しつゝもなほ丸木舟の刳作に帰郷の夢を秘めてゐた。デフォは彼に理想的ビュリタンの生活を築かせてゐるが、この漂流記に展開されてゐる生活はヨロップ社会の淨化された縮図に他ならない。さて彼は社会から絶縁せられた島の生活を彼一人の肉体に支へて営むのであるが、その時彼は既に生長し、教育されてゐた人間であつたといふ事實、同語反覆的にもせよ、ロビンソンは人間であつたといふ事實に我々の関心が存する。彼にとつて日々の課題は、如何にヨロップの生活様式をこの異土の上に再現するか、にすぎなかつたであらうと思はれる。ロビンソンの島に於る生活の様式は、その原型を既にグといふ過

去性を帯びて当時のヨロップの生活様式に所有されてゐたのである。我々はこの漂流記に何を讀まうとするのだらうか。常に考察の出発点は、すべて生命を有するものは環境においてある、といふ事實である。凡ての生物がそうであるやうに、人間も一定の環境の内部に於てしか生存しえない。人間は生活する限り常に自己を、その圍繞する環境に適應せしめることが必要である。環境適應は生命の図式である、ところで他の生物の適應作用には、不可抗、的確、微妙な本能の活動が觀察されうる。彼等は自然として自然を呼吸し、その適應は本質として確実性、必然性を伴ひ直接的である。それに対して人間の適應作用は、間接的、距離的——プレツトストルに従へば人間の特殊性は離心的 excentric といふ点に存する——に爲されてゐる。人間の適應は作業的、技術的であり、道具を媒介してゐる。即ち他の生物の場合、適應は判明な意志や意識を伴はぬ暗黒の自発的傾向であるが、人間においては理智の光に指導されてゐる。我々は環境に適應して生きる道を自ら考へ且つ學ばなければならぬ。

適應は相對立するもの、均衡の關係——生物と環境との間に於る機能聯関を意味してゐる。

例へば解卵直後の蛙は鰓を所有してゐるのであるが、生長するにつれて漸次鰓を消失してゆき、陸上の生活に及んで完全なる肺臓を獲得することは蛙の發生の觀察にみられる興味ある事實である。諸生物の種は機能聯関において各々の適應様式を形成しており、それは身体の構造に表現されてゐる。身体の構造は近代進化論の説く如く、生命の函数であるのみならず、環境の函数であるといへる。機能聯関的に身体の構造は生命にとつて中項的、道具的であり、それは器官 Organon と呼ばれる。けれども更に人間は身体のもとに制作し、制作された道具 Instrumentaltechnik を操作する。道具の操作によつて人間の環境への適應は媒介されたものとなり、間接的距離的な性格をもつてゐる、かくの如き人間の適應形式に沈澱してゆくことによつて形成されるものが習慣である。人間の適應過程の裡に習慣は凝集してゆく。習慣は高次の生命の機能として、呼吸や消化と等價の序列に属し、それは深く人間に浸透し、人間の行爲に循環してゐる。更に飛翔する鳥の翅が鳥の環境への適應の結果であると共に、鳥の活動を規定してゐる如く、習慣は人間の活動形態を制約し、人間にとつてそれは物理的、生理的、なものを構造的に意味してゐる。それ故習慣は人間の存在の條件であり、人間の行爲構造の形式である。本能が生命の先天的機能を意味するならば、習慣は後天的機能として人間の構造に決定的といひ得、それは獲得された自然、アリストテレスに従へば第二の天性である。

習慣は人間の実験的生命の所産であり、種族の、個人の絶えざる試行錯誤の行程に消費されたエネルギーの昇華である。通常習慣の概念は反覆の概念に關聯させられてゐるが、反覆が習慣の形成に重

要な契機をなすとしても、反覆のみが習慣を可能とするのではなく、單なる機械的の反覆は習慣を獲得しえないのである。習慣は生命の内的な潛勢力、種的能力における変化を前提としており、結果論的には更に可能的な生命の形式ともいひうる。「習慣」はもはや無く未だ無いところの变化の爲に、即ち可能的变化の爲に存続するのである……しかもこの當の变化に向ふところの、素質なのである」とラベツソンは云つてゐる。習慣は機械的なものでなく生命に貫ぬかれてゐるものである。單なる反覆は時間性を優遇する生命には決して現象せず、生命における反覆にとつてその繰りかへされる各々は同一の價値を有してゐない。反覆とは、落差的、危機狀態における生命が環境との均衡に到達せんとする過程の様態であり、それ故に習慣の形成には必ずしも反覆を必要とせず、一回の変化のみでもつて安定的な習慣に移行する場合も可能である。

かやうに習慣は可能性の範疇に於てのみ勝義に把握せられ、斯かる平面にのみ経験の可能なる場が存在してゐる。経験 Experience と実験 Experiment は To try を共通の語源としてゐる。イギリス正統派心理学は經驗を行爲から抽出し、それを意識面上にのみ分析したのであり、実践的にはなく靜的に過去のものととして觀照して來た。經驗は未來への、飛躍への決意に支へられ、試行錯誤の過程として我々がその環境と相交渉する仕方——プラグマティズムの主張する如く検証的過程であるよりも寧ろ創造的構成的であると共に、所與性を課題性として把へ、更に自由性に轉換せんとする実験的努力——である。經驗は合理主義哲學の定位したように感覺的受動性迷蒙性を属性とはせず、根源的に能動性として規定せられ、試み

として洞察を含み知的ですらあり得る。この実験的努力の結果発明された適應様式が意識から肉体的に頽落することによつて我々は習慣を獲得する。一般的且つ恒常的な生命の存在の仕方即ち生命の危機的狀態に觸覚される抵抗感——絶えざる均衡の崩壊によつて没落する斗争の深淵における時間の意識——これらの運動の意識の外に努力感であり、内面が人格性の意識、即ち意志であるが、新しい適應様式の模倣と反覆との持続的行爲系列の裡に努力の意識は暫時消滅し消失してゆき、その反面、意志の自由性は増加し、人格性は高揚されてゆく。我々が努力感として意識するものは専らこの關係的環境の抵抗に外ならなく、模倣を反覆の持続に我々は行爲の着力点の選定の確率を増加してゆき、と同時に我々の努力の意識は消えて行くのである。努力は、いはば生命と環境との均衡の場所であり、そこに我々は僻或ひは傾性を獲得する。傾性は意識の沈下したものであるが、それは発生的には勿論、現実にも合目的傾向であり、無意識的暗黒でありつゝ知的なものを含んでゐる。就中これはもはや意志の規律を待たず、それに先んじ、意志や意識の支配を、全然、屢々脱してしまひさへもしており、そこに行爲の形が鑄造される。この傾性が次第に習慣といふ実体的表象にまで結晶されてゆくのである。かくて習慣は高次の生命と自然との間の共通の境界、換言すれば動的中項を意味し、それは絶えず移動し、一方の極から他の極へと不知不識の進行によつて移行行く境界であり力学的流率である。我々の行爲が習慣的になる事は、自然的隋性的になることであり、極限的に肉体化されるのであるが、それ故に行爲は自発性において高まるのである。この意味に於て、我々にさきなる

もの、そとなるものとしての Instrumentaltechnik は Organtechnik に、機能としての習慣に媒介されることによつて移行し、その結果我々は原始人に比して量的にも質的にも優位な内体を所有する。あらゆる生命は機構を通じて作用する。そして生命の形式が高い程その機構は一層複雑になり確実になり意の如くなる」とデューイは云ふが、この事実のみが生命と習慣、人間と機械との矛盾を救ふと思はれる。よきヴァイオリニストはよきヴァイオリンを演奏するであらう、一方習慣が枯死した形骸なるか否かは生命の飛躍に依存してゐるといへよう。

行爲は環境の刺激や抵抗に対する現実的能力の過剰から生じ、それは適應作用といふよりも、生命の創造作用として具体的に認知される。環境の項的因果は決論的でも決定的でもなく——主体に対し客体は既に之といふ過去性を存在論的に荷ふ——又環境は行爲の關係項といふよりも、生物の活動が適應の均衡の眞の原理である時、寧ろ生物のイニシアティブの條件を意味してゐる。故に生物は自己の條件換言すれば環境との關係によつて制約され変化をうけるのであるが、又自己の本性そのものなる高次の能力によつて変化を自発的に始めると見られ、その能力はゲーテの言葉の如くに天賦とも云ひ得る。けれどもイニシアティブの形式は技術であり、生命は Technik を体とするが、殊に人間に於てそれらは習慣——言語、制度、道徳、道義、機械の総体——に表象され、習慣は人間行爲の構造にあつて我々の生命の生理的機能として自己同一的に存立すると同時に、他方行爲の條件、生命の境界として認知されるならば、それは我々にさきなるもの、そとなるものであり、第二の環境を構成

してゐる。それは第二の自然であり、これは第一の自然の中に究極の根拠を有するも、なほ行爲の環境として我々には優位に把握される歴史的な環境である。我々に形象を備へて顯現し、思惟を構成する構想像として意識に流れる自然は歴史的な自然、第二の自然に他なく、習慣に生きてゐる存在なのである。ベルグソンは我々が物を見る場合、我々が我々に與へるのは現実の框の中に挿入された一種の幻覚である」と云つてゐるが、この言葉は存在の深い意義を暗示してゐる。There is a poetry of memory and of the mere effect of time とベーターも記してゐる。自然科学的自然も主体的実践において時間と空間の枠に構成された歴史的な自然なることは既に知れる事であるが、第一の自然とはかへつてスピノザの能産的自然に意味せられたときのものであり、第二の自然は所産的自然に概念せられてゐるのではなからうか。ベルグソンの幻覚に関する文化科学的解釈はとまれ、我々は幻覚の世界の中に、習慣の中に生存を続けてゐるのである。幻覚の世界それは虚構の、神々たち（偶像、英雄、偉人、先祖）の神話の世界であるが、かゝる意味でソレルやヴァレリイと共に神話を哲学の課題とみなすとき、我々は更に廣い視野を獲得するであらう。

さて個人の習慣は、彼に先行する社会の要求を伴ふ慣習への模倣即ち教育の過程と彼自らの試行錯誤の過程との化学的融合の結果である。彼は社会の中に産み落され、社会の活動は彼にとつて既に、あるものであり、彼は通常その社会の言語を倣ひ、被服を着せられ、社会は又同色の旗の下に結集し行動することを要求する。まことに慣習の性質は断言的であり主張的であり、自己を永続せしめん

とする保守的なものをもつてゐる。けれどもこの事實は可成りの範圍迄各個人の遭遇する諸條件が平均化——現代社会に於ては時に顯著なる傾向といはねばならない——されてゐるが故であり、それは寧ろ自然的であり、且つ彼の自身の行爲を彼の属する社会の習慣の型に同化せしめる事は彼ら生存の、更に社会への参加の必要必須の條件なのである。「我々は社会の奴隷ではないか」といふ抗議は抽出された個人のベシミステックな幻影に止るであらう。翻つて抗議せんとする批判的知性自體習慣へ『歴史』の産物なる事を我々は認めねばならない。習慣によつて汚されていない——若し好むならば斯様に云つてよい——純粹な理性が存在するとするならば、それは虚偽であり、啓蒙時代の十七世紀にデカルト、スピノザにより定位された純粹理性の概念はもはや我々に象徴的な意義しか有せず、純粹とは則ち淘汰され、抽象されたとの意であり、嘗て心理学者達が本有概念をとるべきか、或ひは空虚な白紙タブラ・ラサをとるべきか、との論争は認識論史上の一頁としてよみがへつてくるのみである。次いで日常的には自然的生具的であると考へられてゐる感情 (emotion) と次元的に区別される sentiment も習慣の産物なるを脱れない。感情の類型性の問題として提出されるであらうが、例へば日本人において松と薔薇が活けられてゐる時奇異の感を禁じえないといふことは、歴史的に松竹梅が存在し、既に此等一聯の自然物に慶賀の象を抱いてきた傳統の反映なのである。又ルッソーの場合も想起されうるが、恋愛の感情に決定的程度に迄も文学が作用しており、オスカ、ワイルドは自然は藝術を模倣するといふアンチテーゼを提出してゐる理由もこゝに存する。加ふるに理想は何か個人に生具す

る能力に基礎を持つのではなく、寧ろ個人は集團生活の時代的地理的教場にて理想形成の技術を習得してゐるのである。

習慣は第二の自然である。我々は社会の奴隷ではないかといふ如き抗議は、何故我々は生きてゐるのかといふやうな問と一般である。生存は事實である。習慣は我々に又物理的生理的事実である。事實は事實として凡ての價值判断以前に存在し、それを超越してゐる。存在の秩序に於て知性は後からやつて来た。答へ得べくんば「我々が生存の限り斯様なものを内容とする生活を生きねばならぬ」とのみであらう。我々の間が中世的な *Welt* ではなく、知性の境界の自覚をとして *How* のみが許されてゐるならばその間は、如何にして此等と内容とするか、に轉化せしめられねばならぬであらう。ショペンハウエルの錯覚を再提起してはならない。

「社会、言語、法律、道德、藝術、政治、凡て此等世の中に於て信用を基礎とするものは、その原因において同様でない此等凡ての結果は慣習 *Convention* を換言すると待場 *relais* を必要とする。

それへの迂回によつて或る第二の實在 *une réalité seconde* が感覺的な瞬間的な實在と共に設定され、組織され、このものを覆ひ、このものを支配し——時としては原始的な生命の恐るべき單純さを現はれしめる爲に引き裂かれる」とヴァレリイは云つてゐる。例へば道德は慣習の全体に還元し得るところの、そして我々に到る處で、又素晴らしい能力で迫つて来る不可視の實在である。この實在は如何にして——その發生は決して意識的ではなかつた——作られたるかは知られぬやうな人間の間に遵守され、我々に浸透し循環して生きてゐるものである。道德は我々の生活の技術的な所産なるにも拘らず、

ある。科学に於ても抽象的一般法則が個々の事實よりもかへつて學問的に重要であり、其の時具體的事實は質料と把握されることによつて悟性が優越してゐる。歴史的世界に於て抽象的なものは却つて具體として實在であり、勝義に人間のものを意味し、人間の行爲は抽象的實在への憧憬と情熱から発してゐる。我々は事實の大地の土着民であるよりも寧ろフィクションの國の市民である。事實の大地はつまり生む自然を指向し、フィクションの國は生まれた自然であり、生む自然の相繼ぐ業績、啓示光明であり、生む自然の實現である。その市民達は事實の大地を企劃してゆくカテゴリー性を構造的に具備してゐる。

千里の海洋をも遠しとせずして原始人はカヌーのみで航海しうるけれども、我々の活動は全く緻密多様であり、活動には整備された膨大な機構を必要とし、もしでなかつたならば文明は主観の意図を完全に果すことは些少とも可能ではなく、それは予め快適に準備された環境を前提として要請してゐる。この膨大な機構の崩壊は直接に我々の生活の支障破壞を惹起し、我々は爲すすべし知らずミニマムとして沈黙の宇宙に投出されるであらう。——則ち我々は想像以上の素晴らしい飼養箱に生きており、この機構を内肢として生活してゐるのである。けれどこの故にこそ文明は人間の能力を支持し拡張し、そこに労働と技術が尊重され、未來を保証してゐる。個人は水泡よりも儚く慌しく水面から消え去つてゆくけれども、彼等の事業は生の客観應として生き残り、一層充実した意義をもつ活動を更に育成して發展を可能としてゐる。我々は種族維持を生物の究極原理として認る如く、この社会的遺産の相続を未來への我々の巨視的に

かへつて呪縛的の活動力を有してゐるが、それは人間の生存の限界を意味し、且つ社会への参加の必然的要請なのである。此等の第二の實在をヴァレリイは擬性 *Technic* とも称してゐるが同様の内包を、デュルケムは強制力の淵源、基盤としての *レ・グロ* という概念に取扱ひ、閉ぢられた社会の思想にベルグソンは展開してゐる。

コンベンションはコンベネンス *Convenience* として個人に *Technik* であるが、更に個人を超えてノモス的であり、強制的な權威を具備する。勿論習慣の強制性は自然必然性でも、或は権力的外的なものでもないが、我々の欲望と傾性の、行爲の形に潜在してゐる必然性であり、暗性の、肢体の法則なのであるが、それが我々の行爲に於て自覺的に抽出され實體化されて、規範的擬制に固定するのである。

我々は禁忌 (*Taboo*) とか慣習法にその直接態を考察出来やう。古典も我々が意識的に評價し、撰定しはしなかつたが、我々の美的感覺を涵養し、美意識の規範となり、藝術の世界に秩序を構成してゐる。文法学にとつても同様の事が云ひえ、もし可能であるとして文法を抛棄することが我々の言語の混乱を醸出する如く、我々がこの擬制を脱却せんとする事は人間の條件を——人間の權利を棄却することを自己に強ひるのであり、それは人間の生存の停止を意味するに他ならない。それ故廣義に我々が習慣であり、フィクションであるといへよう。我々に夢が又虚偽が現實以上に現實性を帯びて訪れ得る事はよく経験されることであるが、流言蜚語の構造がこれであり、アナトール・フランスの短篇 *キビュトア* にその実態が示されてゐる。更に藝術自体が斯様な構造を有しており、虚構に自己の人間的存在性を賭けることにより、藝術は逆説的に可能とされるので

透徹した確信のうちに進歩の原理と認る。我々の生活は自己の恩恵のみによるものではない。「既存の環境に於て秀れた生活を可能にするものにはすべて忠節を盡すことは、凡る進歩の初である」とデューイは云ふが、我々は自己の人間的存在性を客観との聯関に見出し、習慣が自己の活動形式の基底を構成し更に範型として超越的であることを自覺するならば、習慣といふ過去からの命令は却つて展望的態度に把握され、強制としてよりも歴史的社会的自由により我々を開放するものとして行爲を規定せしめる。習慣の意義は我々の祖先から傳承された傳統に依存しており、我々の努力が子孫の活躍する世界に齎す成果についての予見を媒介する事によつて、日々の生活は、嚴肅にされ、高揚される。過去への感謝とは神學的に感謝自体或は歴史主義的に過去自体への爲にではなく、それは歴史の流れに於ける現在の発見であり、現在の收穫を未來に獻げんとする我々の態度である。ミニマムの個人は現在の笑ひを豊かにする行爲にのみミニマム性を超克して、自己を客観化し永劫となし得るであらう。個人の主観的意図・欲望は個人の肉体的消滅と共に凡てを消失し、虚無に祀られるであらうが、彼の事業は客観に自らを傳統と化してゆく。又我々は幾度死してもよい、又幾度擲棄されてもよい、創作としての生の客観應の裡には生自らの祝福があるであらう故。ニヒリズムとの対決は自我の心理的對話によつて得られるものではなく、歴史との、社会との実践的對話によつてのみ可能とされ、それは流轉に生き、流轉を斗ふ *レ・グロ* である。

我々は客観的機構、制度に働きかけることなく、愛と平和の情操を説教しても無駄であり、人間の良心にのみ働きかけるのではな

く、人間の精神と相関的な且つ人間の精神の現実としての環境にこそ鍵を握るべきである。或る成果を期待する場合、それを可能とする客観的条件を準備しないならば、道なき山嶺に自動車が登場しうると想像することとなり、魔術或は奇蹟のない限り不可能である。我々に可能なことは山を拓くことのみ——斯様な努力なくては如何程善良な意図もヒラケ、ゴマと化してしまふ。我々の行為は我々に先行する習慣に浸透されており、習慣は能力であり技術であり、我々の行為の肢体である習慣を閉却することは手段を知的に統御、操作することなくして願望を祈念する魔術的態度を意味し、それは客観的諸條件の科学的研究を妨害し、人間の意図、努力を空しく浪費して徒花と枯死せしめる。願望達成への手段を発見する科学的探求、その手段を獲得し処理せんとする技術的工夫——知的に統御された習慣を抛棄することは、知的な生活組織への最大の障害である。有徳の賢者が執政すれば秩序は安定し、善意が経済的に望ましい効果を産出すると考へるが、けれども我々はアルチストであると同時にアルチザンでなければならぬ。手を持たずしてイデーのみに陶酔してゐるものは決して藝術家ではありえず、イデーに反省的な又否定的ですらある、技術的操作なくして達成せられやうとするイデーはイデーのみに止まり、それが内面に於て毒を醸しこそすれ現実的作品は創作されない。人がこの事実を反省する時、この理由は精神の秩序と物質の秩序が究極に異次元の系列であると決論し、この異次元の矛盾を内在せしめてゐる所に人間の罪業性が存し、靈魂と肉体の相反は其等の本性に根源的に由來して、恰もその關係は天國と地獄の如しと神学者は訓ふるが、彼等の願望は現実的手段の

喪失に逆比例して愈々上昇し傲慢となり、そこに默示録の誕生があり、現実の無力のみが天國の福音を齎す。我々は石女が神聖視されて來たことを知らねばならない。道徳も凡ゆる精妙な論理で格率、法則を神祕的絶対の陽光に掩はんとしており、イデア界にとつて地上は罪責の谷に過ぎなく、カントは「道徳法則についてみれば経験は悲しい哉、幻影の母である」と告げてゐる。その發生も活動も習慣を根柢とし、習慣に支柱を持つ觀念を先驗的實在と思惟した点に倫理学者の地上を蔑待し輕侮する倒錯の誤謬が依拠してゐた。この倒錯は觀念自体の擬制的性格に由來するが、それは心理的には眞である理性の自己満足の虚構に他ならない。とまれ我々の意図、欲望は肉体的及び精神的習慣といふ屈折力ある媒介を通じて現實を獲得する。藝術家の場合、イデーは作品に先行し、遊離して存在するものではなく、制作過程にイデーは自覺化されてゆき、作品の場に初て現實となる。我々はイデーを現實に超越してプラトンの意味で實在してゐると考察しがちであるが、イデーがイデーのみに止まる限りそれは渾沌であり暗黒の万能性に止る。更にイデーは純主観的個人的なものにその成立をみてゐるのではなく、習慣の裡に個性の活動を通じて顯現せしめられ、そこには既に習慣による技術的制約があり、客観と結合してゐる。逆説的にいへばイデーとは作家の触覚によつて把握され構成された現實の傾向性なのである。イデーはイデア界から借られてきたトランセンデンタルな存在ではなくして、作家的生活態度における一連の現實的製作の進行の裡に自覺化されてゆき、それ故音楽、詩、繪画等の藝術形式は制作に於ける作家の技術様式に制約されてゐるイデーの性格といへ、イデーは制作過程

の反映として自らにその藝術形式を内在せしめてゐる。藝術形式はイデーにとつて恣意的偶然的なものでありえず、或るイデーは一人の藝術家のイデーであり、そのイデーは技術的に自ら内在せしめてゐる形式から他の形式へのメタモルホゼを許されてゐないのである。渾沌のイデーは音楽家の制作過程に形を獲得して自覺化されてゆき、イデーの完結は音楽作品の完成である。作品は渾沌としたイデーの解消である。アルチザンはアルチストの條件であり、アルチザンのみがアルチストを可能とする。アランは「先づ職人だ。柔軟性のない物質的秩序が吾々に支柱を與へるや否や自由は顯れる。然し、我々が空想に従はうとするや否や奴隸性が我々を占領する」といつてゐる。

斯様に考察されれば、目的と手段とを遊離せしめる巷間の二元論は幾何の理由も失つてしまふであらう。一連の行為の進行の裡に目的は可能的に潜在し、顯現してくる。行為は事實であり、生存の形態であり、生くるものの権利である。目的が先行して行為があるのではなく、行為が生じる直接的事実である。この行為の進行のうちに目的は自覺され抽象される。又行為は環境適應、勝義には制作であるが、それは *Orgatechnik* 更に *Instrumentaltechnik* を媒介してゐる技術的なものである。目的と手段は實在の進行する行為に與へられた二つの名称であり、それは實在の区別ではなく、判断における区別を示してゐる。それ故作品は藝術家にとつて目的でもあり、更に自己との対決の試金石の外件である。手段は又手段でなくてはならないであらうが、それは中項的媒介的といふ構造化をもち、そこには目的が投射され呼吸してゐる。目的は又目的自体とし

て抽象され得ず擬似的に手段を媒介とし、手段を喪失せる目的は弱きものとして妖しい幻想と靡き消えてゆく。「僕は新しい倫理を作るのだ。美しいもの、恰愴なるものはすべて正しい。醜と愚鈍とは死刑である。さうして立ちあがつた所ですべて私には何が出来た。……立ちあがつて屍餅をついた。」「きりぎり舞つて舞つて舞ひ狂つた」二十世紀の旗手である。手段なき目的は虚榮の涙に写してみせた偶像に他ならない。目的は偶像としての實在でなく、擬造的な機能であり、手段の形式であり、目的は行為の現實的瞬間には手段に轉化して、*How* の問となる。行為は目的の線人形ではなくして、手段の持続的系列である。行為の直接態は目的といふより何よりも手段であり、それは成果をも手段と把握する我々の態度である。手段の系列は主体に対して過去性を帯びるけれども主体にとつては現在のであり、更に構造契機上未來に展開して居り、この故に行為は習慣を数ふ。根源的に實在性を荷つた行為聯関の世界に於て目的は現實に實現され、現實を獲得した目的即ち成果 *Means* は習慣の体系に沈澱してゆき、それは世界を豊饒化することによつて我々の行為を制約する。行為は行為にとつて惡魔である。又思想が習慣の活動に基底をもたぬならば、何処に在し、何処に作用するだらうか。思想が思想である爲には事物を統御し事態を指導する形相的能力を持ち、何等かの現實的効果が期待されねばならず、そこに習慣の介在を根源的前提としてゐる。習慣の裡に存在せぬ思想は實踐の手段を欠くのみならず檢証の規準にも欠け、シニカルな觀念の王國の禁欲生活に身を隠す。思想は羞恥心に富む一輪挿しの薔薇ではなくして、現實生活を実験的に貫いてゐる我々の生活の可能性或ひは個性

の條件の図式である。「凡そ深い思想家といふものは誤解されることよりも寧ろ理解されることを余計恐れるものだ」といふニイチエの言葉は何よりも思想は現実を欲し現実に斗ふものであるといふ事実を示してゐる。一般に肉体と靈魂、実践と理論、現実と理想を矛盾したものとして論ずる背後の具体的事実は我々の省察における地平としての習慣の没却と思はれる。

けれども習慣自体は階級的の法則により組織付けられ、他面その故に断言的主張的である爲、發生論的にはそうでなくとも、探求や想像の触角を萎縮させてしまふであらう。計量的批判的知性は痲痺的倦怠に陥り、情動 emotion は固定化した形骸の内部に毒を湛へる。けれども習慣を「様な密度の粘性組織」と理解してはならない。習慣は自らに相連続し相反する、階層的並列的時間的要素の滲透する個々の諸系列を矛盾的に抱括してゐる。殊に發明発見の増大に随伴する加速度的生活様式の変化、交通の発達による諸文化の多角的交流、科学の発展に喚起された人間視圖の徹視的巨視的拡張等に徴表される現代文明はこの諸系列の有機的な奇木細工を愈々複雑精緻に構成せしめ、それ故に諸系列間の衝突、相剋も活潑に煙撃的にすらなつて妥協を許さぬ矛盾を現実に露呈してゐる。この諸系列間の矛盾——習慣の跛行と崩壊、階級的な日常生活の絶えざる変動と没落は *dekant* なるものにおける常識的世界観を否定し知性を *erkant* なるものに距離的に解放し限界としての習慣の破壊によりあらはとなつた限界状況に於ける逃れがたき不安に提出されてゐる危機意識は、根本意識として、可能性としての自由を覚知する。そこに顯現してくる間隙に情動は流出し、この現実の落差への抵抗が即ち

源泉であるけれども、それは習慣の大樹に滲透し新鮮な樹液として流出する時のみそれは現実となる。習慣の絶えがたい重圧から解放されることは習慣の体系を新しい方法で操作し、かくて新たな目的と手段を確立することであり、情動は知性を媒介する過程に於て自己の存在論的構造を自覚する。

「凡てのものに裏切られ、総ての不正に打ちひしがれた。私は今から此の悪が何時も勝利を得る地獄から逃れて何処か他の果に人のない國を求め、そこで自由に立派な人格者として暮らしませう」とアルセストは嘆くけれども、我々は地理的に環境を脱出し得ても歴史的環境を脱出することは許されてゐない。アルセストは砂漠にまでも宮殿の色欲を誘はうとする。ロビンソンの場合、海洋の一孤島の潮風はヨーロッパの空気にしからずなかつた。空間的脱出は現実的に可能でありえても、我々に理想としての歴史脱出は *How* を問ふことによつて得られる習慣の知的統御の貫徹を意味しており習慣の緩地にそれぞれの個人は織込まれてゐるのみである。

次いで個人の意識はわれ／＼の意識の集斂的擬集点に他ならず、主体的には意識一般といふ如き抽象的概念ではなくして必ず一系列としての階級の意識である。勿論我々の出発点はデカルトと共に捨象を重ねられた極限意識としての自我意識に求められ、又 *dekant* なるものゝ没落の状況に出發があるかぎり、それを回避することは不可能である。意識が階級の意識であり、自我意識は階級の意識の傾向性であるといふ命題は、極限意識を方法的前提とした批判的探求——即ち「ある」*sein* の存在意味の探求の結果示される判断であり、それは出発点として前提されるものでは決してない。世界の指標とし

実践であり、「生の戦術」と呼ばれてゐる技術を媒介とした人間のイニシアティブに於て適應は可能となる。行爲は、個人にとつてその環境との平衡の不斷の崩壊による回復の過程を意味し、社会的には持続的改良——或る特殊な條件の下では革命として爆発するものである。革命の際抑圧された情動は其処に現存する制度をば自由の障壁と見做し、彼等が絶望的であつたり意志喪失者の群でない限り破壊的叛逆を試みる。閉ざされた情動の反動は屢々恐るべき強烈さと單純さを持つた原始的生命となつて顯れ、この野性の烈しさは第二の自然としこの習慣が如何に皮相なものであるかを示す。けれども制度自体を敵と見做し、凡ゆる習慣の諸系列を固陋として破壊することは、行爲に於ける積極的自由に到達せしめる唯一の手段を抛棄し否定することを意味しはしないだらうか。叛逆は旧きものへの挑戦、沈滞した習慣への訣別、毒に濁された傳統の切断を意味してゐるが、それが歴史の危機的尖端、時間の窮極を生きるかぎりに於て、自らを正統として定立するには、習慣への傳統への新しき還帰がなくてはならない。破壊的契機を出發の重要なエレメントとして何時でも提出されてゐる緊張の状態が対目的に文化を媒介する場合、叛逆が單にプロテストとしてではなく正統として意識的に定立される現実課題的な歴史の態度がある。叛逆は神の恩寵ではなくして歴史の恩寵であり、その限りに於て人間の存在の限界である機構を持たねばならぬ。行爲構造的に手段を閉却し、自然への復帰といふ美しい仮面に隠れて奇抜な即興的靈感に妖しく狂淫したエクスタジイに陶酔する生活をロマンチックに幻想する叛逆的情動——それはベシミズムの裏がへしにすぎない。情動は飛躍の必然的不可欠の

ての実存 (*existentia*) を出発点としたハイデッガーの方法は注目されるべきである。この出發としての自我——心理学的自我——*ミッシュ* フスキーの自己所属感 *Sentiment d'appropriation du moi* であり或はグルーレの意識の自我性 *Ichqualitat* ——を具体化し、その自我に歴史的社会的に結果し構成されてゐる人間の能力を、個人に内在する能力として持ち込んでゐる素朴な主体性論から我々は訣別すべきであらう。自我はわれわれの意識の一つの現象形態である。

この判断はキリスト教の洗礼を受けて出發した近代個人主義の実体自我の没落であるとしても、新しい存在形式における歴史個性の誕生を意味する。習慣は過去からの命令である。將にその故にこそ我々は客観に生き、客観に結びついてゐるものとして自己を発見し、習慣との交渉過程に個性を関係的に構成してゆく。先天的遺傳的個性はその交渉過程に歴史的個性として彫塑され、積極的自由を獲得し、個人は階級に自我の條件を定位し行爲の肉体を把握することに、意識一般としてではなくして歴史的に媒介された客観性に到達する。更にエンゲルスは「我々是我々の時代の諸條件の下に於てのみ認識することが出来る」と云つてゐるが即ち意識は過去からの條件に操作されることによつてのみ客観性を獲得しうる。例へば解釈学的方法にあつて、外部から感性的に與へられる表現物——諸記号の「了解」はこの意味に於て單元的には我々の時代的な條件が可能とするかぎりにおける了解に他ならず、我々は「了解」において自己の射影をのみみることになり、自己が自己を理解するといふ循環に陥ちいるのであるが、複元的に我々は自己の構造的な人間的存在を、超越的

に過去からの諸條件即ち習慣の産物であると認識することによつてのみこの悪循環から救はれるであらう。同時にこの場合、解釈学の根本概念である内在的な生の概念は超越面へ飛躍せしめられ、更に我々は形而上学的な永遠なる普遍的な本質的人間性のイドラをも死に導きうるであらう。

習慣は個人に高次の客観性を賦與し、それは行為に向かはんとする素質、行為における要請なのである。現存の習慣と無関係に求められる自由はアポカリプスの預言に支へられてゐる情熱であり、積極的に手段を得る努力は墮落して厭世的態度が凡てについて現実に浸潤し、自然的神祕的な予定調和の觀念などへの一層オプティミスティックな宗教と結合する。それ故習慣は生命の原型として構造的であり、發展は習慣を前提としてゐる。我々が習慣からの脱出を習慣に手術されながらも試みることは、ランボオのアフリカ行の実験を再提出することを意味してはゐないだらうか、彼の地理的脱出は同時に、詩——觀念を拒絶するきびしい砂漠的な態度なのであつた。習慣は呪縛の建物と呼ばれてゐるが、フィクションナルものがリアルであるのが歴史的な世界である。主体の開放は論理的な觀念処理によつてなされるのではなく、フィクションを生ずることにより、具体的には階級に見いだされる個人の實踐を通してのみ、新しいフィクションへの開放がなされるのである。けれども現在を統御することによつてのみ未來は可能とされ、完全に処理しうるものは現在の活動のみであり、思想はユートピア論でも、現実が準ぜなくてはならぬ理想でもなく、それは我々の實踐的態度の図式である。その故に思想は行為の實驗的時間における人間の限界性を意味して

ゐる。思想は行為の可能態であり、思想に自己を賭けるところに行爲が成立し、そこには人間構造の虚構性が顯現されてゐる。この虚構性が第二の自然の存在形式であるが、この第二の自然は第一の自然に対して巨視的にはもはや何ものでもありえないのである。

(一九四八・一〇・三〇)

科學論の研究

——自然弁証法との関連において——

芝田進午

- 一、科学—論理—の階級性
- 二、物質の概念
- 三、物理學
- A、相対性理論
- B、量子論
- 四、生物学及び数学
- 五、結語

人々は屢々科学や藝術が、この人間の産物が、全く奇怪な性格をもたされるのを不思議と思わないだらうか。

「唯科学と藝術によつてのみ——こうポアンカレはいふ——文明は價値を有する。……吾人は唯思想のみを思惟し、吾人が事實について語らんが爲に用いる處の言語は凡て思想のみ表はし得るものなるが故に、思想ならざるものは凡て純粹の虚無である。思想以外に何物もありと云うのは全く無意味の主張である。」(「科学の價

値」岩波文庫二三五頁)又、田辺元博士はいふ「實際科学研究に専心するものは其対象たる自然に対して敬虔の心を懷くこと常であるが、此感情は即ち自然を單に自然として観ずるものの懷く所ではなく、其美はしき調和と實在の表現の感ずるものに起るものではあるまいか。自然の世界を實在の表現と解することは自ら科学研究に宗教的態度を含ましめる。」(「科学概論」三三一頁)更に「ポアンカレが「科学のための科学」ということを唱へ、……眞理が目的で生きることが其手段であると説いたのは實に理想主義(一)の精神を明白に道破せるものとして讃歎しなければならぬ。」(三四三頁)といわれるが、洵に不思議ではないだらうか。何故、「科学のための科学」という物神性(モノゴトノカミ)を科学はもつのであらうか。何故、そうしたものが「價値」をもつのであらうか。ポアンカレのいう「思想」とは果して、思想に値いするか。又、合理性と実証性で一貫さるべき科学が、何故、非合理主義の本尊、宗教と握手せねばならないのか。他方、私達「一切を科学的に——と強調するとき、宗教家達は、科学の限界(?)と宗教の效能を強調するより智慧が廻らぬし、

「純粹」哲學者達は、科学と形而上学の峻別を主張することに余念がないし、又「藝術至上主義」者達は、藝術と科学一般は全くの別物だという事より外にない様に見える。而も当の「科学」者達——ここでは自然科学者達——は、自然科学は全く社会から「超越的」だと信じている様にさえ見えるのである。私達が、「科学を——」というとき、夫は一つの実践的なイデオロギーを性格とする。所が、ポアンカレや田辺博士等の手にかかると、科学は「理想主義」——実は観念論——の「愛し子」になつたり、宗教の奴隷にならねばならない。何故だらうか。この秘密をとくものは何か。恰もイデオロギー論である。それを暴露するものは、まさに自然科学の階級性に外ならない。

自然科学は、自然——社会と対立せる意味での——を対象としながら、同時に社会の産物であるという二重の性格をもっている。この二つの契機は、一方が本質的で他方が偶然的だというものではない。両者はたえず、弁証法的に統一されている。即ちイデオロギーで夫はなければならぬ。要するに「科学のための科学」という形式論理の同一律ではいつ迄たつても問題は展開出来ぬ。恰も商品の物神性を解明したものがマルクスの弁証法であつた様に、「自然科学も一つのイデオロギーである」この弁証法論理のみが、自然科学の物神性を解明することが出来るであらう。

では、自然科学の目的は何か。いう迄もなく、自然の自由な研究である。何も自然科学に限らず、あらゆる人間行爲がそうなのである。だが、いや、それだからこそこのわかりきつた「自由な」という事が、然し、全く簡単ですまされないものである。——之を最初に断つておこう。

オロギーであることそれは誰が何といはうと、一つの事実である。処でこの「事実」とは現象学のいはゆる「事実」ではなくして、むしろ抽象され得ない、「本質」であり、且又、原理でもあるであらう。かくて、我々は、この原理によつて種々の哲学を分類することが出来る。

扱、本来、イデオロギーとは、社会の上部構造一般であるが、それと共に個々の観念形態を意味しなくてはならぬ。より詳しくいへば、第一に社会における上部構造としての観念一般を意味し、第二に更に社会における一定の人間群——階級——の意識である。処でこれらの意識は、それ自らの弁証法的な論理を、性格をもっている。今や第三にイデオロギーは意識形態（性格）でなければならぬ。イデオロギーは、か様に、弁証法的な、立体的な性格をもつ。——さて、いわゆる哲学も今や、一つの社会意識であり観念形態であるであらう。そして抑々、観念形態——思想——の対立は、疑いもなく、思想を生んだものの対立でなければならないから、我々は先づ、社会対立——支配・被支配階級の対立——から出発する。支配階級はそれ自ら保守的であり、被支配階級は、やがて進歩的、変革的である——自明の事である。処で、前者は主として観照的であるに對し、後者は主として実践的である。前者が靜的であれば、後者は動的である。若し哲学が存在者の理論であるとするならば、支配階級の哲学は、必ず観照せられたもの——「形相・形式・意味・概念」——を存在の原理として、他方質料的・内容的存在は捨象され、偶然的なものとなされるであらう（必然的に二元論え）。しかも夫は必然的に、形式論理を構成する。（今や存在者は宙に浮いた「存在性」に

処でイデオロギーとしての自然科学は、結論からいへば實際階級性——純粹哲學者や自然科学者達の最も嫌惡する処の——をもっている。階級性とは何か。——科学者の進歩性、或は、自然科学の実践。実験の問題、特に社会科学の関連としての技術の問題、科学史の問題等々色々あるであらう。實際こうした点は、形式論理は知らず少くも弁証法的な思想にとつては、当然の事である。——だが之では尙充分條件ではないであらう。何となれば最も抽象的な論理乃至数学は階級性をもつかと人は反駁するであらう。然る時はどうか。だが実は階級性とは、單に上述の事だけでしかないのではない。外でもない。「論理」自身が階級性をもつのである。階級性の核心をなすもの、夫は論理の階級性である。我々は、後に自然科学の階級性を見るために、今一應論理乃至論理の階級性を——哲学を媒介として——検討することにしよう。

「哲学とは何か」この最も定義し難い概念は、何と答えるべきか。「愛知としての哲学」「哲学としての哲学」「概念による理性認識としての夫れ」「基礎づける哲学」「懺悔としての夫れ」等々。凡らくこうした意義は無数に——学者の数だけ——あげられるかに見える。そこで又、「哲学も又一つのイデオロギーである」という主張も、同じ権利で主張されるであらう。

処で、イデオロギーという概念が既に一つの哲学的立場に由來する。かくて「純粹」哲學者はいうであらう。「夫れを容認するか否かは、各々の立場の相違である」と。だが、恰もそれが、吾々の望む処である。「立場の相違」ということが、今更いう迄もなくイデオロギーの性格であつたのであるから。だがそれよりも「哲学はイデ

ならざるを得ない。——アリストテレスが夫れを完成した。之に反して、変革的哲学は、直接変革するべきもの——内容・質料——を存在者の原理とする。而も人は、今や、形相・形式が單に無視されたのではなくて、眞に止揚せられた——存在性は存在者を媒介として——ことを注意すべきである。質料 *huli*, *Materia*——夫は今や單なる素材 *Stoff* ではない——それ自ら運動という本質をもつ物質 *Materia* であり、必然的に弁証法的論理をもたねばならない——ヘーゲル概念、弁証法は、裏面から見ると全く「形式的」であるから、華々しく崩壊して、フオイエルバハ、マルクスに止揚されねばならなかつた、所以である。扱、ここに注意すべきは、哲学の最の核心たるべき論理——二つに對立する——が、正に階級性をもつことである。階級性とは決して附加的偶然的なものではない。それは範疇体系の核心そのものでさえあつたのである。これがイデオロギーの第四の性格である。

そこで私達は第五の規定にくる。論理性そのもの——眞理性——が階級性をもつのであるから、イデオロギーは、對立する思想は、実は眞理意識か或は虚偽意識（イデオロギー）である。一方は眞理で他方は偽である。——ここで客觀的公正を賣り物にする「折衷主義」哲學者がいかに「形式論理」的であらざるを得ないかは説明を要しない。——人は今や階級性をもつことにより、却つて虚偽であり、眞理でもあり得る（前者の場合は、大抵無意識に！）。しかも眞理を驗證するものは、外ならぬ事実であり、歴史であり、歴史的行動としての実践である。であるから、どんな哲学が眞理性をもちうるか、もち得ないか。これはもはや、私の附言する必要のない処であ

らう。(註二)

扱、私は、イデオロギーという概念を多少平凡に通過することにより、観念論と唯物論(前者は形式論理——形而上学——に、後者は弁証法に帰着する)の階級的対立を導いてみた。人々は屢々聞いたであらう——唯心論と唯物論、観念論と實在論という風に。勿論それもよからう。然し「概念」というものは歴史と関連するのであり、又我々の分類と雖も決して乱暴ではない。否かくしてこそ始めて、歴史の下に、哲学のアナキキーが整理されるのである。

註

(一) 物神性(魔術性) Eschatolatrie の概念については、マルクスはこういつている。「商品なる形態の下に、物と物との関係の幻想的形態を採つて人類の目に映ずるものは、人類自身の一定の社会的関係に外ならぬ。そこで之に類似した現象を見出すためには、宗教の夢幻境に助けを求めねばならなくなる。

この境地においては、人類の頭脳の諸産物は、相互に關係し、且つ人類とも關係しているところの、それ自身の生命を賦與された独立した存在物である様に見える。……私はこれを……魔術性(物神性)と名づける。」「資本論」改訂版第一卷四三頁(二) 実践と眞理と弁証法の關係については、ヘーゲル「小論理學」二一三—二一五節、「大論理學」岩波版下卷一七五、二三三—三四〇、三八頁等を参照。

そして、ここに、ヘーゲルがいかに「唯物論」的であらざるを得ないかを我々は見る事が出来る。

尙、形式論理乃至形式論理學の階級性、乃至虚偽性は、くわし

存在とは一である。存在即自然即物質、之がギリシヤ自然哲學の性格といえるであらう。ところでデモクリトスになると「充実と空虚とを以て元素であるとし、一方を存在者他方を非存在者と呼んでくる。(アリストテレス「形而上学」983b) 存在・物質は、無に對立し、空間・場処が無と考へられる。今や物質は、「形」をもつてくる。アリストテレスの言葉をかりれば「彼は不可分(原子)なるものたる大いさを以て実体としたのであり」(1030c)「基体をなす物体たる質料は一つの同じものであるが、しかもそれはその構造即ち形状において、或はその方向即ち位置において、或はその關係即ち秩序において異なるものである。」(1030c)かくて、存在の存在たる所以は、物質にあるのでなく形相であり、物質は無秩序のものとならねばならない。ここに物質は質料という余り有難くない名前を貰うのである。

次に來るのがプラトンであるが、之を省略して、アリストテレスに移る。プラトンが観念論者であるならば、アリストテレスは實在論者であり、経験を重んじ科学的であることを性格としたのであるから、そして誰か云う様に古代におけるヘーゲルであり即ち弁証法的であるのであるが、今、我々にとつて大切なのは、実は、まさにアリストテレスの古代的、思弁的限界であり、アリストテレスのプラトンの、観念論的限界に外ならない。さてデモクリトスは原子論的機械的であつたが、アリストテレスは運動的である。「可能的にあるものとしてある限りにおける可能的にあるもの(質料)の現実態を私は運動とよぶ。」(1005g)で質料とは單に可能性という範疇でしかない。では、それを現実的なものたらしめるものはなにか

く述べる余裕がないが、逆に、反動政治がいかに形式論理學によつて大衆をぎまんしているかを見るならば、それを察することが出来る。例えば「國民統合の象徴」という代物文化國家」や「超黨派的政治」や「労資協同」や或は「文部次官通牒」などもすべてそうである。

而して「社會學」や「法律學」がブルジョア科學といふのと同じ意味で、「形式論理學」は、ヘーゲルの所謂「學校論理學」にすぎずブルジョア科學である。

(三) もし、観念論と唯物論という対立の仕方が乱暴だというなら、人は、カントやヘーゲルさえも乱暴だといわねばならないであらう。併し、此の事は要するに、形而上学と認識論との領域そのものが、形式論理では片づかなくなつたことを証明するにすぎず、概念というものが、いかに歴史と共に發展するかの一例にすぎない。

二

扱、論理學が階級性をもつのであるから、自然科学も必然的に二つに對立する。——これは後に詳しく見る事にして、私は更に「物質」——自然科学と多少關聯しつつ——の概念を検討しようと思う。少くとも唯物論にとつては物質という概念は、その哲學的、根本問題である。存在とは外ならぬ物質であり、物質は同時に存在である。これは、古代ギリシヤ自然哲學より一貫した主張であつた。即ち、根本物質は水であるとか(タレリス)空氣であるとか、(アナキシメネス)火であるとか(ヘラクレイトス)云はれる様に、物質と

——形相である。か様に彼は、事物を、形相と素材とに、機械的、思弁的に分離せしめるのである。即ち、「原理や原因は、それ等がその原理をなす事物の他に存在し、それ等のものから独立して存在し得なければならぬ」(990a)というのである。——いはゆる「意味の世界」がつくりあげられる——

処で形而上學者アリストテレスによると「質料なき実体を本質と呼ぶ」(1023b)のであり従つて今や形相が本質であり、質料は形相をみたすものであり、偶然的なものではない。質料——それは本來物質という概念であつた——は偶然的であり、無規定である。ということは、質料は——いかに相對的であると彼がいかにせよ——無になる、いはば消滅するのである。「純粹哲學者達は屢々いうであらう。唯物論は独断である、何となれば物質の法則・形相・意味そのものは物質でないではないか——こう彼等は「批判」するのである。或程、法則・形相そのものは「物質」そのものでないかもしれない。では法則・形相以外のものは何であるか。分子の形相そのものは物質でない、電子の形相そのものは物質でない。——後に残るのは何か、無というより外にしようがないではないか。——かくて質料は無に帰せしめられねばなるまい。恰も、「特定の存在のみが存在だ、……だから君が存在から特定性を取り除くなら、君は何等の存在をも残しておかなくなるのだ……人間の人間たる所以のものを人間から取り除くなら、君は彼が人間でないことを何等困難なしに証明して見せることができる。」(フオイエルバハ「ヘーゲル哲學批判」文庫版三四頁)今やアリストテレスの存在論——実は「存在の意味」論——の思弁を通過することにより、質料は無に

なり、「意味の世界」という想像物が出来ることが、知られるであらう。「形而上学」的悟性的思弁によつて、実は「存在」は「存在」でない。あらぬ方へやつてしまはねばならないのである。「悟性的形而上学」の批判についてはヘーゲル「小論理学」二六―三六八〇節「大論理学」上巻六頁等を参照。それはそうとしてアリストテレスにおいては、不完全なもの——質料——が完全なもののえ向つて運動する場合には、必ず完全なものが、この運動に先だつており「より先」であり、質料の運動因は形相に外ならない。処で「形相や様態やまた場所は不動であり」(不动)——形式論理は目的論え——目的論は漸て、必然的に「運動も消滅も生成も全然属することのない他の或る実体(神!)のあることを認めねば」ならず(不动)、「神は現実態であり……永遠にして最善なる生命あるものであり、恒常的にして永遠なる生命や永世が神に属するのである」(不动)といはざるを得ないのである。洵に、アリストテレスの形而上学は一名、「神学」といはれる所以であつた。

人々は屢々まことしやかに聞いたであらう。唯物論と観念論は共に一方向的であり、——従つて機械論と目的論も「見方の相違」であり、その解決は「永遠の課題」であると。こういつて哲学者達は、自らの哲学——形而上学——に物神性を賦與せしめるのである。事物と事物の意味とはどちらが「より先」か、例えば人間と人間の意味とはどちらか「より先」か。——「永遠の課題である」「アポリアである」と。——当り前の事である！間違つた問題はいつ迄たつても答得られないこと、夫は当然のことではなからうか。

では、これを解決するものは何か。恰も弁証法である。「存在は

版三七四頁、尙一八七頁^(五)といつてゐる。ここで再び物質は存在(自然)の概念と同一であるのを我々は見るのである。

さて、内容・質料は自己運動的存在であつたから——前に見た——今では、質料・材料 Stoff という概念は適當とはいへぬ。即ち夫は、それ自ら運動という法則をもつのであり、従つて「質料と形式」という貧弱な形而上学的概念は、より豊富で具体的で運動的な「物質」という概念に止揚され、進歩しなければならぬであらう。

——ところで運動とは何か。運動とは、AがBになり、或はBになることである。ヘラクレイトスの表現によれば「有は無と同様になる」「万有は流轉す」であり、「戦い——矛盾——は万物の父である」。有は無によつて有であり、無は有でないからこそ無である——いな、無でさえない。いはば運動は「有と無」とにある。存在と非存在との綜合統一——これが運動である。即ち「天上天下を問はず有と無の両者を包含しないものは存在しない」のである。(ヘーゲル同上二〇七頁、「小論理学」八七―八八節参照)

運動といへば、直ちに來るものは空間・時間であらう。哲学的な概念としてはさしあたりカントである。処でカントの仕事はニュートン物理学の基礎づけに外ならなかつた。「絶対的なそして数学的な眞の時、外界とは何の関係もなく一様に流れてゆくものである、時間とよばれる。」(ニュートン)而してアインシュタインはいふ「物理学がニュートンの開拓した路を進んできた間に、物理的實在に関する次の概念はしつかり保存されていた。即ち物体は實在であり、……運動、空間及び時間は實在の形式であるということ……ニュートンはこのため空間を「絶対的」とであると名づけた。」(石原訳「相

存在する物、と一つのものであり」(フオイエルバハ同上三五頁)「天上・自然・精神・或は他の如何なる場所においても、この直接性と媒介を共に包含しない所のものは一つとして存在せぬ事、従つてこの二規定は非分離的、且分離不可能なもので、両者の対立はそれ自身空無であるという事」(ヘーゲル「大論理学」上巻、七七頁)であり、形相ではなくして質料が、内容がそれ自らが運動するという原理をもつことである。「何故と云ふにこの内容を押しかすところのものは内容それ自身即ち内容がそれ自身の中に所有するところの弁証法であるからである。」(同上五四頁)

夫は後の事として、アリストテレスにとつては「観想は最高の悦樂にして且つ最高の善である」(不动)のであつた。而して近藤洋逸氏の「変換・変形・方法の運動の欠如、これがギリシャ幾何学を單なる靜的觀照にふさはしき体系におしめてしまつたのである。」

「幾何学思想史」一六頁)という批判は、まさしくアリストテレスを代表とするギリシャ哲学にも当てはめる事が出来るであらう。時代は各々、それ自らの思想をもつ。今や新興ブルジョアジーのフランス・ペーコンにとつては、自然は「征服」され「拷問」にかけられ「搾取」されねばならぬ。当然の事ながら観想的なアリストテレスの目的論はイデオラとして否定されねばならず、ガリレイも又彼に(物理学の領域で)批判を向けたのであつた。(邦訳「新科学対話」及びフオルレンデル「哲学史」二卷七一頁)スピノザも目的論を批判して「神或は自然が何故に營爲するか、又それは何故に存在するかと云う理由或は原因は同一である。それ故に、それは目的の爲に存在せぬ如く、又目的の爲に營爲しない。」(「哲学大系」小尾訳旧

対性理論」春秋社版、思想全集一三五頁)こうした自然科学・ユークリッド幾何学の制約下であるから、カントにとつては空間時間は現象形式であるが、物自体のものではない。直観の材料たる感覚が、時間空間という先天的純粹直観の形式により整理されて直観内容となるのである。即ち現象が物自体ときりはなされる以上、やむをえぬ事であるが、要するに空間時間は主観のものになるのである。——(純粹理性批判「先驗的感性論」「プロレゴメナ」参照)——

成程、カントにとつては物自体は、無規定のものであり、それ故、空間時間と縁がないかもしれぬ。だが物自体——物質——は我々のものに漸てなるのであり「本質は現象せねばならない」(「小論理学」一一二節補、一一三節)という処迄行かぬことが正に、この悟性的形而上学者の限界であつたのである。処で、カント空間の主観主義を批判すべくあらはれたのが、外ならぬ——観念論者達が恩恵の神秘性、精神の創造について誇る——非ユークリッド幾何学者達であつた。しかも、田辺博士等が、尙、非ユークリッド幾何学の「先驗性」を固執する(「科学概論」一九二頁及び「数理哲学研究」の終章)にも拘らず何故、それらの幾何学者がそろひもそろつて経験を重んじ、且つ、唯物論的であつたのであらうか。

ガウスはいふ。「私の眞に心からの確信によれば、空間の理論は、我々の先天的な知識に対しては、純粹な量論とはまつたく異つた地位をもつてゐます。……空間は我々の精神の外に實在性をもち、これに我々がアプリアリにその法則を與えることはできぬということ、我々はいやでも是認せねばなりません。」ここに人はガウスが空間の本質を自然そのものの中に求めたこと、そしてそこにこそそ

れのユークリッド幾何学的形式論理に対する優越のあるのを見るであらう。「自然において我々は本來は運動しか知らない。この運動なしには感覚印象は不可能であり」(ロバチエフスキー)「この運動法則(惰性法則)は充足理由律からは説明できぬ。物体がその運動をつづけるということは、物質の内的状態のうちにのみ求められ原因をもたねばならない。」(リーマン)「何れも近藤前掲書より再引」このリーマン幾何学は後に相対性理論によつてそれが物質の対応であることが証明されるのであるが、そして後者は、空間そのものがエーテル質をもち、物質即空間であることを示すのであるが——しかし、人は、いかにもしれぬ。空間の科学的概念と哲学的概念とは異なるのであると。——こうした形式主義の反駁の如き、大したことではないが、然し、人は、弁証法論者ヘーゲルがすでに、これを把握しているのを見ることが出来る。即ち、徹底して具体性をモットーとした彼にとつては「絶対的、空間、絶対的時間」というような言葉は、抽象的な空間、抽象的な時間を意味するにすぎない……」(「小論理学」一一五節)のであり、「……空間は斯る絶対的自己、外有であつて、それは同じく全く非断絶的に自己同一的な他在となり、……時間は絶対的の自己脱出、一者、即ち時間点或は現在の産出であるが、この産出は直ちに自己の否定となり、同時に又この消滅の間断なき否定となる。」(大論理学上、三〇九頁。尚、この辺りにおけるカント批判を参照)——而して「時間の中で万物が発生し消滅するのではない。時間自身がこの生成、発生と消滅、存在する抽象、万物を生み、生めるものを自ら食うクロノスである。——実在は時間から区別される、しかし本質的には時間と同一なのだ」と

真理ではない。このやうに主観性と客観性という二つの規定を無難作にうけ入れてその起源を問はないのは無思想な仕方である。「(小論理学)一九二節補」而して、「精神は自然に媒介されている限りにおいてのみ精神であるからである」(一八七補二三九補)と。——しかもこれ等は既に科学的な生命論により証明されている事ではなかつたか。——後を参照。

以上で、私は大体、出来るだけ簡単に物質のいはば哲学的概念を規定づけた。わからぬ点も少くないし「層詳しい研究は別の機会を俟たれ」敢えて形而上学に陥らぬために繰返すならば、(1)形式は本質から分離され真なるものとして前提されるようなものとして、本質を規定するのではなく……質料は形式の本来的な基礎或は基体であり「(大論理学)中巻一三六—八頁」(2)「本質は必然的に現象する」(同二〇一頁)而して「法則は現象の彼方にあるのではなく、寧ろ現象の中に直接現在し」「法則は本質的な現象であること」(二五二三頁)(3)凡てのものは其自身において矛盾的事であり、「矛盾は凡ゆる運動及び生命性の根である」(一四頁)のであること、——

(4)そして「客観的論理学」(弁証法といつてもよいだらう——芝田)は世界の学的建設としての先の形而上学に代るものであり「(上巻七一頁)……「愛知なる名称を棄て去るを得て、現実的な知となるという目標に哲学がより近づか」(「精神現象学」七頁)ねばならぬという事、——以上のヘーゲルの言葉を人は記憶すべきである。最後に一つ、観念論者達はいうのである。物質が弁証法的であるのは認めるが——唯物弁証法——、他方概念、意味も又弁証法的ではないか——観念弁証法。或は田辺博士の如きは何れも一面的

彼はいつている。(七)そしてヘーゲルの空間時間論は勿論限界をもつてであり、漸くフォイエルバハにより唯物論的に批判されねばならなかつたのである。我々は先を急がなければならぬ。要するに、物質そのものが運動であり、空間・時間そのものであること、之が、私達の到着点であつた。

我、空間・時間は客観的存在である。従つて今や物質も又、客観的存在という規定にくるのである。では一体どうしてそれは認識されるのであるか。物質といふ概念はそも／＼唯物論のものであり、模写論といふ概念も観念論者の「哲学模写論」等の手にかかることあらぬ方へ持つて行かれるのであるが、恰も模写論はカントが最初に目をつけたところではなかつたか。「我々が或る対象から、無発せられ、限り、対象の表象能力の及ぼす結果は感覚である。感覚によつて対象と関係するところの直観は経験的であるという」(「純粹理性批判」岩波文庫上、八七頁)即ち、或る対象——物自体・物質——は感覚を触発する。物質は、我々の感覚に対して存在する。——之は大切な規定であるが、併し、カントにとつては感性とかの悟性乃至理性がきりはなされて考えられて、構成主義がおし出された結果、上述の物質と感覚の関係も、省略されて了はねばならなかつた。しかし物質は認識されない不可知論的概念ではなくして、それは感覚に對してある客観的存在以外ではない。処で人はいうであらう。唯物論によると、主観的精神も又物質の最高の産物ではなかつたか。物質の概念にズレがないのであるかと。——だが物質はまさに「形式論理」では片づかないのであつた。だからそうした反問には次のヘーゲルの言葉を引用すれば足りるであらう。「こうした二元論は

で、「絶対弁証法」でなければならぬというのである(「哲学通論」)。

成程、ヘーゲルは哲学史上最大の哲学者であり、而も科学的な哲学者であり、それ故に弁証法的哲学者でも又あつた。だが、果して徹底的に弁証法的であつたらうか。即ち彼はロマンティクの哲学者であり、反動的でもあつたのであつて、だからこそ哲学的にも実は徹底的には弁証法的ではなかつたのではないか。例えば「精神現象学」と「論理学」がきりはなされている点、「有論」の最初にはまづ「純粹」な——この形式的な——概念がくる点、更に引用すれば「絶対的理念のうちでは移行もなければ前提もなく……絶対的理念は対自的に、その内容を自己そのものとして直観する、概念の純粹な形式である」(二三七節)等々、而も、多くの点にいかん「体系」のための「こじつけ」があるかは人々のよく批判する処である——私はくわしく述べる力はないが、人はフォイエルバハの前掲書及び「將來哲学の根本命題」、マルクス、エンゲルスの「神聖家族」その他「諸批判」を参照すべきである。——尚、田辺博士の「絶対弁証法」はヘーゲル及びマルクスの「形式的」理解に基づく形式的弁証法(?)であるから今更問題にならぬと思う。

要するに我々は次の様にいう事が出来る。唯物論は徹底的に唯物論になれば弁証法的たらざるを得ないのであり、弁証法は徹底的に弁証法的であれば漸く唯物論にならざるを得ないこと、従つて弁証法と唯物論は別々のものではなくて一つの世界観の表と裏であること——この事が特に私の目指した処であつた。——更に私は、唯物弁証法が自然科学において如何に真理であるかを検討しようと思ふ。

(一)「形而上学が存在としての存在或は存在一般の学といわれるとき、それは存在の種々の意味についての学と考えられたのである。」(三木清「アリストテレス形而上学」六〇頁)だから、形而上学は、実は「存在の意味」論乃至「概念を媒介としての存在」論であつて、「存在」論ではない。尚「アリストテレスはカントに劣らず概念論者である」事、「アリストテレスの偏見の根拠は、目的論的であると同時に論理学的(形式論理的)であり」「資料に関しては何もすることが出来ず……無意義である」事については、夫々ハイデッガー「存在と時間」四三節(a)、ハルトマン「批判的存在論一般は如何に可能なるか」二ノ四を参照。

(二) 目的論が「カントは種類が異なる——必然的に「神」を目ざさざるを得ないのは、当然であらう。ライプニッツ・シェリング・ヘーゲル・ブートル等。(但し、ヘーゲルの目的論はむしろ「技術論」といわれるべきものである。)而して「神」学は宗教的神と一應区別を要するが、然し、「神はあらゆる疑いをとく無智である。」(フオイエルバハ「キリスト教の本質」中桐沢三一四頁)というのは眞理である。

(三) 同じく、「ソクラテスの弁明」(十五)を参照

(四)「具体的内容に一般的形式を当嵌めることは不要であつて、具体的内容が自発的に一般的形式に移行する。斯くて一般的形式は最早外的な一般的形式ではない。何となれば形式は具体的内容そのものに内在せる生成だからである。」(ヘーゲル

「精神現象学」岩波版八〇頁)尚、目的論の批判については、ヘーゲル「大論理学」下巻二〇九頁。

(五) スピノザは汎神論者であつた。然し、「汎神論は神学の神の立場における否定である。」即ち実は、顛倒された無神論である。(フオイエルバハ「哲学改革の提言」)

(六) 他方、ハイデッガーの「存在と無は、「存在自身」における矛盾ではなくして、「人間」「不安」との連関においての「矛盾」にすぎない。即ち、「不安の対象の中でそれは無であり、無場所である」と。(「存在と時間」四十節)だから、ヘーゲルよりの退歩であり、「存在」論でなくて全く氣儘な主観的観念論といわなければならない。

(七) シェリング及びヘーゲルの「自然哲学」は直接参照する機会をもたなかつた。(尤もハイデッガーが前掲書の終りで後者に多少の解釈をしている。)だが、「自然哲学」はやがて「自然弁証法」にならねばならない。

「運動の本質は、空間及び時間の直接的統一たる点にある。……運動から空間と時間とを離すことはできない。運動即運動の大きさ、は空間の経過した一定の時間に対する比である。空間および時間は物質をもつて充ちられている……物質なき運動が存在しないと同一く、運動なき物質もまた存在しない。」とヘーゲルはいつてゐる。(エンゲルス「自然弁証法」より再引)尚、之を後の「相対性理論」と対照されたい。

(八) 小断片で残念であるが、マルクス「ヘーゲル弁証法及び哲学一般の批判」、「ヘーゲル法律哲学批判」「資本論」二版跋文等

々。

三

「科学論」という言葉で、現代において大きな地位を占めるのは、何を指しても、H. リッケルトであらう。だが、今更いふ迄もなくこの新カント哲学者にとつては、師ヴィンデルバント以來の「價值論」が問題である。自然は精神に對立する。而して精神は——文化 Kultur は自然——この没價值なもの——に對し、当然「價值」をもつ。だから「文化科学」は救はねばならず、自然科学は「没價值」であり、まさに「限界」をもたされなければならない。之がこのドイツ精神的哲学者の「基礎づけ」であつた。然し、今我々にとつて必要なのは自然科学であつて「文化科学」なのではない。そこで人は同じく新カント学派のマルブルグ学派をあげるであらう。処でカントを経て、コーヘン・ナトルプ・カッシャー等においては、いはば科学は数学を含む限りにおいて精密であると考えられる。即ち、自然科学において法則は何のために求められるのか。普通の關係を求めることがまさに法則の学問的意義に外ならぬ。法則は機能性をもつ。而して物理学の法則は多く代数的乃至微分方程式の形をとるのであるから法則の機能性は方程式の函数性を示すのであり、自然科学は数式化せられることにより、「一層精密」ということになる。かくて自然・対象・物質の具体的概念は漸て消滅し、これらカント主義者にとつては函数概念が大きな地位をうるのである。——だが私はマルブルグ学派については多くを知らぬ。たゞ人は次のポアンカレの言葉と對照すべきである。即ち「……凡て客観的なもの

は全く性質を欠くものであつて、純粹なる關係である。……然るに此説は……或人をして世界は唯微分方程式に止まると云うに至らしめたものであると解釈せられて……感覚の關係のみが客観的價值を有するということは之を承認しなければならぬ。」(「科学の價值」二二四—二五頁)更に「数学は物質的對象の存在には無關係である。」(「科学と方法」一四二頁)——之が要するに、カント主義の洗礼をうけたポアンカレの科学論であり、更に進んで、独自の感覺以外には何の實在も存せずして、世界の本來の唯一の要素は「感覺」である、と信ずるマッハ主義と如何に一致するものであるかは、駁言を要しないであらう。

他方、唯物論的であつた——徹底してではないが——物理学者、M. プランクにとつては、斯様な「物理学的観念論」者は批判されねばならぬ。「恒常的な單一の世界形象は、私が示そうとした通りに、現実の自然科学がそのあらゆる変遷のなかに絶えず近づくとこの目標であつて……この恒常的な、各の人間の・知的・個性と独立なものを、まさに我々が實在と名づけるところのものなのである。」(石原訳「物理学的展望」春秋社版「思想全集」二七—二八頁)こゝに於て彼はマッハ主義を適切に批判するのである。プランクは決して弁証法的ではない。然し、我々はこの、物理学自身が二つの世界観に對立するのを見るのである。物理学的観念論と物理学的唯物論。——では一体、どちらが眞理をもつのであるか。

現代物理学において、何といつても大きな地位を占めるのは、相対性理論と、量子論の問題であらう。

先づ相対性理論について。

出来るだけ簡単に述べてゆくならば、物理学にとつて根本概念であるものは、空間・時間である。之はニュートンにとつては、兩者切りはなされた「絶対」性をもつものであり、カントにおいては先天的な、一は外官の一は内官の直観形式に外ならなかつた。処が今や相対性理論によつて、夫れは徹底的に變革されねばならない。第一に之によれば、物理学者は如何なる世界観測の位置に立とうが、夫は同價のものとして結果しなければならぬ。(物理学的場所——空間——の相対性。第二に空間はそれ自身において相対性であるばかりでなく、時間との關係に於ても相対性である。空間は時間と独立でなく、空間の變換は時間の變換を前提する。即ち時間は各空間系を媒介として相対的である。(時間の相対性)

而して「場所時」Ortszeit——「此処の今」とは、「基礎づけ」の好きな観念論者の主張する如く観想的・観念的な想定(自由(?)に由るものではなくして、寧ろ実践的な、行爲的な観測の規定であり、即ち観測者の立つ空間系そのものに成り立つ。「今」が他の「今」を含み、而して一の「今」から他の「今」に移るためには、相異なる「此処」を媒介にするのであり、時間要素と空間要素が相互に媒介し、交互限定をするのである。時間・空間の自己否定的發展——動的統一——之が恰も空間時間の弁証法的構造に外ならない。

「本質においてはすべてが相対的である。」(小論物理学「二」一節補) 處で、空間時間の弁証法性はまさに運動性のことであり、物質と空間(時間)の關係として、展開されざるを得ない。「一般相対性理論によれば空間は物理的性質を賦與せられていたので、つまりこの

学の諸問題」(山本泰教訳)参照。之に対するまとまつた批判は戸坂潤「科学方法論」

二、我國の理論学者には、さしあたり、寺田寅彦と石原純があげられると思う。だが前者は、いはば「隨筆物理学」であり、中谷宇吉郎氏の後書にも拘らず「物理学序説」は全く安易な無駄な書物の一つであり、博士に対しては、夙に、唯物論から批判される處である。——原光雄「自然弁証法の研究」の中の批判を参照。

一方、石原博士も、劣らずマツハ主義者で「自然科学の立場から見るならば、唯物論も唯心論も共に先驗的独断論である」(「物理学概論」岩波講座物理学一〇頁)という奇怪な言葉を弄される處から見ても、全く驚かざるを得ない。要するに、日本の理論物理学にも全く俗流観念論乃至安易な実証主義が支配した事を我々に見るのである。

三、アインシュタインも、相対性理論は「弁証法的」だという事を認めたのである。(菅井準「哲学と自然科学の交渉」岩波講座哲学)尤も彼自身、ひどく観念的で、ショーペンハウエルやヒュームなどと無縁でないのだが。

四、「集合体の計量によつて、その曲率が計算しえられる。ミンコフスキーの世界の曲率は零である。その近傍の曲率を與えるのは、物質の存在であらう。」G ジュヴェエ(矢野健太郎訳)「新物理学の構造」

五、コールマン「ブルジョア自然科学の衰退」(唯物論研究一五号)

意味で一つのエーテルが存在するのです。一般相対性理論によつてエーテルなしに空間を考えることは出来ません。」(アインシュタイン前掲書一四頁)今やエーテル——物質——が空間そのものであり、物質と空間が弁証法的に統一せられてゐるのを人は知るであらう。相対性理論は物理学の世界を幾何学化する。世界は空間——彼らによればアブゾリナ——化され、物質は消滅する。唯物論は滅びねばならない。こういふ「基礎づけ」を好む「哲学者」がいかに愚であるかは今更、くり返す必要がないであらう。逆に「物理学的対象の空間化は空間の物質化でなければならぬ」のであり……「物理的空間は……虚空空間ではない、それは充たされた実空間(Voller Raum)である」(戸坂潤「空間論」岩波講座哲学)のであつた。

相対性理論は今や自然弁証法のものである。唯物弁証法のものである。かくて我々は、ポアンカレの如き観念論者や俗流科学者が、相対性原理が数学的物理学の「危機」(?)だといつたり(「科学の價値」参照)、或は物理学者……の様に「物理学の数学化」は「神の賜物」にして、光は「霊の光」だといつたり、又「時間と空間に関する漠然たる(?)議論によつて彼はキリスト教的信仰と生活のキリスト教的基礎を破壊(一)せんと欲する」といつてアインシュタインを非難する大僧正がおるのも理由のないことではなかつたことを知るのである。観念論乃至宗教、夫れらは科学の敵であり、科学は外ならぬ唯物弁証法のものである事——之を人は認めざるを得ないであらう。

(註)

一、リツケルト「文化科学と自然科学」(文庫版)、及び「歴史哲

四

相対性理論については簡単に以上見た。

次に量子力学の問題。

今更断る迄もなく、物理学の元來の関心は物質の本質の究明という点に集中されてゐたといつてもよいであらう。究極的物質は何か——原子である。原子構造のモデル、夫が漸くボルンによつて小宇宙的太阳系として示された事は、多くの人の記憶する處である。世界は原子——不可分なもの——の集合である。そして之に対して丁度プランクのエネルギー量子の理論が相應する筈であつた。後者によれば、輻射エネルギーは常に一定のエネルギー量子の整数倍としてのみ輻射現象にあづかることが出来る——即ち、エネルギーは連続的量ではなくて或單位量の整数倍の量だといふのである。(石原「物理学概論」八九頁)。処が一方、相対性理論は電磁氣力、更に万有引力に関する「場の理論」であり、物質は、「場」の問題として考えられねばならぬ。而も「場」とは空間性であり従つて連続性に外ならない——世界は今や連続的である。

ここに連続、不連続の問題が大きく浮び出てくる次第となる。だがその対立は実はニュートン以來の対立に外ならなかつた。即ちニュートンの光の粒子説とホイゲンズの波動説であり、そして後者が後のヤング・フレネル・マクスウェル等の研究により、定説になつてゐた事、周知の如くである。処がアインシュタインにより一九〇五年、光子量子説——夫れによれば光も又量子的エネルギーである——が主張せられるに及び、この対立は統一されねばならぬ。即ち、「不連

「連続な波動」という概念により光は把握されざるを得ない事になったのである。

しからば、物質もその様に捉えられねばならない。シュレーディンガーによれば「一つの物体の運動を追跡する従来の力学は一本の光線の通路を論ずる幾何光学と同様であつて、後者が光の波長と比較せらるべき小さな範囲においては波動理論によつて置き換えられねばならなかつた様に、電子の如きものの運動においては、やはり同様の変更が必要なのである。」(石原同上九三頁)而して、プローイーの波動力学によれば、物質エネルギーは、波動現象におけるエネルギーと等価であり、物質波というのは物質粒子の状態を記述すべき位相波である——つづめていえば物質と波動現象とが等置せられるのであり——かくて物質は、実体性をもたぬ「確率」そのものという抽象的な存在と考えられる如くである。(以下「岩波理化学辞典」による処が多い。)

だが更に進んで、出て来るのが、有名なハイゼンベルクによる「不確定性原理」であつた。即ち量子力学において質点(電子)の位置と運動量を正確に測定すべく、光を照射するならば、光自身、電子に運動量を及ぼすので、夫は電子自身のもつていた運動量を変えて了う。即ち、或対象に対する如何なる可能な観測手段と雖も、之を行ふ事により対象の純粹な客観的狀態は攪乱せしめられざるを得ない。今や、精密に測らんため、與えた光により同時に電子はコンプトン効果により軌道から外されるから、之の観測は不可能である。故に、古典力学的量によつてでなくて、確率——波動函数による——によつてのみ物質が記述せられることになるのである。——

物質の存在はかくて、因果律によるのではない、それは偶然性によられねばならぬ、確率が因果律を占め、物質波は單なる確率波にすぎなくなる——物質は消滅した(一)——観念論者にとつて今や洋々たる前途が拓けられる次第である。

まづ何をおいても、わが田辺博士にとつては、照射された光は、「主観」以外ではない。「観察の攪乱性を以て我々の自然記述の空時的因果的な要求をして其限界を自覚せしめるものとみなし、此制限に氣づかず主観性の参加を無視した古典物理学の概念構成をして、新に主観性を自覚せしめ、普遍、我々の認識に前提せられる所の主観、客観の分界性が完全に維持せられるものでなく、量子現象に於て両者が交錯することを避けることが、出来ない所以を氣づかしめる。」つまり「電子の位置を観察するために照射する光は、巨視的觀察において客観に属するものでありながら、この微視的觀察においては主観に属するものとなる……」(「哲学と科学と科学との間」二四二頁)引用、すれば限りが無いが、「所謂対象意識即自己意識、自己意識即対象意識というものが、正に認識の本質的構造でなければならぬ。此關係が量子論において物理学の認識に對し明白にせられた。これが量子論のもつ哲学的意味である。」(一二二頁)と大変な「哲学者」振りである。(同じく「哲学通論」全書版二〇二頁)他方、それ自ら「哲学者」氣どりの物理学者——手近かな処で菊池正士博士の如き——にとつては、新量子論は「我々が普通常識的に考える我々の経験と独立に存在する外界——自然——という概念を根本的に否定することになるのであり、素朴實在論——唯物論のことか?——の一番の支持者とも思はれていた(「物質の構造」二〇

頁)「自然法則というものは、與えられた実験操作において装置に附随する計器類のよみの間の關係を記述して行くものであると考えてよいのである。現象を通じてその奥にある本体を把握しようというものではないのである。」(三五頁)と囁くのである。だが斯様な一連のマッハ主義者——ハイゼンベルクもボーアシュレーディンガーなど(菊池博士はそれらの反芻にすぎぬ)——そうだが——はまだよいとして、数理哲学者B. フッセルによれば電子とは点でも塊りでもなくて、一つの法則(意味!)にすぎず、天文学者エディントンによれば、物質とは實在でなくて象徴であり、物質の存在は信じなくても神の存在だけは信仰せねばならず「神は世界を五十億年前に創造した云々」ということが「科学的に推理、計算されたり、R. A. ミリカンによれば、原子崩壊には神の意志が働いており、自然科学は「不斷の創造行爲を説く中世の有神論的神學復歸する云々」と力説したりする。

それだけでない。英國學術協會さえが、スマッツ將軍の口をかりて「物質は消滅した。世界は抽象的の、精神化された影の世界となつた」と宣言するし、更に驚く勿れ、一九二九年法王のアカデミー「グレゴリヤニウム」によつて次の言葉が公表せられたのであつた——「神聖科学アカデミーは法王ピウス九世の五十年祭の記念のため、量子理論の神祕的性質表示を包含するところの、物理学における量子理論に関する最も優れた批判論文に對し一萬リラの賞金を與えることに決定した。」(三)

今や、物質は消滅した——まぎれもなき神の証明であり、観念論の勝利である。因果律は否定された。神は「憎むべき物質」から

は「自由」である。唯物論は滅びなければならぬ——こう哲学者達はいうのである。だが果してそうだったか。

以上において我々は因果律は成立しないという。主張——否決定論をみた。だが果して夫は正しいか。一体、因果律が成立しないならば、物理学は何を究明しようというのか。マックス、プランクの言を引用すれば、「……二二三の否決定論者は物理学における因果律を決定的に否定してしまつた。しかしよく考えて見るとこの結論は世界像と経験世界の混同によつて得られたものである」(「菊池前掲書の紹介による」)ではなかつたか。「同時刻における位置とか運動量というものは物理的に意味のないものである。意味のない量に關して解答を求めるのは因果律に對して苛酷である。つまりそのやうな問題(否決定論という独断——芝田)を導いたところの世界像の構造(マッハ主義的世界観——芝田)が悪いのであつて」正しい世界像——プランクによれば實在論——をもつておつたら、か様な独断に陥らなくて済んだのではなかつたか。それと同じく、物質が一体、いつ消滅したのか。電子や原子核が消滅したとは誰がいつたか——電子は「場における形成物すなはち場が異狀に凝結する処」(アインシュタイン)でなかつたか。夫らは質量をもつてでなかつたか。「物質が消滅した!」という独断を主張する「科学者」(?)自身の世界観(マッハ主義)が悪いのであつて、新しい世界観——エネルギーとか場とかエネルギー、波動(連続観と不連続観の止揚)、確率等、この弁証法的な——をもつておれば、科学はかの非合理主義——神——の奴隷にならなくて済んだのではなかつたか。——物質が消滅したのでなくて、物質そのものが弁証法的であることが証

明されただけの話ではなかったか。「消滅した」のは物質の古い概念、
だけであつたか。

田辺博士の「基礎づけ」によれば、光は「主観」のものであつたが、それなら、我々の「見る」世界はすべて主観に属して、客観はなくなるのでないだろうか——「見る」ということが恰も光の働きであるから。しかも、ニュートン力学は全然否定された様にいわれるが、電子、光子は位相波エネルギーの集合状態であるが、之等の○道の曲率半径が大なるときはその運動は古典力学に従う（石原前掲書九四頁）——即ち古典力学は、弁証法的に止揚されているのではなかつたか。更に、自然自身は弁証法的ではなくて、主観と客観の關係のみが弁証法的（即ち弁証法）だとすると（田辺前掲書一五九頁）その主観とは何を認識するのか。夫は洵に變なものではないか。抑々観念論者にとつては、物質がどうならうとそんなことは構わぬ筈ではなかつたか。

それはそうとして、ニュートン力学の因果律によれば、運動方程式と「初期條件」が揃つて初めて運動が決定され、或いは「世界の現在の状態を残らず知つたなら世界の將來は全部間違ひなく予言しうる」（ラプラス）のであつた。そしてこの機械的決定論に対し、上述の否決定論が出てきた次第である。だが今や、どちらも批判されねばならぬ——では一体どうなるのか。

それはこうである。恰も、哲学上の機械論と目的論が、証法によつて止揚されねばならなかつた様に、我々は機械的決定論と否決定論——必然性と偶然性——との矛盾をとく爲に、今こそ、弁証法的決定論を、即ち弁証法的必然性と偶然性とを採用しなければなら

ないのである。

では偶然性とは何か。形而上学者（例えばブートロー）にとつては、「決定原因の系列中に或る程度まで偶然性が支配することではないならば、目的原因の系列中には盲目的原因が支配することになるであらう。何故ならば、現象の継起の中に或る程度の偶然性を導き入れるのはまさに目的性そのものだからである」（野田訳「自然法則の偶然性」二五二頁）といひ、必然性と偶然性を全くきりはなして、「神の自由の說によつて、……偶然性は説明を與えられないのである」（二七七頁）といふのである。まるで、偶然性は目的論に従つて、神の御手に存するものの如くである。之で單に「疑ひをとく無智」のくりかえしにすぎないではないか。（尚、偶然論の主観主義についてはポアンカレ「科学と方法」六一頁）

だが、必然性と偶然性は密接に関連してはなくてはならぬ。例えば、例が悪いが地震は、社会過程から出てくるものでなく、社会にとつては偶然な自然現象である。が地震は社会の経済過程に影響し或は政治運動にさえ（福井の例）影響する。即ち、社会過程AがBになるには、A自身の内的矛盾に規定されるが、一方その過程は $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \dots$ というそれ以外の——「偶然的なものとは一般に、その存在根拠を自分自身のうちにでなく、他のもののうちに持つものである」（「小論理学」一四五補）——無数の原因により規定される。しかも之は全体として必然性の担ひ手となり、必然性は偶然の無限の集合により、自らを貫くのであり、両者は交互に浸透するのである。偶然性は主観的でも、神の意志でもない。天は因果的に規定されたものとしては必然性である。

「偶然的なものは正に偶然的であるが故に如何なる根拠をも所有しないし、且又同様に正に必然的であるが故に或る根拠を所有する」（「小論理学」中巻三四五頁）のであり、「必然性は自己を必然性として規定するところのもののそれ自身に他ならない。」（三六〇一頁）扱、前に戻つて不確定性原理における確率の問題、之は因果を否定するものではなくて、実は弁証法的決定論における必然性として理解されねばならない。確率を貫く因果——之が必然性と偶然性の弁証法であり、そしてそれだからこそ元來「統計的法則」も自然科学においても認められていたのではなかつたか。——氣體分子論の如き。

かくして「一般に物質波の法則は古典力学の法則と根本的に異つてゐる。しかし本質的な物質波に固有の函数が始めの條件と境界條件によつて、時々所の函数として完全に定まるということである。即ち量子物理学においても古典物理学と同様完全な決定論が支配するのである。」というプランクの言葉——彼は決して弁証法を自覚していたわけではないが——の眞実さが理解されるであらう。さて今こそ物理学の「危機」、観念論の勝利——夫は実は彼等の淺薄な自己弁護、幻影に外ならなかつたことが推察出来るであらう。外でもない、量子力学も又、元來自然弁証法の眞理性を予想しておつたのである。^(七)

だから流石の田辺博士も前掲書第六章では兎を脱がぬわけにはゆかない。（二三六頁以下）

「更にディラックの量子力学に於て注意すべき点は、ハイゼンベ

ルクの不確定性原理の解釈が、ボーアの通俗的解説（処が一五八頁ではボーアに最大級の敬意を拂つてゐるのに！）などに見る如き主観主義の痕跡を一通して徹底的に客観的事象的なものとしてゐることである。観察の手續が観察せられる対象を変化することに由來する不確定性は、外部の攪乱から遊離せられた系においてのみ妥當する因果律の適用を制限するものとして、論議の的となつたこと周知の如くである。其場合に観察を、観察する精神の作用に属するものとして主観の機能を含む如く解いたのは現にかかる解釈を下した私などの観念論的偏見によることを告白しなければならぬ……」——何と適切な「懺悔道」ではないか！

更に二四〇頁以下では「物理的存在の構造は既に現在までに達せられた認識においても、其弁証法的基礎を蔽う訳に行かない。其の限り所謂自然弁証法も否定すべからざる意味を有するといわねばならぬ……私は現在の物理学理論の立場から自然弁証法が正確明細に組織せられることを以て、今日の理論的急務と思惟せざるを得ない。」といふのである。今やこの言葉はまさに唯物論に対する尊敬すべき太鼓判に外ならない。田辺博士の「観念論から唯物論へ」——人は之を見るべきである。

自然科学の代表をなすもの、夫は物理学であつた。物理学は自然科学の代表といはるべき理由があつた。——戸坂調「科学方法論」（選集版）一二三頁以下——そして我々は特に抽象的な相対性理論と量子論の問題を選んだ。そして夫が恰も階級性を如実に示し、從つて一方は虚偽を、一方は眞理を示したことを見たのである。

機械的決定論と否決定論の二律背反。夫は唯物弁証法により解決された。それは生物学に至ると尙明確となる。簡単にそれを見よう。生物とは何か。生命ある存在 (Zion) である。而して生命は、物理化学的現象と異つて、「生命は本質的に生命あるものであり、……生命ある個体である。」(「小論理学」二二六節) 個体は而して形態をもつことによつてのみ、個体でありうる——「形態学」。更に諸形態は組織的に統一される。組織的統一をそれはもつ——「分類学」。更に分類のためには分離の原理内部構造が必要である——「組織学」の成立。ひるがえつて、形態は内部構造の形成なくしてありえない。「形態学」「形態形成理論」「発生学」え。

今や、生物は形態ある個体であるという側面からでなく……一個の過程の所有者として、生命という過程、現象として理解されねばならない。かくて、生物学は実は「進化論」の問題に帰着するのであり、生物学は殊に、対象自身の歴史性という事により、他の自然科学から区別されるのである。博物学 *Naturschichte*——茲において既に生物の弁証法性が顯著であらう。(戸坂調「生物学論」岩波講座生物学参照)

それはそうとして、生命の本質について古來二つの世界観——機械論と生氣論(目的論)——の対立したことは、周知の通りである。

機械論者は先づ部分より出発する。彼らによれば生物体を構成する部分は物理、化学的性質を有する要素である。故にかかる要素の総和は、生物体全体のあらわす生命は、物理化学的以外ではありえ

ない——生命を現在説明しえないのは、單なる知識の不完全に因るにすぎぬ。こう彼等は考へる。

他方、生氣論者は生物体全体の方から出発する。生物体全体の有する性質——自律性、合目的性等——は決して物理化学的でない。故に特殊な力——生氣——があるに違いない。こう彼等はいうのである。(戸坂同上及び丘英通「機械論と生氣論」岩波講座哲学)

かくて有、名なのはドリーシユなどにより「エンテレヒー」という形而上学的概念が補充されたり、「全体論」というものが考案されたり、実証的だが結局ロマンティックなベルグソンの「生命哲学」が出て来たり。或はモナドロジーさへがとび出して来る。要するに「悟性——形而上学——芝田——の立場からすれば、生命は常に神秘なもの、およそ概念しがたいものと考えられている……(即ち)悟性は自身自身の有限性と空無性とを告白するにすぎない」(「小論理学」二二六補)のである。だから今や弁証法が両者の二律背反を止揚しなければならぬ。

(1)生物は世界における存在物であり——即ち栄養、エネルギー、氣圧、イオン、熱、光等の外的條件と相關的である。(2)生活体は物質である——内的條件。(3)生活物質は物理化学的規定に従う——消化、呼吸等。以上の点を是認しつつ、有機半物は無機物から自然史的に発達したこと——無機物に還元されるから——而して、有機体は無機体と質的に異なること——量と質との弁証法——そしてこの質的相異が生物の自律性をうみだしたという事——之が恰もエンゲルス以來、マルクス主義の主張した処であり、降つてオペーリンク研究により実証せられた次第であつた。

かくて生物学それも又唯物弁証法のもの以外ではない事で知られるであらう。

ついで乍ら、生物学の階級性——眞理乃至虚偽性——は、一層甚だしい。生物学は、「科学」なるが故に、排斥され、或は援用された。進化論はマルサス、「人口論」より影響をうけ、又マルクス唯物史観にも影響したのだが、夫れの書物は聖書に反するという理由で或る処では禁止されたり焚殺されたりする。一方、民族主義やアナキズムは自らの御膳立てのため生物学の「科学性」(9)を採用了りするのである。我國の生理学者では橋田邦彦博士など反動学者の筆頭にあげられるが彼によれば、「学は不思議に終止してあるが、まゝの世界を寸分の謬りなくあるがままに把握するを旨としている」(唯研「二号による」)といつたり「あるものはあるもの以外の何物でもない。諸法実相摩訶不思議」だといつたりするのである。そしてこういう「聖書」や民族主義等々にかふれた、「超越的」生物学者が階級性——虚偽性——をもたないとは洵に「摩訶不思議」ではないだらうか。

抑、私は、以上、自然科学の階級性と眞理、虚偽性が如何に對應するかを見ておいた。そして又実際、数学さえも又階級性をもつのである。「ピタゴラスの定理」のどこに階級性があるか、と詰問されるかも知れぬ。——だが数学基礎論、数理哲学が恰もそうなのである。

例えば、西田幾多郎博士はいう「ピタゴラス、プラトーの昔から数学は哲学と密接の關係をもっている。数理の問題の根底には深い形而上学の問題が潜んでいる。否深い人生問題も之に接触している

と思う……純なる理性の活動、純なる實在の形相は微妙なる数の關係において最も明かに之を見ることが出来る。」(田辺元「数理哲学研究」序)更に、田辺博士は、「私は当時主としてマールブルク学派の影響をうけ……たゞ此の派の特色をなす純粹論理主義を排して論理の根序に直観の内容を探ることを努め……」(同上、自序二頁)といひ、更に、「……ブローアー、ワイルの連続論……これは連続の数学的概念構成に直観的直素を明白に承認するものとして……私の思想を数学の立場から寧ろ支持する材料ともなるといえるであらう……」(同九頁)とつづけている。一方、専門の数学者(例えば未網想「一」)の如きさえも、まさに行爲的直観、数学的には外ならないとして西田哲学と握手したりするのである。(「数学と数学史」)——尙ボアンカレにおいては、「数学とは物質的对象と無關係」であつたし、「……幾何学の公理は先天的綜合判斷でもないし、實驗的事実でもない。それは規約」(「科学と仮説」文庫版八五頁)であつた。

今や「形而上学」「純なる理性」「純なる實在の形相」カント主義、「直観内容」「対象と無關係」「規約」これ等の言葉に人は觀念論——数学的觀念論——を見る事は出来ないだらうか。

だが他方、数学は果して「純粹精神」の産物であらうか。夫は田辺博士などによると、全くアブリオリだといふのだが果してそうか。——「数はもちろん一つの思想ではあるが感覺的なもの(實在、物質——芝田)に最も近い思想である。もつとはつきりいへば、われわれが感覺的なものという言葉のもとに互に互の外にある多を理解する限り、数は感覺的なもの、自身の思想である」(「小論理学」一〇

四補三)ではないか。——ヘーゲルでは数学は具体的な「度量」の学であるが、「夫は感覚的存在について、その外面性という抽象規定だけを保持する」(大論理学、上、三五四頁)——又、エンゲルスは「純粋数学は、現実世界の空間諸形態および分量諸関係を、かくして極めて実在的な素材を、対象としている……だがひととは、これらの形態および関係をその純粋性において研究しうるためには、それらをば全くその内容から分離し、その内容をどうでもよいものとして度外視せねばならぬ……」(「反デューリング論」文庫版九七—八頁)「純粋」数学夫は観念論的である様にみえる。だが、だからといって、事実が歴史的論理的な事実が観念論的だということには決してならないのでないか。

処で劃期的なフリーエ級数で有名なフリーエによれば「自然の深い研究は数学の発見のもつとも豊かな源泉である。單にその研究は諸研究に一定の目的を提供することによつて漠然たる問題や無用の演算を排除する利益をもつのみならず、それは解析自体をも形成し、もつとも認識の値打のある要素、そしてその学が常に保存すべき、その要素を発見する確かな手段であり、これら根本的な要素はすべての自然現象の作用のなかに再現されるものである」(近藤洋逸「数学思想史序説」一〇二頁より再引)のであり、更にアメリカの有名な数学者N・ウィーナーは「(一九三八)——フリーエ級数の核心をなしている「調和解析の最近の豊饒さは、その領域を物理学的アイディアでふたたび肥沃ならしめたことから生じた。インスピレーションを自身のなかからのみ取りきたり、それを自身で洗滌し仕上げてゆく自己充足的科学として、純粋数学を示すことは数学史

の偽造である……。数学及び物理学で必要なことは、実際の物理的現象のじつに教訓的な本質に無関心でない態度であり、しかもその態度たるや、これら現象に支配されて自身の知的創意性を妨害されたり癱痺されることではない」(「一四頁」)のであると。洵にコールマン——ソ同盟の数学、物理学の權威——が「数学者は、具体と抽象との間の眞の関係を實現すること、数学を物神化する態度から、数学と現実との関係についての観念論的な非弁証法的な概念から、解放されることが必要」だと力説するのは眞理である。(「数学的諸科学における現在の危機並にその再建の一般的輪廓」——邦訳「岐路に立つ自然科学」の中)

抑、我々はこの数学的唯物論といつてよいものを簡單に見た。而して、一体、いづれが眞理か。更に進んでプロウアの直観主義、ヒルベルトの形式主義——二者の対立——その止揚はどうであるべきか。今こそ、自然弁証法が適用されねばならないのではないだろうか。——幾何学については前に見た。

五

今や、科学のあらゆる領域——最も抽象的な数学さえ——唯物論と観念論に対立するのである。而も、眞理は前者、虚偽は後者のものであること、之は断言しても差支えない様に思われる。

ひるがえつて、自然科学の目的、夫は自然の自由な——科学的な——研究以外ではなかつた。では何故、自然科学が唯物弁証法的だとわざわざいう必要があるのか——こう「数学者」達はいうであらう。しからば、逆に問わねばならぬ。何故、物理学の「危機」により、有数

な自然科学者(ドイデ・ホルツマン)が自殺したりしたのであるか。

何故、「科学は神性的性質を示しつつある」といわれる程宗教の奴隷になり、或はすぐれた科学者自身「哲学者」振つて、憐れむべき形而上学の泥沼に陥らねばならなかつたか。何故、多くの「純粋」自然科学者や「純粋」哲学者が後に「懺悔道」を演ぜねばならなかつたか。数学は何故、自然と関連せざるをえないのか(複素数でさえ)。

——自由とは「勝手氣儘」や「超時代的」になることや、「無方法」ということでは断じてない。

「ヘーゲルは云つた。……自由と必然とを相容れないものと見るのがどんなに誤つてゐるかがわかる。もちろん必然そのものはまだ自由ではない。しかし自由は必然を前提し、それを揚棄されたものとして自己のうちに含んでいる。」(一五八節補)と。自由とは必然の洞察以外の何ものでもない。しかも、事実、自然科学は、自然弁証法の眞理たる所以を、必然たる所以を示したのではなかつたか。

それだからこそ、自然科学が、自由に研究されるためには、自然自身、自然科学自身の脚下にあるもの——弁証法——が、夫れの方法にならねばならぬのである。自然科学は自然科学弁証法という論理學をもたねばならぬのである。

抑、我々によれば「自然科学も又イデオロギー」であつた。そして私は、「社会の産物」としての契機よりも、寧ろ「自然の論理」という観点より夫を見た。だが自然弁証法はやがて歴史弁証法——史的唯物論——になるのである、又後者は前者を媒介としてのみ後者でありうる。そして更に我々には、自然科学の方法論たる実験の問題、社会科学との連関における技術の問題、産業及び社会思想との

連関における科学史の問題、更に進んで「常識」——夫は一つの哲學史的なイデオロギー的な概念といつていいが——と科学精神の問題、更に又、ヒューマンイズムの問題などが残つてゐる筈である。

そして、夫等に言及すればする程、科学の物神性ははざとられて、いよいよ「自然科学はマルクス主義の立場においてのみ、はじめて自由にして眞理でありうる、ことが、証明されるであらう。最後に一つ、階級性を否定することが恰も階級的であることを見過

ておくならば、人々はいうであらう。——

自然科学や社会科学、夫等が階級性をもつことは事實であらう。だが少くとも自然科学は階級性をもたないことが理想であり、當爲ではないかと。——まことにその通りである。自然科学が階級性をもたないこと、それは理想である。だが何故、彼らは、社会科学も又階級性をもたないことを理想だといわないのであるか。否。何故社会自身が階級的でないことを理想だといわないのであるか。此処に、右の如き論者の階級性を我々は如実に見ないであらうか。

繰返していはい。自然科学は二つの世界観——虚偽と眞理——に分裂する。そして夫は恰も階級性に由來したのであり、又するのである。之が我々の結論である。

註

(一)「物質の消滅」を最初にいい出したのは、又、ポアンカレ「科学と仮説」。

(二) マクシミフ「現代自然科学における階級的矛盾の反映」

(唯物論研究二九、三〇号)

(三) 前掲コールマン論文(唯研一五号)

(四) 自然は弁証法的だが、自然科学は弁証法的でない、という形式主義者も他方あるのであり、例えば、三木清氏や本多謙三氏などがそうである。本多謙三「有機的自然観」(岩波講座哲学) 参照。

(五) ニュートンはいう迄もなく「機械論」者である。だが機械論は理論的に最初の衝撃―神―を予想する。「機械論」は宿命論であり、必然的に目的論となる。いつ迄たつても解決がつかなくなるのである。

(六) ボーアも後にいう「量子力学は古典的な因果関係を変革した。併し、之は異つた測定方法により異つた法則性があらわれ、波動性、粒子性というのは実験の結果をあらわすにすぎない。法則性が本質であり、確率、不確定、同時に位置と運動量を持たない事等は表面の事である。」と。ここで、「本質と現象」の弁証法的把握が必要である。

尚、プランクは前掲書―特にその中の「物理学的世界形像の統一性」では、明かに「實在論」の立場―我々の言葉では唯物論―にたつてゐるが、弁証法がよくわからずに、後に神秘主義に陥つたといわれる。

(七) 一括して、文献をあげる。(自然弁証法に関して、特に物理学)

ヘーゲル「大論理学」「小論理学」

エンゲルス「反デュリング」「自然弁証法」「フォイエエルバハ論」

レーニン「唯物論と経験批判論」邦訳「岐路に立つ自然科学」

江上不二夫「生化学から見た生命」(思想四八年四号)

山口清三郎「オパーリンク生命の起源批判」(新唯研二号)

(一〇) 数学に関しては、デカルト「叙説」「規則」以来あげねばならぬが、特に弁証法に限り重要なものをあげることにする。

ヘーゲル「大論理学」上巻第二篇第三篇、中巻、第一篇第二章Bの三(註)「小論理学」九九、一〇二、一〇四、一八八節エンゲルス、レーニン前掲書。尚マルクスの「微積分」に関する論文があるのだが、まだ私は手に入れないでいる。

近藤洋逸「幾何学思想史」「数学思想史序説」。(―この二著は近來の名著である。)

尚「フーリエの精神とヤコビの精神」(思想四八年二号)は数学的観念論と唯物論の対立をまとめている。尚「理論」連載の諸論文。

今野武雄「数学論」

吉田敏「ヘーゲルの数学観」(唯研一二号)

世田雄一「数学における公理的方法の発展と弁証法」(同二九号)

吉田敏「微積分と唯物弁証法」(同三〇号)

石原辰郎「自然弁証法の例証の問題」(同三一号)

伊藤至郎「対応の学としての数学」(新唯研二号)

(一一) 戸坂潤「技術と実験」「技術の哲学」の中、「実験をめぐる問題」―選集第三巻の中

(一二) 「岐路に立つ自然科学」ヨッフエ、ルビンシュタイン、ミツケウイチ、ヘッセン論文

(ザヴァドフスキー、コールマン論文)

戸坂潤「科学論」「空間論」「自然科学とイデオロギー」(「現代のための哲学」の中)

原光雄「自然弁証法の研究」

武谷三男「弁証法の諸問題」

菅井準一「哲学と自然科学の交渉」(之は観念論と唯物論の対立をまとめたものである)

岡邦雄「自然弁証法」岩波講座哲学

坂田昌一「理論物理学と自然弁証法」(潮流四七年九、一〇合併号)

伊藤至郎「空間論のために」(新唯研一号)

尚、アメリカの原子爆弾の権威オッペンハイマー博士も自然弁証法論者であり、湯川博士も自然弁証法に傾いている様である。

(八) 凡そ、田辺博士の「哲学と科学との関係」は考えられうる最も奇怪な書物の一つであらう。即ち、第五章では観念論者であり、第六巻では、前者を自己批判して自然弁証法者になつてゐる。だが、第六章の論文は、前者より二年古く書かれたものであることだ。だから真面目によむと、実に啞然とさせられる何が何だか判らぬ書物である。

(九) 生物学の文献。

前掲、ヘーゲル、エンゲルス、レーニンの著作。

戸坂「生物学論」

木田文夫「生命科学における内部相互関係論」(思想四八年三号)

戸坂潤「科学論」「技術の哲学」。「技術の意義」(選集第三巻の中) 英人クラウザー(邦訳)「ソヴィエト、ロシアの科学」ソヴィエト、ロシアの自然科学

(一二) 岡邦雄「イデオロギーの発生(自然科学)」―岩波講座哲学。

原光雄「自然弁証法の研究」第三章数学を唯物史観的に見たものに、

世田雄一「数学史研究」(唯研四六一五〇号)

小倉金之助「数学史研究」第一集がある。特にその中の「イデオロギーの発生(数学)」参照。だが、歴史論としては多分に機械的にすぎると思はれる。

〔補遺〕

一、最初に断るべきであつたが、形而上学の問題は哲学史的に色々異り、異論もあるであらうが、私としてはヘーゲルに従つておいた。もし、「存在」論という言葉が必要なら「悟性的形而上学」でなくて、いはば「弁証法的存在論」「客観的論理学」結局、唯物弁証法のみがそれに値ひするであらう。

二、この文章が書かれてから、田辺博士の著作「局所的微視的(展望十一月号)が公にされた。ついでに見ておくらば、これにおいても私は博士の観念論的傾向を指摘出来るであらう。というのは今度は「実存哲学」乃至「神秘主義」によつて「基礎づけ」をされ、絶対弁証法が主張される。だが「絶対無」の概念が、既に「観念論でも唯物論でもない」だからこそ一層高級の観念論の立場にたつてゐるのであつて、ハイデッガーがヘーゲルよりの退

歩だと思える同じ理由によつて、私達は「絶対弁証法」「絶対無」「神」というものは、ヘーゲルよりの退歩といえるであらう。要するに、かくも様々に「基礎づけ」られたのでは、当の自然科学こそ、いい迷惑である。

〔附記〕 この小さい文章は書き終つてみるとまことに不満なものであり、科学論の他の領域即ち、方法と対象、分類、他イデオロギイとの関係など適した処少なくない。

編集後記

昨年は六十周年記念の立派な「北辰」が発刊されて有終の美を飾つたのですが、今年も矢張り最後の最後の「北辰」を出そう！といふ声が矢張り各方面から起り四高の終末の事情のあわただしさの中から、それでも茲に発刊の運びとなつた次第でした。

「北辰」の最終号を出すといふことを今更「傳統に従つて……」とわざ／＼云ひ出さなくても「昨年北辰が出た。一昨年も、その前も、ずつと前から……」そして「今年も出る、來年も、その次も……」といふ無理のない極くあたり前の思ひつきとして賑博として今年も発刊されたのですから別に取り立てゝいふほどの「終末の感傷」も「最終の感激」も作品中に見当たらないのは、かへつてなにか「それでよい」のではないかと思はれるのです。

第一俳句とか短歌は良いのも悪いのもサ

ッパリ集まらなかつたのは幾度か「第二藝術論」への言ひ訳があつたにも拘らず若い人々にはそれが言ひ訳にならない決定的な短詩文学の命脈とみて差支へなからうし詩会で選んだ詩だつて矢張り古いマヅイものばかりだといふ刻印も許るされると思はれます。

まあしかし芝田君の病床にあつての研究成果たる哲学論文は立派ですし西田君の創作も演劇「最後の切札」の演出者であるのを想ひ起すと面白いものがあると思はれます。

「これにしようか、あれにしようか」といふほど、その筋の先生に作品を選択していただくほど張り合ひのある編集ではありませんでした。たゞ、流れ続いた四高六十年の水脈が辿り着く河口も知らぬげに「北辰」の最終号を浮べましたが……その水脈がどう黒い奇怪な岩石にぶつかつて……力強く飛び散つたしはぶきは……

加えて一介のディレクタントにすぎぬ私は、色々あげておいた文獻に依存する処少ないし、又意外な誤りもあることと思はれる。何れ、御指導にまちたいと思ひます。

尚、私の病臥中、激励を惜しまれなかつた諸先生方及び友人諸兄にそれから圖書を貸與された諸兄に、心から感謝を述べたいと思ひます。(一九四八、十一)

学園内にありながらも社会的実践に身を投ずる人々の一群からの声であらう筈なのに……それも絶望だつたことは「しはぶきがしなかつたのだらうか」「そのしはぶきが我々に見えなかつたのだらうか」とまじめに自問してみる大切な問題を孕んで呉れたと思ひます。

四高卒業生の著作目録を圖書課の依頼で収録することが出来て六十周年の記念事業として残されてゐたことが完遂されて、まことに嬉しいでした。

編集に關しては大沢先生はじめ諸先生方、それに休暇中も諸処奔走して呉れた宮川君、西田君はじめ文藝部の人々にあつく感謝いたします。明印の方にも最後の御無理をおかけして最大の盡力を賜つたことをお礼申し上げます。

それでは最後の「北辰」を配布いたしました。これで「おはり」にいたしました。

(畑尾尚雄記)

昭和二十三年十二月現在

第四高等学校卒業生著書目録

第四高等学校

は し が き

昨昭和廿二年十月廿六日、わが第四高等学校は創立六十周年を記念するに当つて、三四の事業を計画しましたがその一つに出身先輩の著書文庫の設置ということを、最初に取りあげました。それで記念行事中の一日には、まづ図書館所蔵の中から、さうした著作物の展示をしたり、或は遺墨等を掲げたりして、我が校が明治・大正・昭和の三代にわたる文化的寄與のあとを、先輩のかかる業績に於いて、來会者に偲んでいただき、それへの手引という意味もあつて、その著作目録―それは疎末な謄写刷りで、またほんの一部に過ぎませんでした―が作成してお願ひしました。

文庫設置の計画をきかれた先輩諸賢には、その珠玉の名著を、縷骨の研究報告をというやうに、お手許のものを寄贈された方もあり、御好意は関係者を深く感動させたものでありました。図書館もまたその資の許す限りは、さういう著作の捜査

購入に努力もしました。しかし何分にも諸種の事情は最初の計画の遂行を困難にしましたので、専ら目録の作成ということに主力を注ぐこととして、爾後第二冊・第三冊に及び、まづ大体を網羅し得られるやうになりました。これは図書課長の神保教授はじめ大沢教授・藤井事務官等の獻身的な努力や、またよくその意をうけて精進した生徒諸君の労苦の賜と感謝しなければならなところでもあります。

さて第一冊から第三冊までに収録した書目は実に一千八百に近く、その著者の数は三百十三人に達しました。或は哲学を始めとして人文科学の廣い範圍に、或は純文学に、或は社会科学の各般にわたり、或は自然科学の諸分野に於ける等、これは實に上述の如く三代にわたつて、わが第四高等学校が日本文化いな世界文化に寄與貢獻した実績を、如実に物語るものと申されませう。

せつかくこれまでに整へられた書目を、頒布範圍も狭くかつ疎末な謄写刷のまゝにして置くのものと、この声もありましたので、ここに「北辰」をかりてこれが整備再録をすることといたしました。紙幅の關係もあつて雑誌登載の論文―実はこれに重要な業績の盛られてゐることが決してすくないのではありませんが―などは、遺憾ながら割愛して専ら單行著作を採録することとしました。この点は著者にも読者にも、切に御諒承をお願いいたします。なほそれでも脱漏も少くないかとも思はれますからお氣づきの点は、御通知にあづかり、完璧を期したいと念願してゐる次第でございます。何卒御助力の程を。

昭和廿三年十二月十五日

鳥山喜一

第四高等學校卒業生著書目録

*は本校所蔵

相川春喜 (矢浪久雄) 昭三 在学

技術論 三笠書房

技術論技術及技術管理 三笠書房

*東南亞の資源と技術 三笠書房 昭一九

文化映画論 霞ヶ関書房

歴史科学の方法論 白揚社 昭二〇

相澤秀一 昭二 理甲

経済学説史 (唯物論全書) 三笠書房 昭三二

*黎明期の市民経済学 三笠書房 昭三二

赤井重恭 昭五 理乙 農博

*植物菌癭の研究 朝倉書店 昭一九

木材腐朽菌学

秋元繁松 明三四 二工

鉄筋コンクリート橋樑 博文館 明四二

秋山英夫 昭六 文乙

*ゲーテとニチエ 大東出版社 昭三三

*ジヨセフ・フーシェ (ツワイク作) 河出書房 昭一四

*デイオニユソスと超人 理想社 昭二三

*マリ・アントアネット 上下 (ツワイク作) 青磁社

浅井惠倫 大四 一文

*原語による台湾高砂族傳説集 (小川尚義共編) 台北帝國大学言語学研究室

昭一〇

Gravino's Formulary of christianity in the Siraya

Language of Fornosa. (台北帝國大学文政学部紀要(一))

A Study of the Yami Language an Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island. Leiden.

Some Observations on the Sedik Language of

Fornosa; reprinted from the Philologia Orientalis.

Vol. I. 1834.

浅井喜久男 昭二 文甲

英文選集 (註釈) 金沢 きんけい印刷部 昭三三

淺尾 莊一郎 大八 二理 理博

陰極線管及び陰極線式テレビジョン
(長島躬行共著) 昭一四

*光電管 (岩波講座物理学) 昭一四

交流理論・光電管X線 アルス

淺野 利三郎 明三七 一文

興亞聖戰と世界大戰 現代社 昭一五

文化 國際思想發達史 巖松堂

最近國際思想史 巖松堂

最新 西洋大歴史 上・下 宝文館

日独ソ大陸ブロック論 東海堂 昭一六

*露西亞民族の新研究 政教社 大二三

滿洲國の歴史的研究 宝文館 昭一四

淺野 順太郎 大二三 理甲 藥博

有機化学概要 (朝比奈泰彦共著) 南江堂 昭一四

安宅 彦三郎 大二三 理甲 工博

円環函数表 (門司正之共著) 九善 昭二三

交流回路学 義文閣 昭二二

最新電氣磁氣工学

阿部 莊二 明三一 一文

教育史綱要

甘粕 石介 昭二 理甲

新しい人間の誕生 史学社 昭二三

*藝術学の諸問題 瑞書房 昭二三

藝術論 (唯物論全書) 三笠書房

*現代哲学批判 北隆館 昭二三

*青年時代のヘーゲル (デイルタイ著) 訳 三笠書房 昭二三

*天才と遺傳 上・下 (ゴルトン著) 訳 岩波文庫 昭一〇

*哲学小辞典 (他五名共著) 霞書房 昭二三

ヘーゲル傳 (クノーフワイシャー著) 訳 三笠書房 昭一〇

弁証法を学ぶ人のために 解放社 昭二三

荒木 新太郎 大一一〇 二理 理博

染料化学講義 冨山房

荒木 良造 明三九 一文

詭弁の研究 内外出版

*貯金談 丁未出版社 明四六

荒木 楠千代 昭二 文甲

上野歌解・旋頭歌解 大岡山書店

堤中納言物語 (編) 中央印刷社 昭二二

土佐日記 (編) (新日本文庫) 出来島書店 昭二三

橋本直香集 第一 (編) 大岡山書店 昭一一

有馬 英二 明三七 三 医博

肺結核の内科的療法 日本臨牀社 昭二二

肺結核の予後 金原商店 昭一一

有馬 祐政 明二九 一文

藝術論 博文館

*國民道德叢書 全三冊 (黒川眞道共編) 博文館 明四五

*孔子言行録 博文館

商業修身教科書 全五冊 (佐野嘉作共著) 弘道館

*日本國道論 富山房 明四〇

日本倫理 富山房 大四

日本倫理史 博文館

武士道要論 明三九

*武士道叢書 上・中・下 (井上哲次郎共編) 博文館 明三八

*孟子言行録 博文館 明三八

有本 邦太郎 大一一〇 二理 医博

*栄養科学 (藤巻良知共著) 光生館 昭一六

栄養と食品の化学 丸善

飯本 信之 大六 二理

*経満地理学 上・中・下 (地理学講座一至三) 地人書館 昭二一・二二

*政治地理学 改造社 昭四

*政治地理学 (地理学講座八) 地人書館 昭二二

*政治地理学研究 上・下 中興館 昭一〇・一一

*地理学發達史 中興館 昭一五

南米の経済地理 (ラジオ新書) 日本放送出版協会 昭一七

*南洋地理大系 全八冊 (佐藤弘共編) ダイヤモンド社 昭一七

石井 信太郎 大九 三 医博

蚊と蠅 文化書房 昭二三

*東亞の熱帯病 大日本出版 昭一七

*新熱帯病学 (他二名共著) 南山堂 昭二〇

マラリア学―診断と治療― 金原商店 昭一四

石川 日出鶴丸 明三二 三 医博

*石川生理衛生教科書 冨山房 大一一

*石川女子生理衛生教科書 富山房 昭六
師範教科 石川生理衛生教科書 富山房
*石川大生理学 上 富山房 明四二

石川 鍊次 大三 一文

アンデルセン童話 (独逸語訳註文庫) 郁文堂
曉の巡礼 (ヘルマン・ヘッセ全集十五) 三笠書房
*医師ギオン (ハンス・カロツサ全集) 四 三笠書房
遅れ咲くバラ (独逸語訳註文庫) 郁文堂
*高嶺の処女 (訳註独和対訳叢書) 郁文堂 昭二
最新科学読本 尙文堂
かなづき初歩読本 (ドイツ語文庫) 三修社 昭一五
青春罪あり (独逸語訳註文庫) 郁文堂
*青春変轉 (ハンス・カロツサ全集三) 三笠書房
旅の日のモーツアルト (メーリケ作) 訳 東書房
昭二六
ドイツ語発音研究 (大学書林文庫) 大学書林 昭一四
*独逸民族二千年史 (シュテューヴェ著) 訳 理想社
昭一八
*ブラークへの旅路のモーツアルト (メーリケ作) 訳
岩波書店 大一五

石原 即聞 明三三 一文

*日本佛教史 博文館 明四四
*佛教哲学汎論 博文館 明三八
石本喜代松 大一〇 三
食養修身録 糧友会

石 勤 弘 大一 理甲

小型活動
フィルム 現像法 古今書院
磯部喜右衛門 明三六 三 医博
臨床上最も必要なる疾患の類症鑑別及検査法
診断と治療社

市川 渡 大一四 理甲

科学の門 錦城出版社 昭一七
富山縣地理文献集 中田書店 昭一七

市村 壱 明二五 二理

*石川縣下野生有用植物 (安田作次郎共著)
石川縣図書館協会 昭一六
*植物学綱要 同附图 明治印刷 大二
*綱要植物学講義 光風館 大三
*近世動植物学教科書 上下 積善館 明三二

ヘーゲルと現代 (ドイツ語文庫) 尙文堂

*幼年時代 (ハンス・カロツサ全集二) 三笠書房
昭一六

*リーヒャルト・ワグナー (チェンバレン著) 訳
二見書房 昭一九

*ローベルト・ユツホ (宮島幹之助共訳) 富山房 昭一八
(ウツホガール著)

石田外茂 一大一二 文甲

行の生活 大阪屋号 昭一八
*宮本武蔵 五輪書詳解
ペルー征服 (プレスコット著) 訳 (改造文庫)
改造社 昭一八

石橋 雅義 大七 二理 理博

*基礎容量分析法 上・中 富山房 昭二一・二三
*重量分析実験指針 カニヤ書店 昭二二
*定性分析化学 上 裳華房 昭二六
*定性分析実験指針 カニヤ書店 昭二一
*分析化学総論 一二 裳華房 昭二二
容量分析実験指針 カニヤ書店 昭二二

石原 孝吉 明三一 三 掌 中医 範 (大島機共著)

*独英羅和動植物字彙 丸 善 大五

*動物顯微鏡実習摘要 丸 善 明四〇

*日本藥用植物図譜 日本藥報社 昭七

*藥用植物実験便覧 敬業社 明三四

伊藤 允美 明三一 一文

新訂漢文読本

稲葉 逸好 明三三 三 医博

急性傳染性疾婁 第六册 百日咳 金原商店 昭二二
(大日本小兒科全書 第二十二編)

稲本 龍助 大三 一法

日支提携上より見たる銀爲替 大阪毎日新聞社 大一三

井上友一 明二三 一法 法博

*井上明府遺稿 三秀舎 大九
*救済制度要義 博文館 明四四
*自治之開發訓練 中央報徳会 大二
*自治要義 博文館 明四三
*都市行政の法制 上下 博文館 明四四
*樂翁と須多因 良書刊行会 明四一

今岡純一郎 明二八 二工 工博

工業経営通論 丸 善

世界大戦と日本海運 富山房

岩城準太郎 明三二 一文

江戸時代八大家文 東洋圖書

現代國文要抄

源氏物語講義

*國文学の諸相

國文学史教科書 (藤井乙男共著) 修文館 大一一五

自然主義以前の作家

*時文新抄

女子國語讀本

*新修日本文学史

徒然草講義

表現と鑑賞

文学者群像

明治大正の國文学

*明治文学史

室町時代文学類選

上杉慎吉 明三一 一法 法博

議政党政及政府

*行政法原論

*國家新論

國体憲法及憲政

國民教育帝國憲法講義

*最近憲法論 (上杉慎吉對美濃部達吉)

*新憲法述義

政治上の國民總動員

*憲法讀本

*帝國憲法

*增訂帝國憲法述義

帝國憲法綱領

帝國憲法逐條講義

比較各國憲法論

比較各國憲法論 (漢訳)

婦人問題

普通選挙の精神

*穂積八束博士論文集 (編)

新帝國憲法 第一編 國家

稿帝國憲法 第二編 國体

上田整次 明二五 一文 文博

沙翁舞台とその変遷 — 西洋劇場史研究 —

上野道故 明三五 三 医博

上野産婆学教科書 南山堂

子宮筋腫附子宮腺筋症 南山堂

(木下産科婦人科叢書 十七)

上村勝爾 明三一 二農 林博

森林利用学 上・中・下 成美堂 大二三—二五

烏賀陽然良 明三二 一法 法博

海商法論 上下 弘文堂 昭一一

商法研究 自第一至第四 有斐閣 昭一一

商法總則 (現代法学全集三一、三二) 日本評論社

商法要論 第三卷 弘文堂 昭三

手形法大意 弘文堂 昭二

実業学校 法学綱要

牛塚虎太郎 明三四

市政一年

大礼要義

臼杵才化 明三一 三 医博

家庭及教育

兒科処方新書 (他三名共著) 金原商店

梅谷與七郎 大二 二農 農博

蚕種学 弘道館

東京植物及び動物

無脊椎動物のホルモン論

浦良治 大一二 理乙 医博

簡明人体解剖図 (西成甫共著) 南江堂

瓜生康一 明四二 二工

実用を主材料強弱論

としたる鉄筋コンクリート計算法 丸 善

としたる鉄筋コンクリート計算法 丸 善

平易で解りよい鉄筋コンクリート計算法 昭五

直ぐ役に立つ鉄筋コンクリート計算法 昭六

鉄筋混凝土計算資料 昭六

実地鉄筋コンクリート工学 博文館 大五

*鉄筋混凝土の知識と建築の実際 二松堂 大五

*大発明家と発明界の進歩 二松堂 大五

江上秀雄 大七 一文

*選抜試験としてのテスト綱要 曠台社 大二三

榎本安三郎 明四二 一文
* 獨和 賢者の妻・死人に口なし (シュニツル作) 南山堂

大河良一 大一一 文乙

* 加能俳諧史

金沢文化協会 昭一三

* 芭蕉翁雜考

資文堂 昭二

芭蕉の門人 (他二名共著) 大八洲出版 昭二三

大澤 衛 大二三 文甲

* 蜥蜴の家 (コンラッド作)

訳 弘文堂 昭一五

* 日本文化と英文学

協和書院 昭一二

大島辰之助 明三一 二工

工業電氣工学一班 博文館

大島 櫟 明三〇 三

掌中 医範 (石原孝吉共著) 大二三

臨牀 藥譜

大津 康 明三六 三

* 獨逸國民に告ぐ (ライヒテ述) 訳 (岩波文庫) 昭三

* 獨英文化比較論 (チエムバレン著) 訳 東京堂 昭一九

* 獨文和訳研究 (道部順共著) 郁文堂 大一〇

* 複式和文独訳 郁文堂 大二三

大林徳太郎 明二八 一文

日本史要

日本本文典

大日方一司 大一二 理甲 工博

アルミニウム合金鑄物 (寺沢正式共著) 丸 善

(輕合金顯微鏡組織 第一輯)

デユラルミン (朝日科学新輯) 朝日新聞社

大間 知 薦

民俗 神津の花正月

六人社 昭一八

セメント 前後編 (春陽堂文庫)

春陽堂

大村 欣一 明三五 一文

* 支那政治地理誌 上下 丸 善 大二四

支那の実相

東亞同文会

大宮健太郎 大六一 一文

英單語と熟語 尙文堂

岡崎 文夫 明四二 一文 文博

* 魏晉南北朝通史 弘文堂 昭七

岡田 克弘 昭四 理甲

* 生殖細胞の事放出及び受精に關係する作用物質

(生物学の進歩 第一) 共立出版 昭一八

岡田 一男 昭三 理甲

* 球微分幾何学 (高見 稔 共著) (岩波講座数学) 昭九

* 擬似微分幾何学 (高見 稔 共著) (岩波講座数学) 昭八

* 代数幾何学特論 (小島俊二 共著) (岩波講座数学) 昭九

岡本 安章 大一二 文甲

* フォールディング (英米文学 詳傳叢書) 研究社 昭一〇

小川 政修 明三一 三 医博

細菌学概論

西洋医学史 日新書院 昭一八

* 西洋医学史 眞理社 昭二三

西洋医学史綱要 学術書院 昭二三

住血原蟲論 大七

泰西医学史 古代・中世編 第一書房 昭六

小倉 正恒 明二七 一法

五千卷堂集 (校刊) 全六冊 昭一〇

星巖集 註 (校刊) 全八冊 上海 昭四

* 古代支那史要 弘文堂 昭一五
* 支那史概説 上 弘文堂 昭一四
支那の政治と民族の歴史 (佐々久共著) 弘文堂 昭二三
* 司馬遷 (教養文庫) 弘文堂 昭二三
新制東洋歴史教科書

岡崎 文規 大七 一文 理博
印度の民俗と生活 千倉書房 昭一七
結婚と人口 千倉書房 昭一六
國勢調査論 第一出版 昭二三
國民生活と國民体位 千倉書房 昭二三
職業統計問題研究 千倉書房
人口統計研究 有斐閣 大一一
人口統計に於ける諸問題 立命館出版部
戦争と生活 河出書房 昭二三
数と社会 栗田書店 昭一八
統計研究文獻 有斐閣 大一一
統計的中數値論 有斐閣
統計的中數値論 一元社 昭一八
戰時下の乳幼児児童保護問題 栗田書店 昭一九
* 平均の理論と應用

小笠原秀實 明四〇 一文

矛盾を切る 弘道閣

小野澄之助 明四〇 二理 理博

*計測論 (物理実験学 第二) 河出書房 昭一四

*學單位及測定論 (輾近高等物理 化学講座 一) 共立社 昭五

小原度正 大八 一文

*自修独逸語 タイムス出版社 昭一七

*中級自習独逸語学 福 晉 館 昭二三

垣内松三 明三三 一文

基本語彙学 文学社 昭二三

形象論序説 晩翠会 昭一三

小学國語本形象と理會 一三 文学社 昭九

言語形象性を語る 國語文化研究所 昭一五

*國語教育科学概説 (獨立國語教育科学第一) 文学社 昭九

*國語指導論 (一) 第二 〃 〃

*國語教材論 (一) 第三 〃 〃

*國語學習論 (一) 第四 〃 〃

*國語教育論史 (一) 第五 〃 〃

*國語陶冶論 (一) 第六 〃 〃

*國語解釈学概説 (一) 第七 〃 〃

*國語表現学概説 (一) 第八 〃 〃

*國語教育史 (一) 第九 〃 〃

*國語教育の諸問題上 (一) 第一〇 〃 〃

*國語教育の諸問題下 (一) 第一〇 〃 〃

*國民精神と國語教育 (一) 第一二 〃 〃

國語教育講話 同志同行會 昭一〇

國語教授学 成美堂

國語教授の批判と内省 不老閣書店

*國語の新生 (新國語教育選書) 非凡閣 昭二二

國語の力 不老閣書店 大一一

*國文学書目集覽 (毛利昌共編) 明德堂 昭五

國文学大系 (近代文学) (編) 大二三

辭鑒 (編) 三学社 昭一四

實踐解釈学考 不老閣書店 昭八

兼用女子の玉づき 精華堂

徒然草 (編) (古典叢刊) 文学社

垣内先生 日本文学論攷 文学社 昭二三

還曆記念 日本文学論攷 文学社 昭二〇

日本文学形象論 (日本文学体系講座第二) 文学社 昭二〇

日本文学思潮論 (一) 第二 〃 〃

日本文学系統論 (日本文学体系講座第三) 文学社 昭二〇

日本文学原論 (一) 第四 〃 〃

文藝哲学 (岩波講座國語教育) 岩波書店 昭二二

文学新生の研究 不老閣書店

文学理論の研究 不老閣書店

読方教育の現象学的研究 明治図書

笠森周護 明四五 三 医博

産科手術学 金原商店

片岡安 明二七 二工 工博

*現代都市之研究 建築工藝協會 大五

*世界建築図 大五

都市計画 (吉田信武共著) (綜合工學全集) 昭一〇

加藤二郎 大一一 文乙

先生ごころ 勤草書房 昭二三

加藤完治 明三八 一文

決戦下の食糧増産 朝日新聞社 昭一九

皇國農民精神 週刊産業社 昭一六

日本農村教育

*農と日本精神 千歳書房 昭一八

訪欧所感 第一次 地人書館 昭一七

訪欧所感 第二次 地人書館 昭一七

門脇願珠 明三九 一文

The Rising Readers. 大日本図書

金子健二 明三五 一文

アメリカ文化史 弘文社 昭二二

印度 湯川弘文社 昭一七

*馬のくしやみ 積善館 大一一

英語発達史 健文社 昭七

*英國世相史 宝文館 大一一

英國自然美文学の研究 泰文堂 昭四

英吉利中世紀物語詩集 (訳註) 健文社 昭五

英吉利ローマ七賢物語 (訳註) 健文社 昭五

*カンタベリー物語 (チョーサー作) 訳ふもと社 昭二三

*言葉の研究と言葉の教授 宝文館 大一一

俳人遺墨 湯川弘文社 昭一八

*北欧の海賊と英國文明学 研究社 昭二

鏑木徳二 明三七 二農 林博

農林業 炭酸肥料講話 大一一

森林の生理 日本評論社 昭五
森林肥料論 日本評論社 昭七
森林立地学 養賢堂
本材材積表木取法 養賢堂

鎗木外岐雄 明四五 二理 理博
*自然科学概論 山海堂 昭七

上岡市太郎 明二八 一文
実業教育

上村邦良 明四三 一文
近代思想と宗教 警醒社

龜谷凌雲 明四二 一文
十 字 架
念佛より基督へ

河合良成 明四〇 一法
取引所講話 二西社 大二五

河野元三 明二九 一文
*浅野長政公傳 大元
西洋歴史講義 上下 芳流堂

岸 重次 明三三 一文
*Hearn's Lectures on Tennyson com by S. Kishi.

北村教嚴 明三〇 一文
大乘起信論綱要
法 悅 錄 山喜房佛書林
法 緣

北村喜八 大一一 一法
赤い紛碎機 (モルナアル作) 訳 近代社
朝から夜まで (カイゼル作) 訳 新潮社 大二三
アンナ・クリステイ (オニール作) 訳 近代社
偉大な神ブラタン (シ) 訳

一万二千 (フランク作) 訳
ウオリン夫人 (シヨオ作) 訳
美しき家族 (世界戯曲全集 六) 訳
海の呼声 (日本戯曲全集五〇) 文園社
*演出入門 霞ヶ関書房 昭二二

*こころの歌 (歌集) 血襦 社 大九
ガッ ツ (カイゼル作) 訳 近代社
硝子の靴 (モルナアル作) 訳
世界戯曲全集 三

*東洋歴史講義 上下 芳流堂 明三八―三九
*蓬生遺藁 秀英舎 明三四

川島 弘 大一一 文乙
*動物学 (他四名共著) 養華房 昭一二

河田龍夫 (高橋) 昭五 理甲 理博
*数理統計学概論 学術図書 昭二三

川村安太郎 大一二 文甲
*表象の内容と対象 (トワルドウスキー著) 訳 岩波書店
(哲学論叢 二二〇) 昭四

神田正悌 明三三 二理
*実験植物学講義 (神田誠治郎共著) 上 弘道館 大七
*観察植物学講義 中 弘道館 大七〇

*性論 (阿部余四男共著) 中ノ補遺 大一一
*両性論 岩波書店 大二三

及能謙一 明二七 三 医博
*養便学 (三浦謙之助共著) 克誠堂

菊池靖雄 大一一 文甲

*北陸文学 (編) 第一至第二 北陸文学社 昭三―四
*歌集憶ひ出の丘 東京堂 大一二

キャンディタ (シヨオ作) 訳 近代社
狂人を守る三人 (日本戯曲全集五〇) 春陽堂

銀の函 (コオルズワアジ作) 訳 近代社
鯨 (オニール作) 訳

クラウディウス (カイゼル作) 訳
現代の歐洲演劇 (フナガノ著) 訳 昭六
皇帝ジョウンズ (オニール作) 訳

*幸福への意志 (マニオン作) 訳 新潮社 昭四
自然の女 (シンクレア作) 訳 近代社
死の舞踏 (グアイスマン作) 訳 近代社

*白牙 (ロンドン作) 訳 新潮社 昭六
シヨオ集 (シヨオ作) 訳 近代社
人生にひしがれて (ハムスン作) 訳

聖ジョウン (シヨオ作) 訳
脱走 (ゴオルズワアジ作) 訳
旅路の終り (世界戯曲全集 七) 訳

地獄 (シンクレア作) 訳
地平線の彼方の毛猿 (オニール作) 訳 原始社 大二五
独逸男ヒンケマン (トルレル作) 訳 新詩社 大二三

都市覗き絵 (日本戯曲全集五〇) 春陽堂

長い帰りの船路 (オニール作) 訳 新潮社 大二三
 何でも無い事 (グラスベール作) 訳 近代社
 二階の男 (シンクレア作) 訳 シ
 *人と超人 (ショウ作) 訳 新潮社 昭三
 ピムさんの御通過 (ミルン作) 訳 近代社
 ブランコ・ポスネットの暴露 (ショウ作) 訳 近代社
 近代社
 平 行 (カイゼル作) 訳 近代社
 北 極 行 (世界戯曲全集一七) 訳 近代社
 郭 公 (マクス作) 訳 春陽堂
 マクトナウの妻 (世界戯曲全集一〇) 訳 近代社
 マクロボウロス家の秘術 (チャベク作) 訳 近代社
 緑の鸚鵡 (シュニッツレル作) 訳 近代社
 みんな尤もだ (ピランデルロ作) 訳 シ
 蟲の生活 (世界戯曲全集三八) 訳 シ
 モナ・リザの微笑 (ベナベンテ作) 訳 シ
 山羊の唄 (ヴェルフェル作) 訳 シ
 *横つ面をはられる「彼」 (アンドレエフ作) 熊沢復六共訳
 新潮社 昭四
 夜鳴る太鼓 (ブレヒト作) 訳 近代社
 ロミオとジュリエット (シェイクスピア作) 訳 近代社

北村 澤吉 明三一 一文 文博
 漢文法助字要訳 中 文館 昭一一
 檢案 簡明大字典 中 文館
 *学 庸 精 義 富 山 房 昭一七
 *教育勅語根本原義 宝 文 館 昭六
 *五山文学史稿 富 山 房 昭一六
 西 游 雜 詩 富 山 房 昭四
 周易十翼精義 富 山 房 昭一三
 *儒 学 概 論 商務印書館
 *儒 学 概 論 関 書 院 昭五
 *儒 学 要 義 昭七
 *儒教道德の特質と其の学説の変遷 関 書 院 昭八
 *勅 語 鑽 仰 三 友 社 昭一〇
 標準漢和辞典 (監修) 中 文 館 昭一一
 頼山陽先生の眞骨頭 (頼山陽研究叢書 第二) 昭八
 木田 芳三郎 明三八 二農 農博
 肥料製造学 上 成 美 堂
 紀 平 正 美 明三〇 一文 文博
 行 と 科 学 (新國民文化叢書) 目黒書店

*行の哲学 岩波書店 大二二
 皇國史觀 皇國青年教育協会 昭一八
 國体と帝國憲法 日本文化協会 昭一一
 國体と哲学 理想社 昭一五
 *古 神 道 (岩波講座哲学三) 岩波書店 昭七
 三願轉入の論理 森江書店 昭二
 *自 我 論 大同館 大五
 自証過程としての歴史 日本文化協会 昭二二
 訂 敗 人 格 の 力 大同館 大八
 *知 と 行 弘文堂 昭一四
 *哲学概論 岩波書店 大五
 天兵に敵なし 至文堂 昭一八
 *なるほどの哲学 畝傍書房 昭一七
 *なるほどの論理学 國民精神文化研究所 昭一七
 日本人の進路 昭五
 日本精神 岩波書店 昭五
 日本精神と生死觀 (紀平正美他九名共著) 有精堂 昭一八
 日本精神と弁証法 昭七
 日本精神に関する一考察 昭八
 *認 識 論 岩波書店 昭一一

葉 隱 講 話 (紀平正美他九名共著) 昭一八
 *無門関解釈 岩波書店 大七
 萌え騰る日本 明世堂 昭一九
 論理学及哲学の基礎概念 山海堂 昭三
 論理学綱要 (エフダグーシ著) 大同館 大八
 最新論理学綱要 弘道館 明四〇
 木 村 榮 明二二 二理 理博
 *Preliminary Result of the Observations made at
 Abelaide International Latitude Station during
 the Period 1931. 64—1932. 97.
 *Preliminary Result of the Observations made at
 Adelaide International Latitude Station during
 the Year 1933.
 *Preliminary Result of the Observations made at
 Adelaide International Latitude Station during
 the Year 1934.
 *Provisional Result of the Work of the International
 Latitude Service in the North Parallel + 39°
 8' during the Period September 6, 1922-March
 6, 1924.

- *Provisional Result of the Work of the International Latitude Service in the North Parallel+39° 8' during the year 1932.
- *Provisional Result of the Work of the International Latitude Service in the North Parallel+39° 8' during the Year 1934.
- *Provisional Result of the Work of the International Latitude Service in the North Parallel+39° 8' during the Year 1935.
- Preliminary Result of the Observations made at Adelaide International Latitude Station during the Year 1935.
- Preliminary Result of the Observations made at La-Jata International Latitude Station during the Period 1934.64—1935.97.
- *Report upon the Work of the International Latitude Service during the Period 1930.0-1933.0.
- *Results of the International Latitude Service from 1922.7 to 1931.0. Mizusawa. 1935.

- *Results of the International Latitude Service from 1922.7 to 1935.0. Mizusawa. 1940.
- *Soundings with Pilot Balloons on clear Nights Concurrently with the Latitude Observations during the Period 1922-1925. Mizusawa.
- 木村 武 夫 昭二 文甲
後村上天皇の聖蹟 柳原書店 昭一八
- 木村 又左衛門 大二 理甲
靜力学構造物の應力計算
- 木村 増太郎 明三八 一法 経博
*外國爲替の基礎知識 刀江書院 昭八
*各國統制經濟に関する調査 東京商工会議所 昭一一
支那南洋 に対する企業貿易論 巖松堂
*現代支那事情の研究 大阪屋号 昭三
支那財政の真相と其革新策について 大一一
(啓明会紀要 三号)
- *支那財政論 大阪屋号 昭三
支那の經濟と財政 大阪屋号

- 支那の砂糖貿易 丸 善
- 事変下の支那經濟 金融研究會 昭一六
- 事変下の支那金融及金融機關 金融研究會 昭一六
- 戰時日本貿易論 改造社 昭一三
- 中華民國及滿洲國貿易統計表 東京商工会議所 昭一一
- 中小工業の將來 日本青年會館 昭一一
- 東亞經濟事報 昭和十六年版 改造社 昭一六
- 東亞經濟政策 千倉書房 昭一五
- 東亞新經濟論 投資經濟社 昭一六
- 南方圈の經濟鳥瞰 (監修) 兵庫縣興亞貿易商會 昭一六
- 日滿支經濟の基礎知識 大阪屋号 昭一五
- 日滿支經濟論 時潮社 昭一一
- 邦品に対する海外商業會議所の意見 東京商工会議所 昭一一
- 桐 生 政 次 明二八 一法
- 現代文明の批判
- コロンブス (世界歴史譚一〇〇) 博文館
- 錢屋五兵衛 (少年讀本八) シ
- 橋本左内 (少年讀本三三) シ
- 久 保 護 躬 明四一 三 医博

- 臨牀耳鼻咽喉科学 (久保猪之吉著) 校訂 克誠堂 昭一五
- 久 保 田 圭 右 明三二 二工
- 通画用遠近法 丸 善
- *高等平面図学 丸 善 大二
- *高等立体図学 上・中・下 丸 善 明四一
- 製図者必携 丸 善 大二
- 平面用器画法 (女子) 丸 善 大二
- 平面用器画法 (中等) 丸 善 大二
- 立体用器画法 (女子) 丸 善 大二
- 窪川 鶴次郎 大一一 在学
- 現代文學研究 九州評論社 昭二三
- 現代文學思潮 三笠書房 昭一七
- *現代文學論 中央公論社 昭一四
- 再說現代文學論 昭森社 昭一五
- 人間中心の文學思想 解放社 昭二二
- *文學・思想・生活 自選評論集 新星社 昭二三
- *文學と教養 昭森社 昭一七
- 文學の思考 河出書房 昭一五
- 文學の扉 高山書院 昭一六

窪見 温 明三六 二工

*植物化学分析法 一名植物成分検出法 同済号書店

大六

藏田 貞造 明三四 三

美術解剖学

倉地 興志 昭三 理乙 医博

眼とビタミン 日本医書 昭三二

慶松 勝左衛門 明三一 三 藥博

*実化学工業 (西田博太郎共編) 全三卷
化学工業発行所 大六

*製造化学図譜 日本薬報社 大五

額 額理一郎 明四一 三 理博

*植物水分生理 日本評論社 昭七

*生物植物学 明文堂 昭一四

高坂 正顯 大九 一法 文博

*一般歴史参考・其他 (木村素衛共訳) 岩波書店 大五
(カント著作集 一三)

*カント (西哲叢書一五) 弘文堂 昭一四

*カント解釈の問題 弘文堂 昭一四

*カント学派 弘文堂 昭一五

*象徴的人間 弘文堂 昭一六

*真理の所在 秋田屋 昭二三

*真理への意志 (ヴァインデルバンド著) 訳 岩波書店

(哲学論叢 七) 昭三

*神話 一 解訳学的考察 岩波書店 昭一五

*スピノーザの哲学 玄林書房 昭二三

*政治・自由及び運命に関する考察 弘文堂 昭二三

*世界史的立場と日本 (他三名共著) 中央公論社 昭一八

哲学の慰め 勁草書房 昭二三

西田幾多郎先生の思想と生涯 弘文堂 昭二一

西田幾多郎先生の追憶 國立書院 昭二三

人間学と西田哲学 長坂利郎家 昭一〇

実存哲学 (アテネ文庫) 弘文堂 昭二三

続実存哲学 (アテネ文庫) 弘文堂 昭二三

*民族の哲学 岩波書店 昭一七

*歴史的世界 一 現象学的試験 岩波書店 昭二二

*歴史哲学序説 岩波書店 昭一八

歴史哲学と政治哲学 (教養文庫) 弘文堂 昭一四

鴻巣 隼雄 昭八 文乙

*日本書紀の成立 (日本文学論大系二) 雄山閣 昭一七

*日本書紀の編纂に就いて (日本諸学研究一) 刀江書院

昭一四

*万葉人と自然・國家 (日本諸学研究四) 刀江書院 昭一五

國府 種徳 明二七 一法

皇族金枝玉葉帖 実業之日本社

*犀東文集 (時文叢書) 隆文館 明四二

銭屋五兵衛 春秋社 明三〇

神武天皇鳳蹟志 春秋社

*龍吹鶴語 博文館 明三三

小木曾三郎 大一一 文乙

*あけのそぶ船 一 木小曾三郎遺稿集 一 (大河良一編) 同刊行会 大五

越澤 渦満 明三七 二農

工業 醫藥製法 博文館

工業 衛生医典 大倉書店

工業 消毒薬剤製法 博文館

毒物化学 一名アルカロイド化学 一 博文館

小島 伊左美 明二八 一文

*独逸語教本 鳴海屋書店 明四四

独逸時事読本 南江堂

註解独逸新読本 南江堂

邦人用独逸文法教科書 大倉書店

獨逸文 獨逸文法教科書 大倉書店

駒井 重次 大六 一法

法人の税務 東洋経済新報社

小松 勇作 昭八 理乙 理博

血液型の遺傳とその應用 (医等選書四) 学術書院

昭二三

*等角写像論 上 共立社 昭一九

*変分学 (東海数学叢書一九) 東海書房 昭二三

*無理数と極限 (東海数学叢書一七) 東海書房 昭二三

小南 又一郎 明三七 三 医博

遺傳と結婚・斷種と優生 (岸松郷共著) 京都印書館

昭二三

飯酒と犯罪及禁酒 (土屋榮吉共著) 日本評論社 昭五

搜索用法医学・犯罪心理綱要 カニヤ書店 昭一三

齒科法医学講義 京都印書館 昭二一

実用法医学 南江堂 昭一三

実用法医学講義 南江堂 昭二二
実例犯罪心理講話並証人・犯人の訊問要項

人文書院 昭九

実例法医学と犯罪捜査実話 人文書院 昭六

法医学短篇集 (近代犯罪科学全書) 昭八

法医学と犯罪研究 カニヤ書店 大一一四

小山龍之輔 明三七 一文

文藝鑑賞新講 時潮社

近藤正造 大一一四 理甲

紀行「アフガン記」

齋藤賢道 明三〇 二理 理博

*應用菌学汎論 博文館 大元

*工業用植物纖維 博文館 明四二

*東洋産有用醗酵菌 博文館 明四二

*醗酵菌類検査便覧 丸 善 昭一八

*醗酵生理学 丸 善 昭一三

*醗酵微生物学 丸 善 昭一八

齋藤重保 明三七 一文

御大礼の話

佐伯重治 大六三 医博
輸血実施法 南江堂

坂本健一 明二八 一文

通俗世 亞米利加合衆國 博文館

通俗世 英吉利帝國 博文館

通俗世 伊太利亞史 早大出版部 明三六

*外國地名人名辭典 宝文館 明三六

*社会文学辭典 宝文館 明三六

参 西洋大歴史 宝文館

西洋歴史集成 (青木武助共著) 隆文館

世界近世史 博文館 大三

世界最古史 (ヘロドトス著) 隆文館 大八

*世界史 上下 博文館 明三四—三六

世界史年表 博文館 大三

通俗世 獨逸帝國 博文館

通俗世 佛蘭西共和國 博文館 明四四

*ヘロドトス 博文館 大三

*マホメット (世界歴史譚 六) 博文館

*蠡舟無名句集 昭一三

通俗世 露西亞帝國 博文館

*羅馬盛衰史 (ギボン著) 訳 隆文館 大八

*羅馬中興史 (ギボン著) 訳 隆文館 大八

相良守峯 大六一 一文

イタリヤ紀行 (ゲーテ作) 訳 岩波文庫

*イタリヤの旅 (ゲーテ作) 訳 (ゲーテ全集) 育生社 昭二三

美しき魂の告白 (ゲーテ作) 訳 羽田書店 昭二三

グリム傑作童話集 一・二・三 羽田書店

*三部 金洋皮 (グリムパルワエル作) 訳 岩波書店 大一一五

ドイッ敘事詩研究

中世敘事詩研究 富士出版 昭二三

ジャクリースと日本人 (ヤコブ作) 訳 岩波文庫

*聖ドミンゴ島の婚約 (クライス作) 訳 郁文堂 大一一五

*独和辞典 (木村謹治共編) 博文館 昭一五

研究社独和辞典 研究社 昭二三

ドイツ人の愛 研究社

ドイツ人の心 白水社 昭一六

中高ドイツ文典綱要 郁文堂

*ドイツ文章論 岩波書店 昭一六

*童 心 (ルマン・ヘッセ作) 訳 雄山閣 昭二三

ニーベルンゲン宝

漂泊の魂クスルプ (ヘルマン・ヘッセ作) 訳 岩波文庫 昭二三

*フアウスト (ゲーテ作) 訳 (ゲーテ全集) 育生社 昭二三

*マリア・スチュアート (シルレル作) 訳 岩波書店 昭三

憂愁夫人 (スーデルマン作) 訳 岩波文庫

佐久間兼信 明三四 三 医博

安産読本 婦人之友社 昭四

産婆学教科書 南山堂

産婆学独習書 南山堂

櫻田常久 大八 一法

鏡 人 (ダエルフエル作) 訳 近代社

死の舞踏 (ヴァイスマンテル作・北村喜人共訳) 近代社

探求者 近代社

最近六ヶ年 独逸語入試問題解答 春陽堂 昭二三

官立大等 独逸語入試問題解答 尙文堂

のつぼのユタレ (ハウプトマン作) 訳 近代社

フランチェスカ (エデキント作) 訳 近代社

ベリンデ (オイレンベルグ作) 訳 近代社

世界戯曲全集一五 世界戯曲全集一六 世界戯曲全集一七 世界戯曲全集一八

リド附近の決闘 (レエフィッソ作) 訳

佐々木惣一 明三二 一法 法博

*憲法改正断想 甲文社 昭三二

憲法行政法演習 日本評論社

新憲法と解説 (他二名共著) 京都日々新聞社 昭二二

*隨筆集 疎林 甲文社 昭三二

日本行政法原論 有斐閣

*日本行政法論 総論 各論 有斐閣 大一一

*日本憲法要論 金刺芳流堂 昭五

普通選挙 岩波書店

*我が國憲法の独自性 岩波書店 昭一八

佐々木直次郎 大一一 文甲

サロメ (ワイルド作) 訳 岩波文庫

宝島 (ステイヴンソン作) 訳 岩波文庫

二都物語 上・中・下 (ディッケンズ作) 訳 岩波文庫

ボオ全集 (訳) 第一書房

第一 輕氣球・虚報

第二 群集の人

第三 偷まれた手紙

志田義秀 明三二 一文 文博

*一茶一代物語 (物語日本文学二二) 至文堂 昭一一

*奥の細道・芭蕉・蕪村 修道館 昭一六

*花鳥中魚百語評解 辰文館 明四五

植物和名漢字集 北陸館

日本の傳説と童話 大東出版社 昭一七

*日本文学植物美観 晴光館 明四一

*日本類語大辞典 (芳賀矢一共編) 晴光館 明四二

*芭蕉一代物語 (物語日本文学二〇) 至文堂 昭一一

*芭蕉前後 日本評論社 昭三二

*芭蕉展望 日本評論社 昭二一

*芭蕉図録 (藤井乙男・新村出 共編) 靖文社 昭一八

*芭蕉の点を芭蕉の傳記の研究 河出書房 昭一三

*芭蕉俳句の解釈と鑑賞 至文堂 昭一五

俳諧歳時記 冬之部 改造社

俳文学選 明治書院 昭三二

俳文学の考察 明治書院

七部集猿蓑評釈 大同館

芭蕉俳句の解釈と鑑賞 後篇 至文堂 昭三二

篠原一慶 明三九 一文

第四 妖精の島

第五 黒猫

笹木 實 大八三 医博

口蓋扁桃腺摘出法 南江堂 昭一五

佐々波與佐次郎 明三九 一法

檢察提要 有斐閣

日本檢察法論 上・中 有斐閣 大二四

佐藤家 太 明二九 一法

商業法規教科書

佐藤信安 明二九 一法

日本監獄法

彼得大帝 (世界歴史譚 一二) 博文館

澤木欣一 昭一七 文乙

*句集 雪 白 青陵社 昭二九

澤田省三 昭一一 文甲

農地制度の解説 青江社 二二

重見道之 明二九 二工

應用機械学 博文館

*工業工業数学 博文館 明三七

*朝きよめ 光栄社 明四一

*イングリッシュ・カンヴァーゼーション (スベート共著) 金港堂 大二

*英和熟語辞典 (岡本靖逸共編) 富山房 昭三

*註英文和訳法 新進堂 大一一

*こころ (大谷鏡石他四名共作) 北陸館 大二

篠原雄 大四 二理

*科学哲学序説 (ベンダヤミン著) 訳 開発社 昭一九

*現代の自然科学 (アレン等著) 訳 恒星社 昭一五

*統一科学論集 (ダイー・シカゴ学派著) 訳 創元社

昭一七

柴垣和三雄 大一一 理甲 理博

*実践数学 丸善 昭二一

*実用解析 (数学集書 七) 河出書房 昭三三

*実用数学便覧 (他四名共著) 培風館

*常微分方程式の数値解法 岩波書店 昭一七

*数値積分法 (應用数学講座九) 河出書房 昭一八

*100%函数表 盈科舎 昭二〇

*丸善対数表 (編) 丸善 昭一八

柴野和喜夫 大一三 文乙

米穀法規 日本評論社
農業經營の革新と有畜農業

島村他三郎 明三〇 一法

*行政法要論 (総論) 巖松堂 明四四
行政法要論 (各論) 巖松堂 昭五
最新行政法綱要 松華堂 昭三
*實用新案法釈義 金刺芳流堂 明三八
*地方行政法要論 金刺芳流堂 明三七

清水徳太郎 明三七 一法

近最 欧米各國事情 三省堂 昭八

清水 澄明二四 一法 法博

井上明府遺稿 (編) 三秀舎 大九
憲法及行政法講義 金港堂 明四〇
國法学一、憲法篇 清水書店 明三七
國法学二、行政篇上ノ上下 清水書店 明四三
市制町村制正義 有斐閣
帝國憲法大意 清水書店 大二三
帝國憲法の話 実業之日本社 大二三

帝國公法大意 清水書店 大三四

帝國公法大意(第二分冊)行政法 清水書店 昭二

日本行政法 松華堂 昭一〇

日本行政法大意 清水書店 大二三

明治天皇御製謹話(穂積重遠共著) 社会教育協会 昭一〇

清水與七郎 明三八 二工

電氣磁氣測定法測定器具 裳華房

清水與三郎 明二六 二理

實驗高等化学講義 上・中 東洋圖書 昭五・七

下田光造 明三九 三 医博

最新精神病学 (松田直樹共著) 克誠堂 昭七

精神衛生講話 岩波書店 昭一七

眞保紀一 大三 二藥

要注射藥調製法 南山堂

調劑学 南山堂

神保成吉 大五 二工 工博

電氣磁氣測定 共立社

新明正道 大七 一法

イデオロギーの系譜学 第一部 昭八

オーギュスト・コント (社会科学の学説叢書) 三省堂 昭一〇

形式社会学論 巖松堂
グマインシャフト 刀江書院 昭一二
権力と社会 大二三
*思想への欲求 三笠書房 昭一六
*實用主義 (廿世紀思想叢書二) 河出書房 昭一三

史的民族理論 岩崎書店 昭二三

社会学 (続哲学叢書五) 岩波書店

社会学 朝日新聞社 昭四

社会学辞典 河出書房 昭一九

*社会学の基礎問題 弘文堂 昭一四

社会学の起源 有恒社 昭二二

社会学要講 弘文堂 昭一〇

社会と青年 潮文閣 昭一八

*社会本質論 弘文堂 昭一七

修正派マルクス主義 鱗書房 昭二三

人種と社会 河出書房

政治の理論 慶應書房 昭一六

知識社会学諸相 宝文館

現代知識社会学論 巖松堂 昭一〇

*デモクラシー概論 河出書房 昭一二

*フアシズムの社会観 岩波書店 昭一一

文化の課題 河出書房 昭一三

*歌ミ トセ (白雨社同人集) 大七

民族社会学の構造 三笠書房 昭一七

杉山産七 大一二 文乙

アンデルセン童話 尙文堂

独和辞典 白水社

杉本俊三 大五 二工

合成樹脂工業圖書

鈴木敏也 明四四 一文

雨月物語 (岩波文庫) 岩波書店

*雨月物語新釈 (歴史名著新訳) 大五

*江戸文学選集 中文館 大二三

*概観日本文学思潮 中文館 大二五

*近世日本小説史 前後 目黒書店 大一一

國文 近世雜文篇 大二三

- *近世日本文学 (日本文学体系講座 一一) 文学社
 國文 近世漫筆篇 大二三
 選書 近代國文学素描 目黒書店
 研究 草枕詳釈 目黒書店 昭二
 國語教育原論 同文書院
 新修國文学史潮 上代・中世編 中文館 昭一五
 近代編 中文館 昭一五
 現代編 中文館 昭一五
 國史 隨筆雜纂篇 大二三
 選書 明治文学選集 中文館 大一二
 渡り鳥 目黒書店
 鈴木庸正 明三三 二工 理博
 輕金屬及輕合金最近の進歩 工業図書
 写真化学 共立社
 瀬川重禮 大八一 文
 *煙れる心臓 (詩集) 森林社
 Paris Version of Quia Amore Langueo.
 Kanazawa. 1934.
 妹澤克惟 大七 二工 工博
 *振動学 岩波書店 昭一一

- 關戸彌太郎 昭七 理甲
 *宇宙線 (科学新書 五二) 河出書房 昭一九
 *宇宙線 (量子物理学 八) 共立社 昭一五
 *宇宙線 (物理実験学 一〇) 河出書房 昭一五
 *宇宙線 (仁科芳雄他三名共著) 岩波書店 昭一六
 *宇宙線 (仁科芳雄他三名共著) 岩波書店 昭一六
 高井悌三郎 昭六 文甲
 常陸國新治郡上代遺跡の研究 桑名文星堂 昭一九
 高倉徳太郎 明三九 一法
 恩寵と召命 長崎書店
 基督的世界觀
 順死者 新教出版社
 聖書の宗教 長崎書店
 高倉全集 長崎書店 昭一一
 第一説 教 (上)
 第二説 教 (下)
 第三聖書研究
 第四論文・講演・思想 (上)
 第五論文・講演・思想 (下)
 第六自傳的文章・紀行・其他

- 高倉徳太郎説教集 昭三一五
 第一 神の愛と神への愛
 第二 祈禱の戦場
 第三 決断の信仰
 *福音的基督教 新教出版社 昭三二
 高木友三郎 明四二 一法 経博
 *海洋世界興亡史 興亜日本社 昭一五
 厚生経済論 日本評論社
 國民経済学 千倉書房 昭一七
 *新体制の経済 第一書房 昭一五
 *生の経済哲学 森山書店 昭一八
 世界三大廣域論と内村鑑三氏 (地政学四)
 世界戦の見透しとわが経済生活 拓南社 昭一六
 *戦後の思想問題 (他六名共著) 第一書房 昭一四
 *戦争・経済・生活 実業之日本社 昭一五
 日本経済の実体 千倉書房
 入門経済学 ダイヤモンド社 昭一六
 高島順吾 昭一七 文甲
 *937世のTITLE終 (詩集) (他二名共作) 二葉屋
 昭一六

- 高瀬武次郎 明三八 一文 文博
 王陽明詳傳 廣文堂
 *易学講話 弘道館 大一一
 註漢文叢書 (他三名共著) 全十二卷 博文館
 *四言教論 洗心洞文庫 大一一
 執齋和歌集 (編) (執齋全集二二) 昭二
 陽明学講話 弘道館 大一一
 *支那哲学史 文盛堂 明四三
 支那文学史上世及中世 (哲学館講義録) 哲学館大学 明三八
 *天泉鼓腹集 洗心洞文庫 昭一〇
 *訂日本之陽明学 文盛堂 明四一
 *三輪執齋 大二三
 楊墨哲学
 *陽明学新論 文盛堂 明四一
 *陸象山 中外出版社 大一一
 老莊哲学 文盛堂 明四三
 高橋堅明 明三一 二理
 *自然科学概説 成美堂 昭一三
 *動物学概説 成美堂 昭五
 *動物学綱要 一高生物教室 明四三

*動物学綱要 成美堂
 *動物心理学年報 第一 生活社 昭九
 *動物の心 (ワッシュバン著 谷津直秀共訳) 裳華房 大七
 高橋信美 明三九 三 医博
 外科総論 吐鳳堂 昭九
 地外科手術書 (鈴木五郎共著) 吐鳳堂 昭六
 高橋 享 明三一 一文
 *韓語文典 博文館 明四二
 李朝儒学史に於ける主理派主氣派の発達 昭四
 李朝佛教 昭四
 高見之通 明三四 一法
 使命録
 新人の生活
 信念の力
 高峰一愚 昭二 文甲
 和歩化学十五講 (ドイツ語文庫) 尙文堂
 高峰 博 大二 三 医博
 兒童の言語教育 良書普及会
 職業読本 教育研究会

性と神経衰弱 大四
 *高峰氏解剖 第一卷 金原商店 大四
 蓄音機教育法 良書普及会
 國語に攝られたる佛教文化 昭一八
 有文堂 大六
 労働心理学 良書普及会
 高安慎一 明三七 三 医博
 温泉の医学 朝日新聞社 昭一八
 温泉療法 (大日本内科全書 第十四卷第三册) 金原商店 昭一四
 温泉療養指針 國際書院 昭五
 高柳眞三 大一一 文乙
 御触書寛保集成 (石井良助共編) 岩波書店
 御触書天保集成 上下 (石井良助共編) 岩波書店
 御触書天明集成 () ()
 御触書宝暦集成 () ()
 徳川時代刑法の概観 (司法資料別冊七)
 瀧田貞治 大一一 文甲
 鵬外書誌 台湾愛書会 昭八
 *西鶴襟襖 野田書房 昭一六

*西鶴襟襖 組 巖松堂 昭一二
 逍遙書誌 米山堂 昭二三
 傳統演劇消談 書物展望社 昭一八
 佛学 始祖 村上英俊 巖松堂
 武井羽次郎 明三九 一法
 女の権利義務
 竹内 健 明三三 二工
 吾人の記憶
 行内謙二 大五一 一法 経博
 アダム・スミス研究 有斐閣
 企業合同論 (リーフマン著) 訳 有斐閣 大九
 企業組織論 (リーフマン著) 訳 有斐閣 昭一一
 経済原論提要 慶友社 昭二三
 思想と経済講義 (アダム・スミス著) 訳 慶友社 昭二三
 *全訳富國論 (アダム・スミス著) 訳 全三卷 有斐閣 大一一
 四ヶ年計画下の独逸鉄鋼業 改造社 昭一七
 竹内時男 大四 二理 理博
 アインシュタインと其の思想 内田老鶴圃 大一一〇

新しい日常科学 昭九
 *宇宙線 三省堂 昭一二
 應用X線分析 (工業物理学四) 内田老鶴圃 昭四
 應用函数論階梯 有象堂 昭一八
 應用微分方程式階程 開成館 昭一七
 解説原子核の物理 昭一五
 *書換へられたる物理学 昭一〇
 誰にもわかる科学辞典 愛之事業社 昭一七
 科学精神講話 昭九
 科学者群像 内田老鶴圃 昭八
 科学千一夜話 青年書房 昭一七
 *科学尖兵 大地社 昭二四
 *科学通信 科学主義工業社 昭二二
 科学の旗印 大地社 昭二六
 科学風土記 帝國教育会 昭一六
 科学物語 (ディーツ著 佐藤益治共訳) 有象堂 昭一六
 *工学物理 有象堂 昭一四
 *最近の物理学 興業会 大一一
 最新物理学通説 東京開城館 昭一一
 *眞空 (工業物理二) 内田老鶴圃 昭三

*四季の物理学 春夏の巻 内田老鶴圃 大二三
 小学趣味の物理学挿話 慶文堂
 *新原子論講話 内田老鶴圃 大一四
 *新統計力学 (工業物理学三) 東学社 昭九
 新物理学夜話 昭二
 新量子力学及新波動力学論叢 開成館 昭一六
 生活の新科学 秋傍書房 昭一五
 世紀の科学 山海堂 昭一八
 戦闘の物理 スペクトルと量子化学 (工業物理学五) 内田老鶴圃 昭五
 測定と図表 (工業物理学六) 内田老鶴圃 昭六
 *ヴェグネル 大陸浮動論 興業会 大一一五
 中学新物理 三・四・五年用 昭七
 電気と物質 内田老鶴圃
 電子波実験とマトリックス (工業物理学七) 内田老鶴圃 昭七
 *電子子 辨 (工業物理学一) 内田老鶴圃 大一一
 百万人の科学 桃山書林 昭二二
 百万人の数学 桃山書林 昭一四

*帝大入試 物理化学難問解 (今景善夫共著) 内田老鶴圃
 文庫参考 昭二
 *物理学夜話 大鏡閣 大一一五
 *理学新風景 三省堂 昭一〇
 *理学新報告 内田老鶴圃 昭二二
 *量子論 (歴史的展覧) 内田老鶴圃 大一一
 竹内松次郎 明四〇 三 医博
 近世細菌学及免疫学 前編 (総論) 金原商店 昭一七
 後編 (各論) 金原商店 昭一五
 近世細菌学及免疫学集習 金原商店 昭一一
 公衆衛生 金原商店 大一一四
 小細菌学 金原商店 昭五
 内科 学下 (他四名共著) 金原商店 昭一四
 アブデルハ上防禦酵素論及検査法 大三
 ルデン氏
 竹田 省 明三六 一法 法博
 *商行 爲法 (現代法学全集三八) 弘文堂 昭六
 *商法 総則 (ノ 三一・三三) 昭五
 商法 総論 有斐閣 大元
 商法 要論 金港堂 大一一五

竹中 繁雄 大一一 理乙 医博
 *理論生理学 九 善 昭一五
 竹村 勘 意 明三五 二工 工博
 機械管易表 (監修) 工業雜誌社 昭六
 竹村 松 男 昭一四 理甲
 *航行運動を安式轉輪の羅針儀の数理的研究
 *考慮に入れた (ゲッケラー著) 訳 昭一八
 竹脇 潔 大一一四 理甲 理博
 *性現象のホルモン学 (生物学集書一) 河出書店 昭二三
 *内分泌の問題 (日本生物学業績三) 北陸館 昭二三
 脳下 重 体 (ホルモンの科学) 青山書院 昭二二
 ホルモン (科学技術叢書) 春陽堂 昭一九
 ホルモンの問題 寧樂書房 昭二一
 多田 不二 大五 一法
 兒童劇人形師の夢 (新撰こども叢書五) 河野成光館
 多田 稔 明三〇 一法
 マリア・テレサ
 日月 紋 次 昭五 理甲 理博
 *電気絶縁とワニス及コムバウド 産業図書 昭二三

谷 安 正 大七 二理 理博
 應用物理学実験 内田老鶴圃
 *可塑性論 (岩波講座物理学) 岩波書店 昭一四
 *塑性実験 (物理学実験四) 河出書店 昭一四
 *実験弾性学 (岩波講座物理学) 岩波書店 昭一四
 *静電場 (應用数学二〇) 河出書店 昭一七
 *電気磁気学 (物理学概説Ⅲ) (菅井準一共著) 岩波書店 昭一一
 谷 友 次 大五 三 医博
 医学微生物学 昭一八
 細菌学 昭九
 「メモ」用微生物検査法 活文堂 昭一七
 田中正 名 明四四 一文
 *海の巡礼者 高松堂 大九
 谷口 吉 郎 大一一四 理甲
 *雪あかり日記 東京出版 昭二三
 谷 野 格 明二九 一法 法博
 カピテン・クツク (世界歴史譚三一) 博文館
 監獄学
 谷山 恵 林 大一一文

宗教哲学 (新銳哲学叢書六) 高陽書院

田花爲雄 大七一法

現代教授思潮 成美堂

田部重治 明三八一文

青葉の旅・落葉の旅 第一書房 昭一六

ド・クインシー阿片常用者の告白 (訳) (岩波文庫)

昭二二

イーノックアーテン (テニス作) 訳 (新潮文庫)

新潮社 昭一五

シモンズ歐洲文藝復興史

紀行と隨筆

北アルプス (能沢復六共著) 昭一八

獄中記 (ワイルド作) 訳 新潮社 昭一五

心の行方を追ふて 朱雀書林 昭一九

混沌より統一へ

山茶花 七丈書院 昭一八

*四季の隨想 松和書房 昭二三

詩と斷章 昭一七

スキーの小旅 大村書店

旅路 青木書店 昭一八

ダンテとプラトーンとの愛の理想

中世歐洲文学史 第一書房 昭七

峠と高原 大村書店 昭六

日本アルプスと秩父巡礼

涯しなき道程 第一書房 昭一一

ふるさとの山々 第一書房 昭一六

文藝の理念 八雲書店 昭二二

*文藝復興 (ベーター著) 田部重治訳 北星堂 大四

*ベーター文藝復興 (訳) 岩波文庫 昭二二

ベーター論集 (訳) 岩波文庫

萌え出づる心 第一書房 昭一四

山を語る 大村書店

山路の旅 新潮社 昭二三

山と溪谷 第一書房

山と高原の旅 朋文堂 昭一四

山への思慕 第一書房 昭二〇

山ゆく心 養徳社 昭二三

ワーズワース詩集 (撰訳) 岩波文庫

田保橋 潔 大七一文

*近代日本外國關係史 刀江書院 昭五

遠山 照 明三〇 一法

馬術ボートレス

徳田秋聲 (徳田末雄) 明二二 在学

哀史物語 新潮社

女ごころ 隆文館

仮装人物 中央公論社 昭二三

会話文範 新潮社

かこひもの 隆文館

乾いた唇 明石書房 昭一五

寒の薔薇 東京堂 昭二三

勳章 中央公論社

紅葉読本 三笠書房

心と心 朝野書店

心の勝利 砂子屋書房 昭一五

小説三人叢書 (小栗風葉共著) 國民書院

*秋声全集 全十五卷 非凡閣 昭二二 一二

人物描写法 新潮社

絶縁 春陽堂

地中の美人 嵩山社

血薔薇 隆文館

近代日支關係の研究 (京城大学法文学部)

明治外交史 (岩波日本歴史 九) 岩波書店 昭九

長連恒 明二九 一文

日本語学史 博文館

*散文 美文辞彙 (物集高量共編) 博文館 明三九

明治作文大鑑

六女集補遺 (國歌大系二二)

三十六人集補遺 (〳〵〵〵)

長守善 大一 一文

概説アメリカ政治経済史 日本評論社 昭二三

英國經濟の衰退過程 日本評論社 昭一五

欧米社会主義と労働組合 廣文社 昭二三

經濟的財價値の基礎理論 (岩波文庫)

ナチス経済建設

鶴見左吉雄 明二九 一法

*日本貿易史綱 巖松堂 昭一四

噂道文藝 明三九 一法 法博

日本民法要論 第一卷総論 大九

淵落

隆文館

*徳田秋声集(現代日本文学全集一八) 改造社 昭二一

*徳田秋声集(明治大正文学全集二五) 春陽堂 昭二一

*徳田秋声集(三代名作全集) 河出書房 昭一七

徳田秋声篇(現代長編小説全集一〇) 新潮社 昭四

光を追ふて 新潮社 昭一四

古里の雪 白山書房 昭三二

病恋愛 隆文館

老眼鏡 高山書院 昭一五

土肥淳一郎 昭二 理甲 医博

*皮膚及性病学 I皮膚編 II性病編 (土肥章司)校訂 日本医書出版 昭二一

高田 彬 大七 一文

アメリカ国民文学評論 瑞書房 昭三二

近代英文学雑考 健文社

胡麻と百合講義 健文社

ねぢの廻轉 岩波文庫 岩波書店

文学趣味その養成法 健文社

戸水 昇 明四四 一法

*一官吏の生活から 台湾通信協会 大二三

この一二年 九如山房 昭二

電波に乗せて 台湾放送協会 昭一四

友田 鎮三 明二四 二理

新物理学実験法 開成館

富永 正義 大三 二工

河川 岩波書店 昭一七

利根川治水計画 内務省関東土木出張所

戸村 義保 明三〇 一文

*蓬生遺稿 (河野元三編) 秀英会 明三四

永岡 堯 明三一 二農

甲種農工 商業学校用 國語漢文読本

中大路 正雄 明二九 一法

行政警察法

中川 善之助 大七 一法

*女の一生 行人社 昭三二

*家族制度全集 史論篇(全二卷)河出書房 昭二一 二三

結婚篇 (婦人公論大学全集) 中央公論社

*現代民法の基礎理論 大明堂 昭一八

*古代家族 (クランジ著) 訳弘文堂 昭二

*妻妾論 (隨想集) 國立書院 昭三二

*戦後の思想問題 (他六名共著) 中央公論社 昭一一

*相続法 第一分冊 有斐閣 大一一

*親族相判例総評 一二三 岩波書店 昭二一 一五

*政治教養読本 河北新報社 昭二一

*日本親族法 昭和十七年 日本評論社 昭一八

*法学協奏曲 河出書房 昭一一

*略身分法 岩波書店 昭五

*身分法の基礎理論 河出書房 昭一四

*身分法の総則的課題 岩波書店 昭一六

*民法III 親族・相続 岩波書店 昭八

民法 大綱 上・中 日本評論社

雪やけ・日やけースポーツ随筆 河出書房 昭一五

中川 秀次 大九 三

大峰山脈眞溪谷 朋文堂

中川 詮吉 明二八 二理 理博

解析幾何学 (高等数学講座四) 弘道館 昭四

*新解析幾何学教科書 (竹内端三共著) 富山房 大九

近世総合幾何学演習 (演習高等数学講座七) 共立社 昭九

高等立体幾何学通論 共立社

*最新代数教科書 上下 富山房

*最新平面幾何学教科書 富山房

*平面解析幾何学 富山房 大一一

*平面解析幾何学演習 共立社 昭一三

平面立体解析幾何学 (演習高等数学講座六) 共立社 昭九

微分学と積分学 (高等数学講座五) 弘道館 昭四

*立体解析幾何学 (統轄近高等数学講座七) 共立社

中川 友次郎 明二七 一法

神社法令講義

中川 友長 大一一〇 一法 経博

國富及國民所得 東洋出版

中田 覺五郎 明四二 二農 農博

作物病害図編 養賢堂

作物病害教科書 中上 秀雄 大九 一法

*二十三年の夢 (中土捨次郎編)

長沼賢海 明三七 一文

英雄の信仰

実業之日本社

研究惠比須と大黒

明治書院

*國民思想と國史

大鑑閣 大八

宗教一揆

(岩波日本歴史一七) 岩波書店 昭一〇

神國日本

教育研究会

*南蛮文集

春陽堂 昭四

新日本史綱 (兒玉九十共著)

光文館

*日本宗教史の研究

教育研究会 昭三

*日本文化史の研究

教育研究会 昭一二

増訂 日本歴史

博文館

室町時代史

(大日本史講座第五) 雄山閣 昭五

中野重治 大二三 文乙

*歌のわかれ

新潮社 昭一五

鶉の宿

筑摩書房 昭二三

汽車の罐焚き

小山書店 昭一五

*空想家とシナリオ 新日本社 昭二三

藝術に関する書的覺之書 改造社 昭四

子供と花

沙羅書房

*斎藤茂吉ノート

筑摩書房 昭一七

小説の書けぬ小説家

竹村書房 昭一二

*樂しき雑談 I・II

筑摩書房 昭二三

鉄の話

新興出版社 昭二一

*時のうごき

プレブス 昭二三

中野重治隨筆抄

筑摩書房 昭一五

ナツブ七人詩集 (編)

白揚社 昭七

日本文化の諸問題

新生社 昭二一

*春さきの風

筑摩書房 昭二三

*文学のこと・文学以前のこと 解放社 昭二三

雪の下

邦珂書店 昭二三

*夜明前のさよなら (新鋭文学叢書) 改造社 昭五

流民詩集 (小島秀雄著) 編 三一書房 昭二一

レーニンのゴリキールへの手紙 (訳) 叢文閣 昭二

中村可雄 明二八 一法

ウイリヤム・セエキスピーヤ (世界歴史譚二) 博文館

中村八太郎 明三四 三 医博

病理学総論 (速水猛著改訂) 南江堂 昭四

中村康大八 三 医博

眼鏡学

金原商店 昭一〇

眼鏡処方解説

〃 昭一〇

眼鏡の選び方

〃 昭一四

眼疾患と他疾患との関係 (上)

〃 昭一四

眼疾患と他疾患との関係 (二)

〃 昭一四

図説トラウマ診断及び治療

〃 昭一四

中谷宇吉郎 大一一 理甲

理博

*一般物理実験

(物理実験学二) 河出書房 昭一四

*科学小論集

(吉田順五共著) 生活社 昭一九

科学の芽生へ

(日本叢書二二) 生活社 昭二〇

*雷

(岩波新書) 岩波書店 昭一四

雷の話

(小國民のために) 岩波書店 昭一七

*氣體内の電氣現象

(岩波講座物理学及化学) 昭五

寒い國

(小國民のために) 岩波書店 昭二〇

*実験測定法

(岩波講座物理学) 昭一五

霜柱と凍土

(日本叢書一) 生活社 昭二〇

*樹氷の世界

甲島書林 昭一八

*春草雑誌

生活社 昭二三

*寺田寅彦の追想

甲文社 昭二三

*日本の科学

創元社 昭一五

榆の花

村の科学社 昭二三

*榆の花

甲文社 昭二三

火花放電の近年の研究

(科学文献抄二) 岩波書店 昭二一

*物理実験室裝備

(物理実験学一) 河出書房 昭一四

*冬の革

(中村清二共著) 岩波書店 昭一三

*続冬の革

甲島書林 昭一五

*第三冬の革

甲島書林 昭一六

*雪

(岩波新書) 岩波書店 昭一四

鳴澤寡 愼 大二 一文

コンラッド「青春」講義 健文社 昭九

コンラッド「颱風」講義 健文社 昭九

ワグネル「ピュアリスクリー」(訳註) 健文社 昭七

南日 實 大五 二工

材料強弱及弾性学

養賢堂 昭一九

*材料力学 上下 養賢堂 昭一九

西久元 明四〇 二理 理博

*ラマン効果 (物理実験学八) 河出書房 昭一五

西崎 一郎 大二 文甲

英文法要訳

時事英語社

チエイムズ・トムスン (英米文学部傳書二二)

研究社 昭二三

A Shorter Latin Course.

北星堂

Eminent Historians.

北星堂

Lafadio Hearn's American Articles. Ed. by

Nishizaki. 5 vols.

北星堂

Lafadio Hearn's Lectures. Ed. by Nishizaki. 4

vols.

北星堂

西田幾多郎 明二二 在学 文庫

*アウグスチヌスの自覚 (世界思潮六) 岩波書店 昭三

*意識の問題 岩波書店 大九

*一般者の自覚的体系

岩波書店

西田幾多郎 永遠の影

齊藤書店 昭二三

*廓堂 片影

教育研究会 昭六

*希臘哲に於ける「有るもの」 (世界思潮六) 岩波書店

昭三

*形而上学序論 (岩波講座哲学一四)

昭八

*藝術と道德

岩波書店 大一二

*現代に於ける理想主義の哲学 弘道館 昭二

*國家理由の問題 (岩波講座倫理学八) 昭一六

*自覚に於ける直観と反省 岩波書店 大六

*思索と体験 千倉館 大四

*増訂 思索と体験 岩波書店 大八

*統思と体験 岩波書店 昭一二

*実践哲学序論 (岩波講座倫理学二) 昭一五

*寸心日記 (アデネ文庫) 弘文堂 昭二三

*善の研究 弘道館 明四四

*善の一研究 岩波書店 昭一一

*父西田幾多郎の歌 (西田静子編) 明善書房 昭二三

*哲学と教育 (岩波講座教育科学一八) 昭八

*哲学の根本問題 (岩波全書) 岩波書店 昭九

*哲学の根本問題 統編 (岩波全書) 昭一〇

*哲学論文集 第一 昭一二

* 第二 昭一四

* 第三 昭一六

* 第四 昭一九

* 第五 昭二〇

* 第六 昭二〇

川行道 明三一 一法

最新商工経営 文修堂 昭六

商人読本文修堂

ブツシグ講義

龍夫 明三四 一文

起信哲学

孔夫子傳 文明堂 明三七

* 孔夫子傳 文明堂 明三七

國民道德概論

實踐倫理概説 昭八

儒教哲学概論 博文館

小さい國民道德

小さい倫理学

日本高僧の人格

日本武士道史

日蓮聖人

日蓮聖人傳 興文館 明四四

佛教倫理学 博文館

倫理学概説 廣文堂 昭五

倫理と宗教 興文館

仁瓶 平二 明三八 二農

*あて「羅漢柏」 石川縣山林会 大六

野口保市郎 明四 一文

*訂正 経済地理学総論 泰文社 昭一五

人文地理学概論 泰山書店

新撰東洋歴史 (実業学校用) 精興社 昭一二

野崎 廣義 明四二 一法

*無窓遺稿 (小笠原秀実編) 六條活版 大九

野田 淨曜 大一一 一文

独和対訳 リック 哲学の概念に就いて 南山堂

野田 勢次郎 明三六 二理

*中支那及南支那 東京地学協会 大六

野村 行一 明三九 一文

悲劇 エミリア・ガロットイ (レッシング作) 訳 岩波書店 大一一

独和対訳 犯罪人 (シルレル作) 訳 南山堂

*ミヒヤエル・コールハース (クライスト作) (加藤惇二郎共訳)

岩波書店 大一一

悲劇 ミスサラサムフソン (レッシング作) 訳 岩波書店

ミンナ・フオンバルンヘルム (レッシング作) (独逸文学叢書二) 訳 岩波書店 大一一

野村 淳治 明三〇 一法 法博

*行政法各論拾遺 (現代法学全集三七) 日本評論社 昭六

*行政法総論 (現代法学全集二八・二九) 日本評論社 昭五

行政政治総論 上巻 日本評論社 昭一二

行政法総論 (プリント) 啓明社 昭一二

行政法各論 (プリント) 啓明社 昭一二

國法 学 第一分冊 東京プリント 昭一〇

乗杉 嘉壽 明三四 一文

上野兒童音樂園樂譜 共益商社

音樂・中等音樂 帝國書院

橋本 芳契 昭六 文甲

*たちあがる学園 (編) 清水書店 昭二三

佛教 辞典 (宇井白壽修監) (編) 大東出版社 昭二三

長谷川 秀治 大八 三 医博

結核ノ化学療法ニ関スル研究 化学療法研究会 昭一七

長谷川 貞一郎 明二三 一文

万国読史系譜 (他二名共著) 富山書房 明三九

長谷川 福平 明三一 一文

古代小説史 明三六

*訂改 帝國読本 卷一至七 (芳賀矢一編) (上田万年共訂補) 富山書房 昭四

八田 四郎次 大五 二工 工博

*化学工学 (他二名共著) 丸善 昭一五

*化学工学概論 共立社 昭二二

蒸溜・吸收 共立社 昭二二

濾過及粉碎と其の機器 共立社 昭一〇

八田 三喜 明二七 二理

*入学から卒業まで 高等学校生徒の学業 新潟高校 昭九

花山 信勝 大七 一文 文博

原本校註 漢和対照 往生要集 小山書店 昭一二

*憲法十七條の精神 厚德書院 昭一八

*空海 (岩波講座世界思潮四) 岩波書店 昭三

聖德太子 (日本全書) 樂浪書院

聖德太子の佛教 佛教年鑑社 昭一一

勝鬘經義疏の上宮王撰に関する研究

岩波書店 昭一九

日本佛教 三省堂 昭一九

*日本佛教と教育 (岩波講座國語教育一二) 岩波書店 昭一二

*日本佛教の特質 (岩波講座東洋思潮一六) 岩波書店 昭一一

日本佛教の歴史と理念 (小野清一郎共編) 明治書院 昭一五

平安時代の佛教 (岩波講座日本歴史一三) 岩波書店 昭九

*聖德太子 法華義疏 (校訳) 上下 (岩波文庫) 岩波書店 昭六・八

*聖德太子御製法華經義疏の研究 (東洋文庫論叢一八) 昭八

林 安 繁 明二九 一文

*宇治電之回顧 宇治電ビルディング 昭一七

*柿のへた モダン日本社 昭一五

*随筆屑籠 田中印刷出版 昭一一

*隨筆紅一点 印刷工廠 昭二七
 *隨筆砂上偶語 実業之日本社 昭二二
 *隨筆豆腐のから モダン日本社 昭二三
 *南窓綺言 印刷工廠 昭一九
 *白雲深処漫筆 自第一 田中印刷出版 昭七・九
 *満鮮遊記 田中印刷出版 昭二〇
 林 政 武 大四 一法
 *隨筆集録地帯 北國毎日新聞社 昭一六
 原 田 準 平 大 一〇 二理 理博
 ジョーリー 地殻の輪廻 古今書院 昭三
 本邦各火山文獻集(明治大正年間) 古今書院
 原 勇 三 明四五 三 医博
 外科臨牀鑑別断学 克誠堂
 平 泉 澄 大四 一文 文博
 關齋先生と日本精神 至文堂 昭九
 *菊池勤王史 菊池氏勤王顯彰会 昭一六
 *建武中興の本義 至文堂 昭九
 *江都督納言顯文集 三秀舎 昭四
 *國史学の骨髓 至文堂 昭九

*後法興院記 上・下 至文堂 昭三
 *順德天皇を仰ぎ奉る 建武義会 昭一七
 *白山本神皇正統記 四冊 三秀舎 昭八
 *中世に於ける國體觀念(岩波日本歴史 一) 岩波書店 昭八
 *中世に於ける社寺と社会との關係 至文堂 大一一五
 *中世に於ける精神生活 至文堂 大一一五
 *忠と義 昭一〇
 *傳統 至文堂 昭一七
 *万物流轉 至文堂 昭二二
 *武士道の復活 至文堂 昭二二
 *保元平治の乱と平氏(岩波日本歴史 二) 岩波書店 昭九
 *我が歴史觀 至文堂 大一一五
 平 澤 興 大九 三 医博
 大腦皮質に於ける中枢問題(小池上春芳著) 山雅房 昭一八
 ！人類的脳！ 軟傍書房 昭一八
 平野啓司 明四四 三 医博

胃潰瘍は治る 人文書院 昭一四
 平野武文 明四二 二工
 測量学演習 國民社 昭三二
 實地測量要覽 鐵道圖書局
 平野復男 明三八 一法
 *句集鵬 浜田印刷 昭一九
 福田 實 昭一〇 文乙
 女の一生(シュニツラー作)訳
 米國現代史(アレン著)訳 改造社
 藤井 昭 大八 一法
 美学原論(キェルペ著)訳 東京堂 大一一四
 藤岡作太郎 明二三 一文 文博
 *鎌倉室町時代文学史 大倉書店 大四
 *近古小説解題(平出鏗二郎著)補 大日本圖書 明四一
 *近世絵画史 金港堂 明三六
 *近代小説史 大倉書店 大六
 *新國語教本 全十冊 開成館 明四一
 國語教本備考 大倉書店 明四一
 國史綱 大倉書店 明二九

*國文学全史 平安朝篇 東京開成館 明三八
 *國文学史講話 東京開成館 明四一
 *異山家集附西行篇 本郷書院 明三九
 *松雲公小傳 國文学史・日本評論史 築池活版 明四二
 *東圃遺稿 國文学史と風俗 大倉書店 明四四
 *東圃遺稿 雜纂 大倉書店 大元
 *日本史教科書 上・下 大倉書店 明三二
 *日本風俗史 上・下(平出鏗二郎共著) 東陽堂 明二八
 *新日本文学史教科書 開成館 明三七
 *日本文学史教科書備考 大倉書店 明三五
 藤田外次郎 明二七 二理 博文館 明四一
 *近世幾何学 博文館 明四一
 *商業商業数学 商業書 明四一
 *初等微分積分学(刈屋他八次郎共著) 金刺芳流堂 明四四
 *新数学講義(文部省検定) 上下 博文館 明三八
 *新数学公式附要項及び諸表(刈屋他八次郎共著) 山海堂 昭八
 初等数学問題集平面幾何 山海堂
 藤中 博 大一二 理甲
 初等微分学の研究 文進堂

布施現之助 明三四 三 医博

実業
問答養生訓

古谷健太郎 大九 二理

高等物理学 三省堂 昭一五

古山茂夫 明四三 一法

親族法註解 酒井書店

相統法註解 酒井書店

日置謙 明二七 一文

*一向一揆と富樫氏 (校訂解説) 石川縣圖書館協會 昭九

*石川縣史 自第一 (編) 石川縣 昭二

*石川縣史 (改訂版) 自第一 (編) 石川縣 昭一三

*石川縣史要 石川縣 昭七

*異部落一卷 (校訂解説) 石川縣圖書館協會 昭七

*老の路種 (上田耕著) 校訂解説 金沢文化協會

*御夜話集 上下 (〓) 石川縣圖書館協會 昭八—九

*可觀小說 前後編 (青地礼幹著) 校訂解説

金沢文化協會 昭一

*加賀志 徵 上下 (校訂解説) 石川縣圖書館協會

昭一—二

*加賀藩御定書 前後編 (〓) 金沢文化協會 昭一

*金沢古蹟志 自第一 (森田平次著) 校訂解説

金沢文化協會 昭八—九

金沢小観 昭七

*樂晚莊隨筆加能外史 金沢文化協會 昭二

*加能郷土辞彙 金沢文化協會 昭一七

*加能越金砂子 (校訂解説) 石川縣圖書館協會 昭六

*加能越氏族傳 (〓) 昭一

*修加能越大路水経 (〓) 昭六

*加能越三州地理志稿 (〓) 昭九

*加能越良民傳 (〓) 昭八

*加越能古書大観 上下 (〓) 昭一

*加藩貨幣錄 (〓) 昭一〇

*龜の尾の記 (〓) 昭七

*旧條記 (〓) 昭八

*國事雜抄 上中下 (〓) 昭七—八

*國事昌披問答 (〓) 昭六

*芝居と茶屋町 (〓) 昭七

*三壺聞書 (〓) 昭六

*三州奇談 (校訂解説) 石川縣圖書館協會 昭八

*浚新秘策 (青地礼幹著) 校訂解説 金沢文化協會

昭二

*錢屋事件詮議留 (校訂解説) 石川縣圖書館協會 昭七

*長氏と畠山氏 (〓) 昭九

*能登路の旅 (〓) 昭七

*統能登路の旅 (〓) 昭九

*能登名跡志 (〓) 昭六

*櫛葉越枝折 (〓) 昭八

*寢覺の螢 (〓) 昭六

*菱憩紀聞 (〓) 昭六

*白山比咩神社文獻集 (〓) 昭一〇

*咄隨筆 (〓) 昭八

*麦水俳論集 (〓) 昭九

*白山所屬爭議 (〓) 昭九

*藩國官職通考 (〓) 昭七

*稗史 上下 (〓) 昭一〇

*秘要雜集 (〓) 昭七

*前田氏戰記集 (〓) 昭一〇

*水戸浪士西上錄 (〓) 昭九

日置陸奥夫 大一 理乙 医博

結核の早期診断と治療 日本医書出版 昭三二

内科診断学 (大里俊吾共著) 南山堂 昭一〇

細川公正 昭一〇 文乙

*神國觀の一考察 (日本諸学研究七) 刀江書院 昭二六

*中世武士社会の研究 (〓) 刀江書院 昭二六

堀孝治 大三 二理

搬送波電信電話 共立社

毎田周一 大一五 理甲

*雜阿含無常經讃仰 海雲洞 昭二三

*哲学概説 昭五

牧陸泰 明四三 二農

入間川流域農業水利調査報告

熱地農業水利学 丸 善

農業工学 丸 善

農業水利造構学 丸 善

新編農業土木学 地球出版社

農業土木学通論 地球出版社

半世紀間台灣農業水利大観

増田 惟茂 明三八 一文 文博

*実験心理学 岩波書店 昭八

*実験心理学序説 前篇 至文堂 大一一

*心理学 上下 (岩波講座哲学六・九) 岩波書店 昭九

*心理学研究法 (岩波講座教育科学二) 岩波書店 昭九

*心理学概論 甲子社書房 昭七

*心理学概論 小山書店 昭一六

*動物心理学 (ホルムス著) 訳 不老閣 大三

松井 太郎 明三八 三 医博

対症耳鼻咽喉科学 金原商店 昭一九

松本 信一

皮膚病学 前後 南江堂 昭一一

皮膚病学 前後 南江堂 昭三九

松井 知時 明二六 一文

新和佛辞典 (上田駿一郎共著) 大倉書店 大一一

*佛語の発音及文法 大倉書店 大五

*佛蘭西語教科書 大倉書店 大五

*佛蘭西文典 上下 博文館 明四二

丸井 清 明四二 三 医博

季節と精神変調 日本医書出版 昭二二

持続睡眠療法に就いて (臨牀医学講座) 上・下 金原商店 昭四

小兒期精神の衛生と精神分析学 克誠堂 大一一

精神病学 金原商店 昭一八

精神病の話 羽田書房 昭二二

精神分析療法 (輿近神経官能症学総論) 前編 克誠堂 昭三

精神分析療法 (輿近神経症学) 各論 克誠堂 昭一三

三浦 百重 大三 三 医博

主なる精神病の薬剤療法 金原商店

右田 正男 大一一〇 二理 理博

*水産と化学 (海洋科学叢書) 天然社 昭一九

水上 一久 昭七 文甲

鹿兒島縣史 第一卷 (編)

密田 良太郎 明四〇 二工 工博

水銀整流器 (青木敏男共著) アルス 昭一四

変電所電動機應用 アルス

松本文三郎 明二三 一文 文博

*印度佛教美術 丙午出版社 大九

極樂淨土論 明三七

金剛經と六祖壇經の研究 大証閣 大八

*支那佛教遺物 隆文館

宗教と哲学 丙午出版社

宗教と哲学 創元社 昭一九

*先徳の芳鑑 磨 (國民学藝叢書二) 東亞堂 大四

達 磨 (國民学藝叢書二) 東亞堂 大四

東洋の古代藝術 岩波書店 大一一

*東洋文化の研究 同文館 大一一

*究佛教藝術とその人物 創元社 昭一九

*佛教史の研究 弘文堂 大一一

*佛教史の研究 弘文堂 昭四

佛教史論 京都市星堂 昭四

*東山 佛教徵古錄 廣文堂

佛典の研究成果 丙午出版社 大三

*佛典の研究 弘文堂

*佛典批評論 弘文堂

彌勒淨土論 丙午出版社

皆見 省吾 大三 三 医博

通俗性花柳病の常識 大一一

花柳病の話 金原商店

皮膚病の鑑別並に療法 金原商店 昭一一

誤診し皮膚病の鑑別並に療法 金原商店 昭一一

南 俊 治 明四五 三 医博

鉦山 衛 生 (横手衛生叢書二二) 金原商店

南 大 曹 明三三 三 医博

胃腸病診断及治療学 明四三

胃病及腸病 (日本内科学全書 卷三二・五册) 吐鳳堂 大一一

食道胃及腸疾患 南山堂

内外疾患食養療法 明四三

南 弘 明二六 一法

國家学

政治学

水毛 生伊作 大七一 一文

*作家を中心と最近の日本文学 弘道館 大一一

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

三輪 和敏 昭九 文乙

童話教育論 河出書房

武藤文雄 昭三 文甲

勞務統制法 日本評論社 昭一六

村上辰午郎 明二八 一文

教育学講義 芳流堂

農業用國語漢文讀本

最近式催眠術 芳流堂

最新實驗催眠術講義 芳流堂

實踐倫理講義 芳流堂 明三五

精神統一心理實驗 明文堂

*村上式注意術講話 明文堂 大四

注意術の手ほどき 芳流堂

*日本國民道德 南郊社 大一一

農業修身書

農業修身教科書

村上常太郎 明四一 一法

クリッペン事件

改造社

*知能犯篇 (防犯科学全書五) 中央公論社 昭一〇

村上不二雄 昭五 文甲

詩の原理 (ボウ著) 訳研究社 昭一〇

世界お伽集 (ラング編) 訳文友社 昭一三

村松俊夫 大二三 文甲

民事裁判の研究 日光書院 昭一三

森 卷 吉 明三四 一文

全スケッチ・ブック 上下 尙文堂

Girls New Royal Readers. 三光堂

Girls Royal Readers. 〃

New Light Readers. 〃

New Standard Readers. 〃

森 山 啓 (森松慶治) 大一一 文甲

海の扇 新潮堂 昭一七

*遠方の人 甲鳥書林 昭一七

萱 原 青木書店 昭一八

ゲーテ詩集 (訳) 白楊社

*笹村一家と光枝 白山書房 昭二三

*弔鐘は沈黙する (ハイネ作) 訳 白楊社 昭八

日本海辺 短篇・詩 (新農民文学叢書) 昭二四

渚 東邦書林 昭二一

プロレタリア詩の爲に 白楊社 昭七

文学論 三笠書房 昭一〇

文学論争 ナウカ社 昭一〇

文藝評論 河出書房 昭一三

森山守次 明二九 一法

商業欧米商業実勢

政治史 博文館

松平伊豆 (少年讀本 二八) 博文館

マッテルニツヒ (世界歴史譚 三〇) 博文館

矢木久太郎 明二四 二農 農博

醸造学総論 (奥村順太郎共著)

醸造学各論 前 (奥村順太郎共著)

山崎延吉 明二七 二農

田舎草紙 中央報徳会 大八

興亞農民読本 富民協会 昭一四

更生農村の教育 質文館 昭九

我農生三十年興村行脚 還曆祝賀刊行会 昭七

斎家の栞 泰文館 昭三

網栽培汎論教科書 盛林堂

自治と民育 中央報徳会 大六

修身教本農民道 盛林堂 昭五

食糧の独立 中央報徳会 大六

親愛なる青年へ 泰文館 大一一

生 泰文館 昭九

農村の全村学校 泰文館 昭四

網蔬菜教科書 盛林堂

村民訓 泰文館 昭六

網畜産教科書 盛林堂

地方改良話 盛林堂

網土壌教科書 山口屋

農家経済講話 二松堂

農家小年訓 中興館 大四

農家の経済 農華房 大二

農業経営 富民協会 昭五

農村教育論 洛陽堂 大三

農村経営 求光堂

農村計画 泰文館 昭二

農村忌避 日本青年館 大一一

農村自治 求光閣

*農村自治の研究 永東書齋店 明四一

続農村自治の研究 竹村書店 昭八

農村自治の話 二松堂

農村自治要義 日進堂 大五

農村瑣談 泰文館

農村小話 中央報徳会 大五

農村青年の指導 止善堂 大四

農村と青年

農村の経営 裳華房 大四

農村非常時と農民道の真髓 日本評論社 昭九

農道説話 泰文館 昭五

農民教育 二松堂

修身農民道 盛林堂

農民道 武藤書店 昭五

鮮訳農民道 帝國地方行政学会 昭九

農民の活路 賢文館 昭一〇

農民の訓練 裳華房 大五

網肥料教科書 盛林堂

婦人の覚醒 中央報徳会 大六

民育要義 日進堂 大五

*山崎延吉全集 全七巻 弘道閣 昭一〇

第一農村自治篇

第二農村建設篇

第三農村教育篇

第四農家経営篇

第五農民道篇

第六農村講演篇

第七農村更生篇

優良町村の建設 中央報徳会 大七

世に立つ道 泰文館 昭一六

我学生回顧録 弘道閣

若き人々・泰文館 昭一六

我青年及青年團 興風書院 大四

我をして町村会議員たらしめば 全國町村長会 昭五

我をして町村長たらしめば 帝國教育会 昭四

山崎一雄 大七 一文

*ミ ト セ (歌集光る雨) 白雨社同人 大七

山崎 麓 明三八 一文

洒落本大系 全十二巻(他二名篇) 六合館

洒落本評釈 武蔵野書院

小説史 雄山閣 昭三二

*日本小説年表附総目録 國民図書 昭四

(近代日本文学大系二五)

註釈万葉全集 百漱書店

山田詩郎 明四三 三 医博

心臓機能不整の診断並治療 克誠堂

内科医治療の仕方 金原商店

内科医臨牀の爲に 金原商店 昭一〇

予後及附隨症狀・合併症・併発症・後胎症ノ治療

山田敏一 明四三 一文

欧米労働教育 金原商店 昭一四

山田正三 明三九 一法 法博

強制執行法 弘文堂

日本民事訴訟法概論 第一・二 弘文堂 昭一六

破産法 弘文堂

判例批評民事訴訟法 第一・二 弘文堂 大一四

改正民事訴訟法 四巻 弘文堂 昭三

民事訴訟法判例研究 (一) 弘文堂

山田陽清 明四三 二工 工博

河川及運河 (綜合工学三二) 昭四

*最小自乘法 大倉書店 大九

*鉄筋混凝土運桁に就いて

*発電水力 第一編 総論 九 善 昭二

第二編 堰堤及導水工事 〃 昭三

第三編 機械及電気工学 〃 昭四

第四編 結尾 〃 〃

発電水力の話

矢部克己 明三六 一法

海商法 日本大学 大一一

小切手法 松華堂 昭一〇

手形法論 上下 巖松堂 大二三・二四

山本與吉 大三 一文

*マアロウ (英米文学評論叢書四) 研究社 昭九

民主主義の基本観念 (公民叢書二) 北國毎日新聞社 昭二一

山本良吉 (金田良吉) 明二 在学

- 学修身教科書 五册 光風館
新訓練論 教育研究会
静修書目答問 博文館
實踐倫理要義
西洋倫理學史
大正女子修身書 五册 弘道館
中学研究 同文館
発動主義の教育 弘道館
- 吉岡修一郎 大一一 理甲
*科学逸話史 (科学史叢書) 山雅房 昭一七
*ゲシュタルトの根本原理 内田老鶴圃 昭二〇
現代フランス哲学 三笠書房
算術と数学の歴史 誠文堂 昭一六
*ベルグソン・思想と動くもの (訳) 第一書房 昭一三
*数学千一夜 東方物産 昭二一
*数学茶話 東方物産 昭二一
*数学文化史 河出書房 昭一四
*数学バレード 兼六書院 昭二二
*数と時間空間の哲学 光の書房 昭二二

- 実業 幾何教科書
学校 幾何教科書
高等代数学
増補算術講義
算術自習書
実業教育 算術及代数之部
実業教科書 算術及代数之部
学校算術代数教科書
実用解析幾何学講義
中学 数学教科書 算術之部 上下 (寺尾壽共編) 富山房 明三九
中学 数学教科書 代数之部 (寺尾壽共編) 富山房 明四〇
中学 数学教科書 幾何之部 (寺尾壽共編) 富山房 明四一
中学 数学教科書 三角之部 (寺尾壽共編) 富山房 明三九
*きーぱーと積分学 (訳) 富山房 大四
増補代数学講義 芳流堂
*きーぱーと微分学 (訳) 富山房 大一一
*中等 平面幾何 (寺尾壽共編) 富山房 明四五
*でいしう 平面幾何学研究法 (訳) 富山房 大三
平面幾何学詳解講義 芳流堂
*平面三角法 (藤野了祐共著) 富山房 大二
平面三角法講義 富山房 明四五
*中等 立体幾何 (寺尾壽共編) 富山房 明四五

- 数とロマンス (数学隨筆) 誠文堂 昭一四
数のシーズン 誠文堂 昭一五
数学のユーモア 誠文堂 昭一四
ベルグソン・創造的進化 (訳) 前編 東方物産 昭二一
ベルグソン・道徳と宗教 (訳) 第一書房 昭一四
日本女性史 十月書房 昭二三
ベルグソンと科学精神 第一書房 昭一一
*ベルグソン篇 (世界大思想選集) 第一書房 昭一五
*論理学 (朝日講座) 朝日新聞社 昭二三
*論理学の新体系 全國書房 昭二一
- 米林富男 大一一 文甲
キンボール・ヤング 社会心理学入門 (訳) 日光書院 昭五
都市社会学原理 食糧評論社
ゴールデンワイザー・文化人類学入門 (訳) 日光書院 昭六
- 吉田好九郎 明二六 二理
*数学漢訳算術之部
*補習 幾何学
*実業教育 幾何之部
*数学教科書 幾何之部
- 立体幾何学詳解講義 芳流堂
吉田弟彦 明三〇 二理
*満蒙鉱産指針 満蒙研究会 大六
吉田徳次郎 明四二 二工 工博
コンクリート及鉄筋コンクリート施工法 九善 昭二三
増訂鉄筋コンクリート設計法 養賢堂
吉田他吉 大六一〇
*公民道徳に就いて (社会教育資料五) 明治印刷 昭八
和田 明三六 三 医博
血液及血液病 上中下 南江堂 昭七
渡邊八郎 明四一 一法
皇國體の大義 春陽堂
國體と教育 春陽堂
渡邊 鼎 明四五 一文
*クローシエル・欧洲中世経済史 (訳) 中文館 昭九
*宗教改革 (世界歴史大系一八) 平凡社 昭九
鰐淵 源 大三 三
頭痛と耳鼻咽喉の疾患 日本医書出版 昭二二

あとがき

この目録の作業は最初創立六十周年記念事業の内卒業生
著書文庫設置の必要から著手されたのである。其の後右文
庫の設置は種々の事情で実現は望みうすくなつたが編纂の
方は継続され今度北辰会文藝部諸君の好意で印刷の運びに
至つたので喜ばしい事である。当初の目標からは異つたも
のであるがやはり記念事業の一部分をなすものと言つてよ
いと思ふ。

卒業生の著書は可成旧くから本校図書閲覧室の一隅に寄
贈を受けたものを中心に陳列されて居た。その後これは新
刊されつゝあるものを補給する事が出来なかつたのか次第
に閲覧者から反り見られなくなりそれに学習参考書を並べ
る場所の必要からついに取外さねばならなくなつたのは惜
しい事である。然し一方前任の方々がこの著書には可成の
関心を有つてゐたらしく時々ノートをとつて置かれたもの
である。

記念文庫設置事業が始められるや係主任の大沢先生が單
独で調査や各方面より報告されて来る著書論文の御整理に
当られその結果よりなる原稿を戴いて一應プリントにして
関係方面へ配布したのであるがその後は全くこれらの
ノートと原稿を基礎にして調査を進めたのに過ぎないの
である。

こゝに心からのお詫びせねばならぬ事はこの印刷目録か
ら論文及雑誌寄稿のものを全部省略せねばならなかつた事
である。凡そ学的業績はその著書だけではなく研究題目学

会講演學術報告其の他新聞雑誌の寄稿等あらゆるものを忠
実に記載せねば物語る事は出来ないと思ふ。少くとも発表
された學術論文は載せるべきであつたが紙数が許されなかつたのとこれに要する調査資料が只今のところ本校には殆
んど備つてゐなかつたので遺憾ながら甚だ片手落ちである
が單行本のみに止めざるを得なかつた。この内記念事業期
成会宛に論文の書名を報告された方々も少からずあつたが
この点は悪しからず御諒恕を御願ひする次第である。
目録の内本校所蔵以外は大部分他の資料を書写したので
正確が期しられないかも知れない。中には出版所、刊行年
の不明なものなどがありこれ等は著名図書館蔵書目録を参
照したが判明せなかつた。尚書名は分類する事著者名書名
には索引を附けることを忠告された方があつたがこれも
紙面が極度に限られてゐたのと印刷の時期が迫つてゐたの
で期待に添ふ事が出来なかつた。
この目録作業には終始一貫絶えず大沢先生から御指導を
いたゞいた。又プリントには工藤作平氏カード整理には卒
業生織田廣君に御手数を勞はした。又当地南陽堂書店柳川
昇爾氏は利益を度外視して著書の蒐集や調査に盡された。
これ等の方々に深く感謝の意を表したい。

昭和二十三年十二月六日

図書主任 藤井信英記

編輯委員

畑 尾 尙 雄
宮 川 隆 泰
今 村 義 昭
西 辻 明
西 田 正 夫

昭和二十四年一月二十九日印刷納本
昭和二十四年二月三十日發行 第百五十八號

(品賣非)

編輯兼發行者 第四高等學校文藝部
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷者 飯尾 龍三 郎
印刷所 石川縣金澤市高岡町九十番地
明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

